扇が丘ゴショ遺跡

伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る
扇が丘ゴショ遺跡第１～３次発掘調査報告

１９９８

石川県立埋蔵文化財センター

扇が丘ゴショ遺跡

伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る
扇が丘ゴショ遺跡第１～３次発掘調査報告

１９９８

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1．本書は石川県石川郡野々市町扇が丘地内に所在する扇が丘ゴショ遺跡第１～３次発掘調査の報告書である。

2．本調査は伏見川中小河川改良工事（高橋川）に先立ち、石川県土木部河川課、伏見高橋川治水工事事務所の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。

3．発掘期間と調査面積は以下の通りである。

第１次発掘調査　平成元年10月16日～同年12月16日　約1,100㎡

第２次発掘調査　平成２年４月23日～同年７月９日　約2,000㎡

第３次発掘調査　平成４年５月11日～同年５月28日　約　150㎡

4．発掘調査は第１・２次調査を主事木立雅朗が担当した。第１次調査では、調査員大藤雅男が、第２次調査では、主事浜崎悟司、同泉谷ゆかり、調査員大藤雅男が補助した。

第３次調査は木立と主事土屋宣雄が担当した。

5．出土遺物の整理は平成４年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行い、木立が指導した。

6．本書の編集・執筆は木立が行い、越田純子、池村ひとみ、山本澄美子が補助した。

7．出土した遺物や調査記録などは石川県立埋蔵文化財センターが一括保管している。

8．本調査の実施、および本書の編集にあたっては、石川県土木部河川課、伏見高橋川治水工事事務所、野々市町教育委員会、地元町内会のお世話になった。記して感謝の意を表したい。

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1

第２章　遺跡の環境……3

第３章　遺構……7

第４章　まとめにかえて……11

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおぎがおか　ごしょ　いせき
書　　名	扇が丘ゴショ遺跡
副 署 名	伏見川中小河川改良工事(高橋川)に係る扇が丘ゴショ遺跡第1～3次発掘調査報告
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	木立　雅朗
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒921-8044　石川県金沢市米泉4丁目133番地　　TEL 076-243-7692
発行年月日	西暦1998年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積 (㎡)
		市町村	遺跡番号				
おうぎがおか ごしょ 扇が丘ゴショ	いしかわけん の のいちまちおうぎがおか 石川県野々市町扇が丘	17344		36° 31′ 35″	136° 37′ 45″	19891016 ～ 19920528	3,250

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
扇が丘ゴショ	集落跡	弥生後期 古代 鎌倉時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 井戸 土坑	須恵器、土師器 陶磁器、石器	

第１章　調査に至る経緯と経過

伏見川から高橋川にかけての地区は考古学的な調査が遅れていた地域であり、遺跡のまばらな地帯として認識されていた。高度経済成長期以降急速に宅地化が進み分布調査が困難であった地域であり、手取川扇状地との複合地帯であるという地形的条件も遺跡の発見を遅らせた原因であったと思われる。しかし、1985年に野々市町教育委員会が行った押野タチナカ遺跡の発掘調査、1986年に石川県立埋蔵文化財センターが行った試掘調査による米泉遺跡の確認、1987年の発掘調査により、当地区には従来知られていなかった遺跡が存在することが明らかになった。そのため、周辺の開発についても十分な注意が必要であることを認識し、県が行っていた伏見川中小河川改良工事（高橋川）についても試掘調査を実施した。

当初、試掘は工事に着手していない荒川橋上流部分から順に行い、改修工事範囲に扇が丘ゴショ遺跡をはじめとして４遺跡を確認した。

平成元年に行った扇が丘ゴショ遺跡第１次調査では確認した遺跡の北半分を調査した。いくつかの土坑と畝溝や「畝溝状」遺構を確認したが調査区の東側の遺構密度はそれほど高くはなかった。調査区の西側が微高地状に高くなっており、比較的遺構密度が高かったことから、調査地点より西側に遺跡の中心があると推定された。南側については近代の高橋川とそれ以前の高橋川の変遷を確認した。発掘調査中は荒川橋の付け替え工事も併行して進められていた。

この第１次調査によって遺跡の中心が調査地点の西側であることを推測できたが、それとともに、調査地点の北側（下流側）にも遺構が延びることを確認できた。下流部分は仮護岸の工事がすでに行われており、遺跡が破壊されていると思われていたため、当初は試掘調査すら行っていなかった。しかし、発掘調査の知見を重視して念のため試掘調査を行ったところ、遺構が良好な形で残存していることが分かったのである。

そのため、平成２年度に行った扇が丘ゴショ遺跡第２次調査では第１次調査区の南側と新たに延長を確認した荒川橋以北の発掘調査を行った。調査区は重機による掘削を続けながら拡張していったところ、仮護岸区域の北端まで遺構が延びていることを確認した。しかし、これ以北については改修工事が終了していたため、調査はできなかった。本来、遺跡はさらに北側まで延びていたと推定される。この荒川橋以北の調査区では仮護岸工事が行われていたため、調査区の東側半分近くは遺構が削平されていたが、西側の残存部分の遺構密度は極めて高かった。ここでも遺構の中心はさらに西側であったと推定される。

付け替え工事が終了した荒川橋の真下部分についても調査を行ったが橋脚工事のためか、遺構密度は極めて低かった。しかし、削平されていたとしても特に深い遺構は存在しなかったと思われる。

その反面、第１次調査区の南側では数回にわたる河川の移動が確認できた程度で十分な遺構は確認できなかった。中世以降から近代に至る間の比較的新しい段階の高橋川の移動によって遺構が削平されていると思われる。

なお、第２次調査の段階では高橋川に降りる階段部分の土地買い上げが終了しておらず、あわせて調査できなかった。この部分については、平成４年度に改めて行った（第３次調査）。狭い面積であったにも係わらず、極めて多くの遺構が検出された。第２次調査で推測されたとおり、調査区の西側にかけては遺構の密度が高いことが確認された。

第2章　遺跡の環境

当遺跡は、石川郡野々市町の扇が丘・高橋町地内に位置する。この地点は手取川扇状地の扇端部分に位置し、その東側には伏見川扇状地が迫っているため、両扇状地の複合地帯となっている。当遺跡の西北付近はそうした扇状地に挟まれた低湿地帯となっていることが米軍が撮影した航空写真でも確認できる（図版1参照）。調査地点は現高橋川の左岸の拡幅工事部分であり、金沢工業大学の真西～西南部分にあたる。調査地点の中央部分に荒川橋がかけられている。

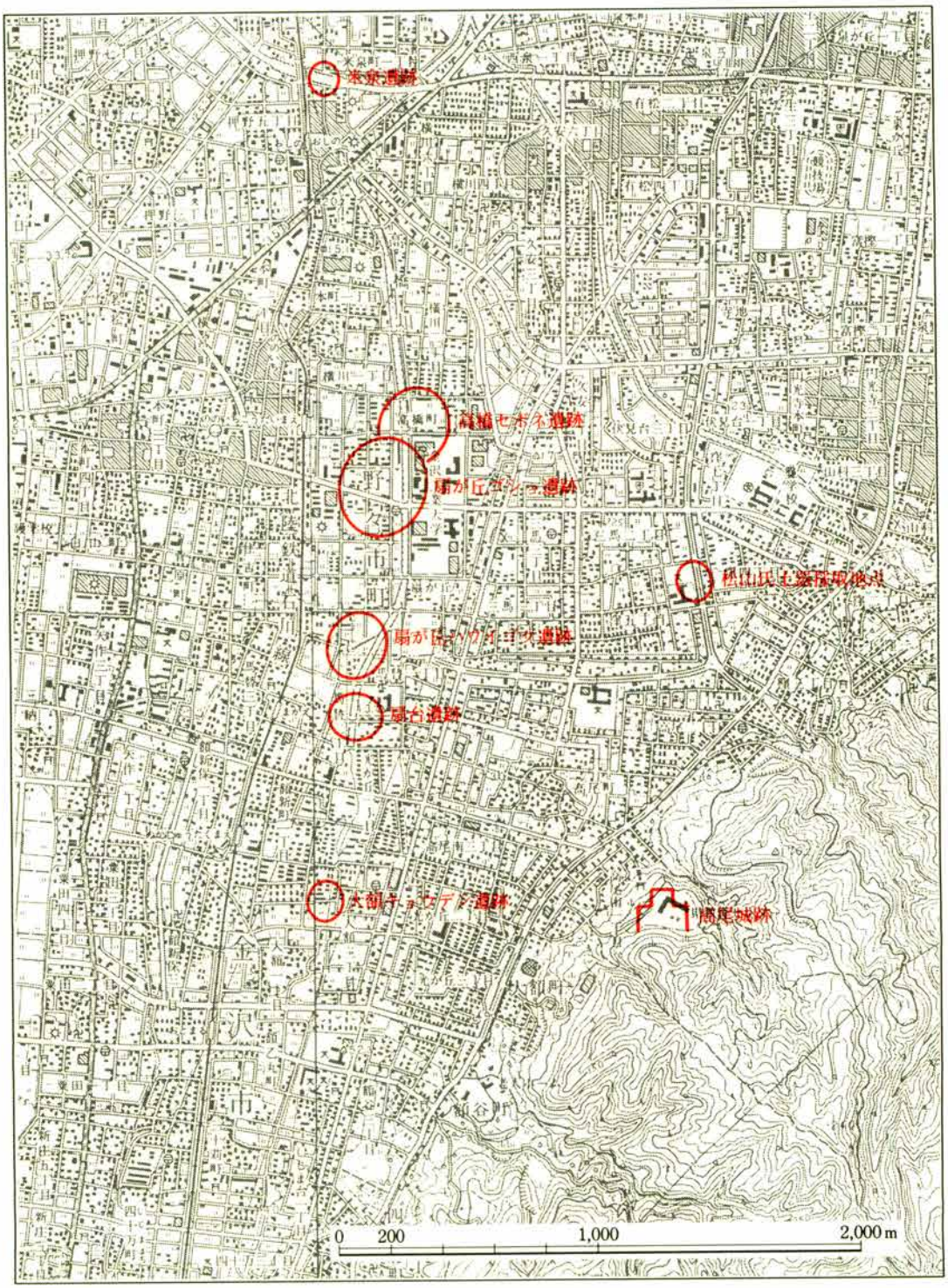
調査地点は通称「ゴショ」、もしくは「ゴショグチ」と呼ばれる地内に含まれており、遺跡名を扇が丘ゴショ遺跡と名付けた。富樫の館に関連した地名ではないかという指摘もあったが、富樫館跡の推定地はこれより西側になる。

野々市町教育委員会が1990・91年度に金沢工業大学の北に接した高橋セボネ遺跡の発掘調査を行っているが、これは当遺跡と一連の遺跡であろう。同一遺跡と言ってもよいかも知れない。現在は高橋川が両遺跡を分断しているが、地形的には手取川扇状地特有の痩せ尾根状微高地が南西から東北にかけて伸びており、扇が丘ゴショ遺跡と高橋セボネ遺跡はおなじ微高地の上に立地しているからである。扇が丘ゴショ遺跡は調査区北端からさらに北に延びることは確実である。その北端から高橋セボネ遺跡までは200mあまりの距離である。その間に遺構の空白があった可能性がないわけではないが、地形的にみて連続する可能性のほうが高いだろう。

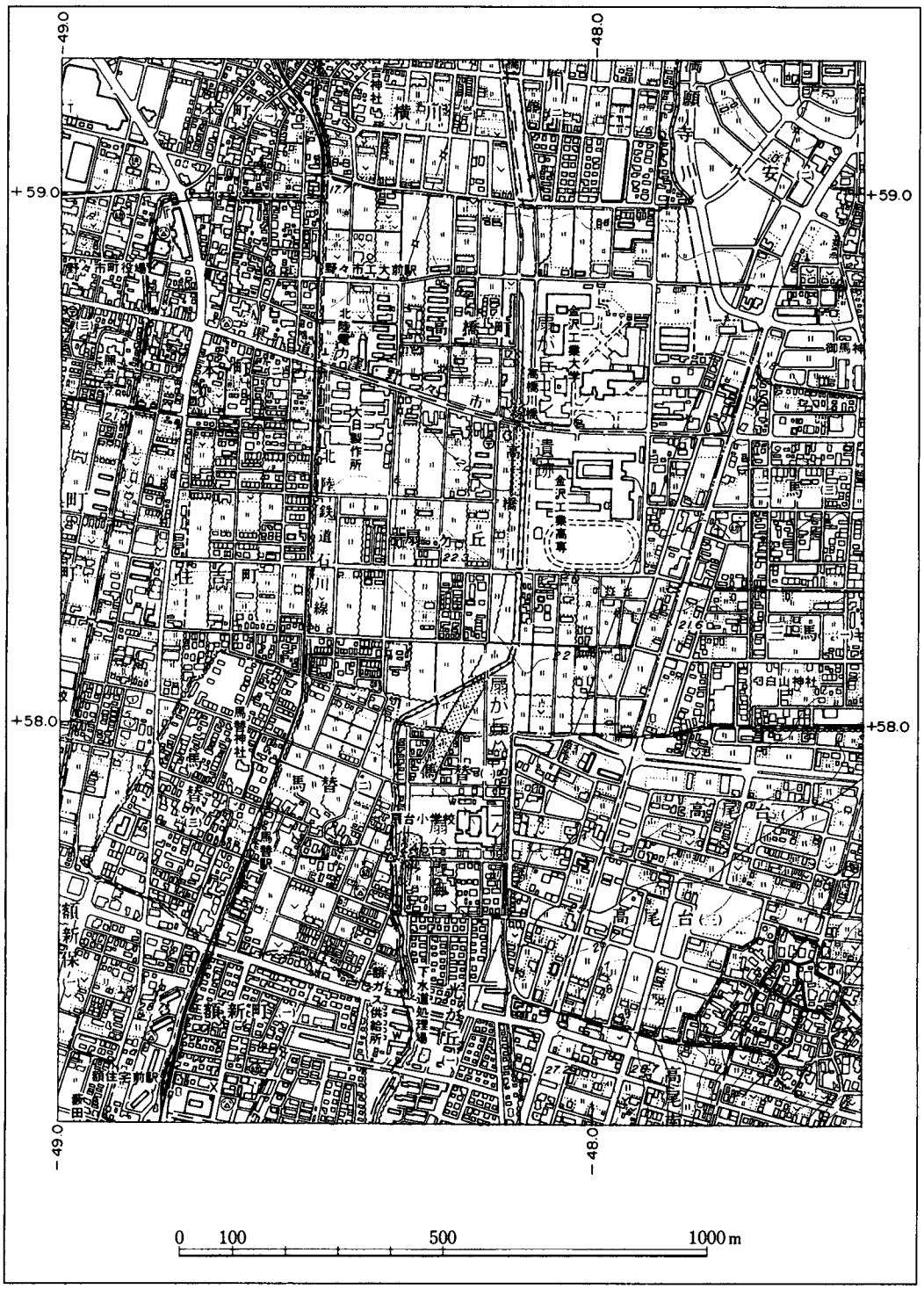
高橋川は近年の洪水対策のために拡幅を続けてきて現在に至っているが、水田用水が周辺の宅地化に伴って大きくなったにすぎない。当遺跡周辺の微地形から判断して、自然流路は当遺跡より東側の三馬方面の低地に集まっていたと思われる。現在は高橋川を境にして別れているように見えるが、高橋川の流れは微地形に沿っていない。

なお、扇が丘ゴショ遺跡と高橋セボネ遺跡が立地する微高地はそのまま南西方面にも伸びている。これが富樫氏の本拠地を形成する大きな微高地になっている可能性が高い。これらは大きな遺跡群を形成していたと推測されるが、現在のところ、その具体的な様相については十分に明らかになっていない。おそらく、高橋セボネ遺跡はそうした遺跡群の北東端付近に位置するのだろう。

ただし、高橋セボネ遺跡では縄紋時代の遺物も少量出土しているようだが、扇が丘ゴショ遺跡では極めて少なかった。その逆に扇が丘ゴショ遺跡では中世の遺構・遺物が一定量確認できたが、高橋セボネ遺跡では顕著ではないようである。弥生時代後期と奈良・平安時代の遺構・遺物は双方に確認できた。同じ遺跡群のなかに含まれるとは言え、時期ごとに異なった地点に生活域を移動していたと推測される。



第１図　扇が丘ゴショ遺跡の位置（縮尺1:25,000）



第２図　遺跡の位置（1:2,500）

松山和彦氏採集資料

図12－１～26は金沢市窪町、伏見台小学校の東南付近の都市計画道路建設中の工事現場で採集された遺物である。当センター主事松山和彦氏が1970年代の中学生頃に採集していた資料を松山氏のご好意で参考資料として資料化させて頂いた。遺物の年代は古墳時代後期の遺物が目立ち、奈良・平安時代、中世の遺物が少量確認される。このような遺跡が周辺には幾つかあったと推定されるが、扇が丘ゴショ遺跡もそのなかの一つであったのだろう。そうした遺跡群が古代には三馬郷や富樫郷の一部を形成していたと推定される。この遺跡は伏見川扇状地に位置するが、扇が丘ゴショ遺跡は手取川扇状地の末端に位置する。両者ともに古代には郷としてまとめられ、中世には富樫氏の基盤として成長した地域であることは間違いないだろう。間に沼地状の地形を挟むが、両者の地区が分断されていたのかどうかなど、今後検討してゆく必要があるだろう。

発掘調査されなかった点は遺憾であるが、周辺の遺跡群の動態と本遺跡の関連を知る上で貴重な資料である。

第３章　遺構

第１節　調査の概要と地区割り

調査区の地区割りは高橋川の方向を目安にして、任意に４ｍグリッドを設定して行った。調査区周辺では高橋川がほぼ南北に流れているため、グリッドもほぼ方位に沿ったものとなっている。グリッド名は隣接する金沢工業大学の図書館の方向を目印とした。すなわち、北東隅の杭名をグリッド名とした。東西をアルファベット、南北を数字とした。アルファベットは東から西へ、数字は荒川橋付近を基点にして北から南へと順番にふっていった。しかし、後に荒川橋以北も調査が必要であることが判明したため、０点以北を南から北へと順番にダッシュ付き数字で示した。

第２節　層位

当遺跡の層位は、手取川扇状地の諸遺跡で確認できるそれと基本的に変わらない。扇状地礫層が厚く堆積しており、その上に黄灰色細砂が覆う。この黄灰色細砂の土壌化した部分が遺構面となり、そこから弥生時代末～古代にかけての多くの遺構が切り込まれている。黄灰色細砂層の上には黒色シルトが堆積し、弥生時代末～古代の包含層になっている。その上面が中世以降の遺構面となり、上層の灰色シルト層が中世以降の包含層になっている。ただし、いつから覆土の色が、黒色から灰色に変化していくのか、漸移的な時期や遺構もあり、十分に明らかにできなかった。

中世以降の包含層の上層は床土と２枚程度の水田耕作土が堆積していた。広い範囲で確認でき、高橋川を主用水として周辺が水田開発されていた様子がしのばれる。第２・３次発掘調査区の西側では水田を埋め立てて土木会社の資材置場が作られていた。

第３節　遺構

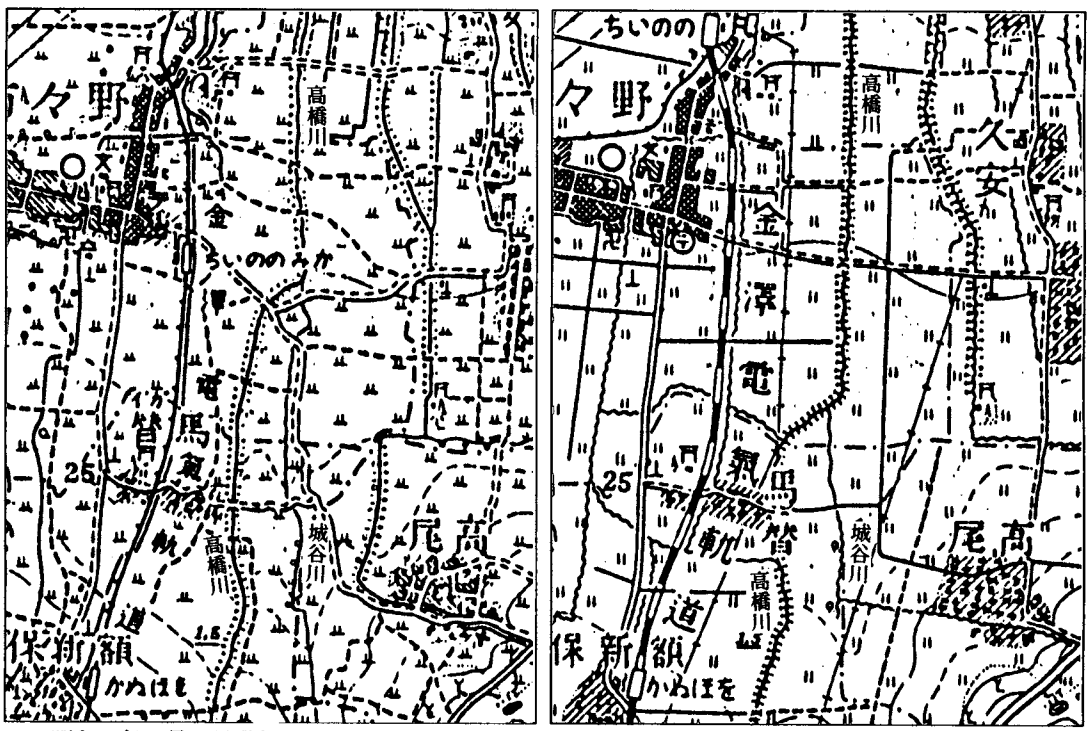
①荒川橋以南の遺構（第１次調査・第２次調査）

遺構の多くは荒川橋以北で確認された。荒川橋以南については、古代と推定される土坑と不明溝状遺構、近代に付け替えられたと推定される川跡などが確認された。川跡のうち、もっとも新しい東西方向のものは昭和初期に付け替えられた高橋川と方向が一致し、出土遺物も上層で採集されたものを見る限り矛盾しない。なお、この川については上層部分を下げただけで完掘しなかった。また、これに切られる南西から北東に流れる川跡も検出されたが、完掘しなかったこともあって遺物などが少なく、時期を確定できなかった。これらの川により中世以前の遺構が削り取られたものと推定される。部分的に削り残された地点では包含層や少量の遺物が確認できた。

ここで確認した「畝溝」状遺構のなかには、畑と判断できるものもあるが、黒色シルトを覆土とした特殊な遺構も確認された。溝状の断面をもたず、人為的な遺構ではない可能性もあるが、

性格は不明である（A・B－6・7区）。

また、東西方向に黄灰色シルト～細砂の地山を削り出した擬似畦畔が確認された。時期は不明だが、周辺が盛土される以前には水田であったと推定されるので、近代の水田にともなう可能性もある。



1．昭和2年6月30日発行　　2．昭和8年9月30日発行

第3図　地図から見た高橋川の変遷（1:50,000の地形図を2倍に拡大）

②荒川橋以北の遺構（第2次調査、第3次調査）

竪穴住居（SI201・202・301）

SI201は東側が削平されているが、方形で4本柱の竪穴住居である。

SI202は調査区の北端で約4分の1程度調査することができた竪穴住居であるが、この地点では遺構面がかなり低くなっていたためにかろうじて残存した遺構である。方形であったと推定される。甕形土器を床面に伏せた状態で出土した。この地点から東側は徐々に低くなっていったと推定される。また、ここと高橋セボネ遺跡とは200m程度しか離れておらず、高橋セボネ遺跡では同時期の竪穴住居が確認されることから、その関連が注目される。

SI301は上面が削平されて極めて浅くなっていたが、かろうじてプランを確認することができた。カマドが南辺の東隅近くに作られていた。地山の黄灰色シルトを張りつけて作られているようであった。多くの遺構と重複していることもあり、主柱穴などは確定できなかった。規模は極めて小さく、当地区における竪穴住居としては最終末のものと推定される。

掘立柱建物（SB201・202）

極めて多くのピットが確認されたにもかかわらず、調査区東側が削平されていたために建物を確認できなかった部分も多かったが、比較的遺構の少ない部分で２つの掘立柱建物を確認することができた。

SB201は調査区の北端付近で確認された総柱の建物である。時期は不明確だが、10世紀以降と推定される。東側が削平されているため、東側に延長していたかどうか判断しがたい。西側の調査区外に建物がのびることは確実であろう。南北方向は３間、南面に庇が付く。東西方向は最低３間以上あったと推定される。建物の方向は正方位に対して多少ズレている。この地点の微地形に左右されて傾いている可能性もあるが、SD201・220も類似した方位をとることから、周囲にこうした地区割りが施行された時期があった可能性も考慮するべきであろう。

SB202は方形の掘り方をもった２間２間の総柱の掘立柱建物である。掘り方の規模は一定していない。いくつかの柱穴をつなぐ浅い溝が確認され、特殊な構造の掘立柱建物として注目される。ただし、南側には同じ方向の畝状溝があり、これとの区別ができなかった可能性も全くないとは言えない。時期は８世紀代のものと推定されるが、遺物量が少ないために断定できない。この建物は先のSB201とは異なり、正方位にのっている。これより南側の畝状溝も同様でほぼ南北方向に掘られている。建物一棟と畝状溝の方向だけからの推測であるが、周囲にこうした地区割りが施行されていた可能性も考慮する必要があるだろう。

なお、畝状溝の時期を明確にできないが、覆土が黒色であることから、少なくとも古代かそれ以前（弥生時代後期よりは新しい）のものであることが分かる。

土坑（SK301・302・203・208・209）

SK301は断面が袋状を呈している。深い土坑だが、礫層の上面で掘削を止めているため、井戸ではないと判断できる。覆土の途中に大量の礫を投棄していた。西側は調査区の外にでるが、ボーリング調査によって、おおよそ断面図に破線で示した大きさになることがわかった。

SK302・203は中世の竪穴状遺構である。SK204・205・220も類似した竪穴状遺構であるが、いずれも６'～13'区の間に集中している点は注目される。これらの遺構では土坑内に柱穴が確認できず、土坑外の柱穴でも規則的なものが少ないため、上部構造が把握できない。SK204では土坑内に大きな扇状地礫を投棄していたが、SK204・205・220のいずれも時期を決定するような遺物が出土していない。SK302は、土坑内に土師器や中世陶器、扇状地礫、軟質凝灰岩製の石製品が出土した。

SK301とSK302から出土した石製品（344～353）と類似したものが、小松市の梯川流域の中世遺跡群でも確認される。梯川流域では鍵状の切り込みで組み合わせるものが確認されるが、当遺跡のものは単純な方形の柱状の形態をしている。一部を地面に埋めて周囲から火を焚いたと思われ、埋めた部分以外の面のほぼすべてに煤が付着している。囲炉裏やカマド状の遺構の部材と推測される。度も使用されていることが剥落面にも煤が付着する様子などから判断されるが、具体

的な使用方法や部位については不明である。あるいは、何らかの部材を火を使用する施設に転用した可能性もあるだろう。これらの遺物を投棄していた土坑では火を使ったような炭や焼土の類は確認できなかったため、どこか他の場所で、しかも遺構として残存しにくい地上式かそれに近い遺構で火を使用したと推測される。

SK208は棚状の横穴をもつ土坑である。SK305も同様の土坑である。出土遺物もほとんどなく、用途も不明である。

SK209は大量の土器を出土した土坑である。西側の調査区外にのびているため、形状は不明である。

井戸（SK202・206）

地山上層の黄灰色シルトの途中で掘削が止まっている穴を土坑、地山下層の扇状地礫層をくり抜いている穴を井戸と考えたところ、2基の井戸を確認できた。ただし、現在では扇状地の伏流水のレベルが低くなっており、水は全く湧いていない。

SK202は、調査直前の高橋川によって東半分が削平されていた。井戸側などの施設は確認できなかった。SK206でも井戸側などの施設を確認できなかった。SK206の壁は崩落によって2段階の袋状土坑のような形状態を示している。規模も小さく、崩壊しやすい素掘り井戸であった可能性もあるだろう。

土師器廃棄遺構（SX201・SD220（SX202））

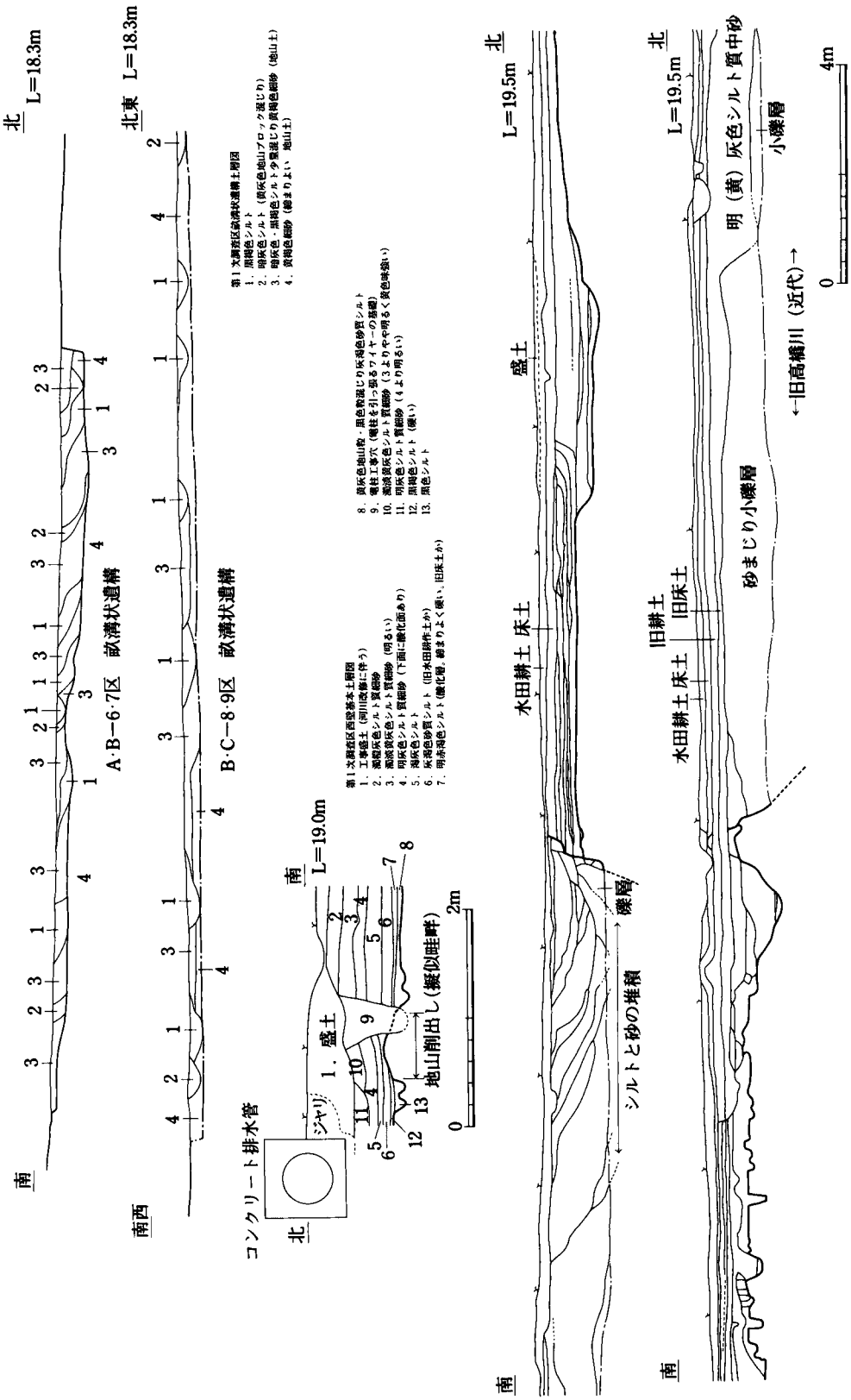
発掘調査にあたっては重機で表土を掘削したが、その際、中世の包含層の多くを削平し、古代の包含層を多く残した。しかし、一部には中世の遺物が削平されずに残され、大量の土師器を出土した地点が3箇所程度確認できた。

SX201は浅い溝状遺構のなかに土師器皿を大量に廃棄した遺構であった。

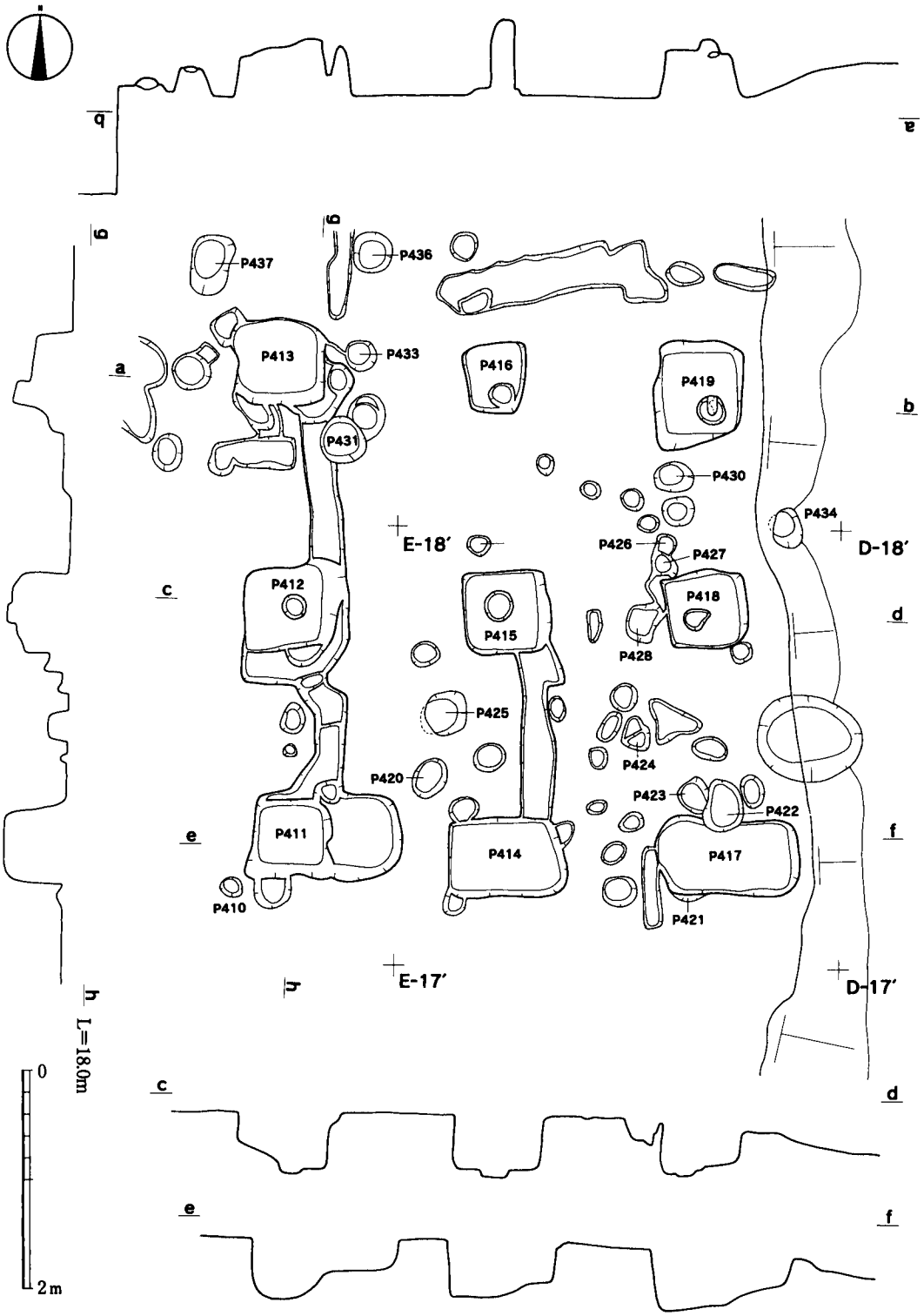
SD220（SX202）はSX201より土師器の量は少ないが、遺構の上層付近に土師器を投棄した溝である。また、その溝底にも完形の土師器がいくらか出土した。

第4章　まとめにかえて

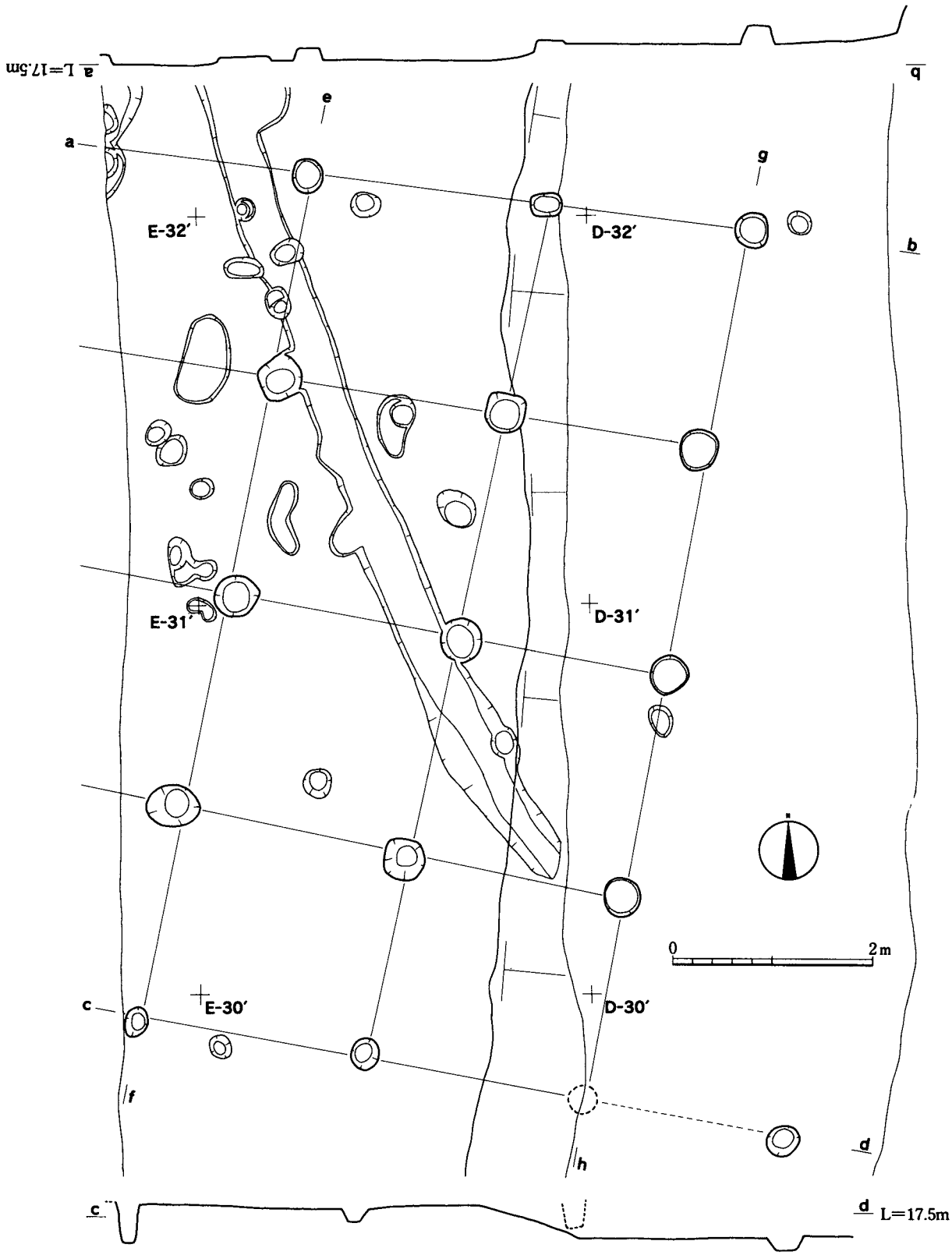
3次にわたる発掘調査によって、当遺跡の時期は弥生時代後期、8世紀後半～10世紀、鎌倉・室町時代が主体であることが確認された。調査された範囲に限れば、最盛期は弥生時代後期と鎌倉時代を中心とする中世であったと思われる。この他、縄文土器と打製石斧、7世紀前半の須恵器がごくわずかに出土している。遺物の時期から判断すれば、調査区内ですべての時期が連綿と確認できるわけではなく、明らかな断絶時期が何度もあったと推測される。しかし、先にふれたように、当遺跡周辺の微高地上に立地する遺跡をひとつの群として把握した場合には、断絶はそれほど多くなく、長くもなかった可能性があるだろう。周辺の遺跡の調査によって、この遺跡群の動態が明らかになるだろう。



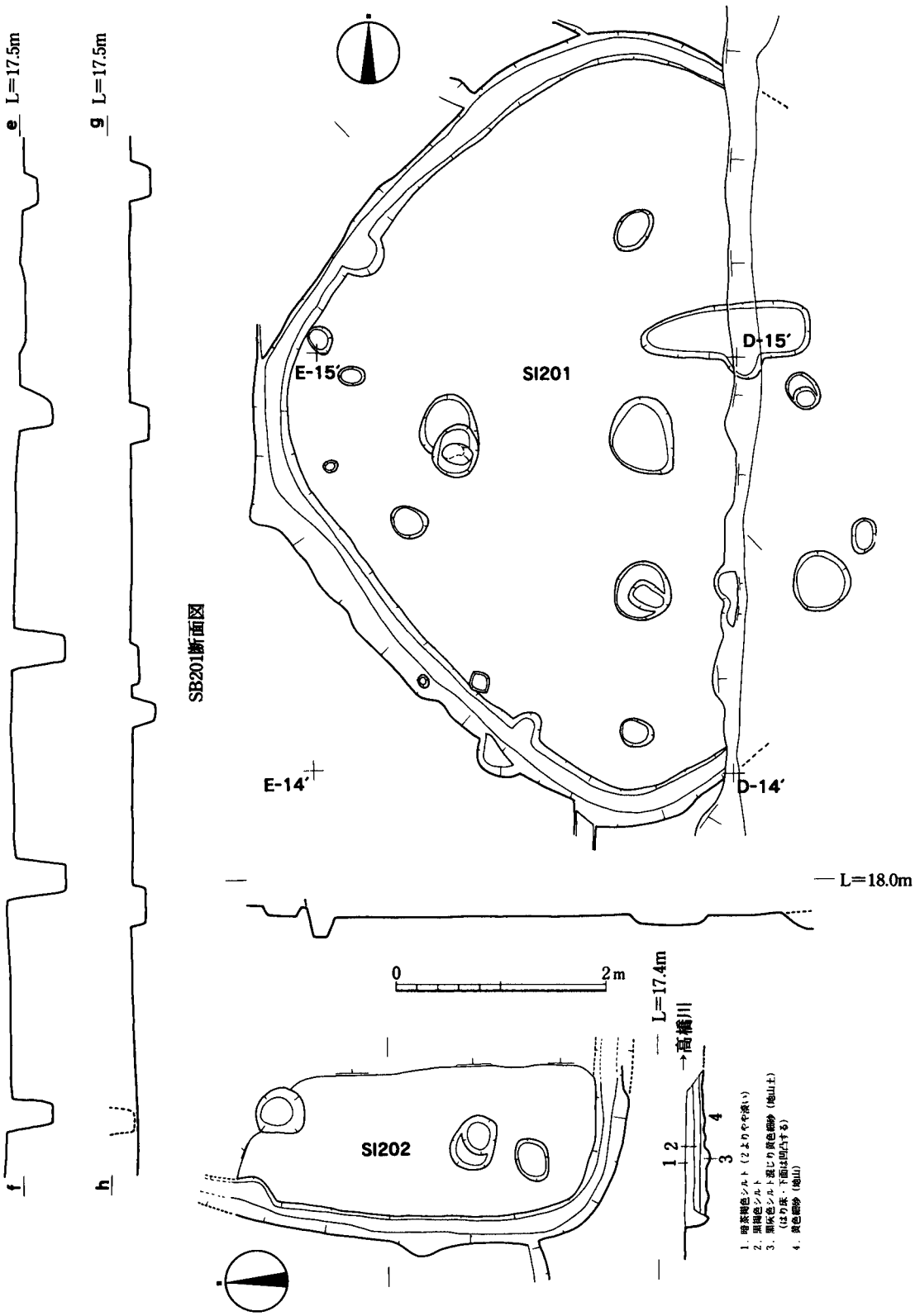
第4図　第1次調査区土層断面図（上3段はS＝1／60、下2段はS＝1／120）



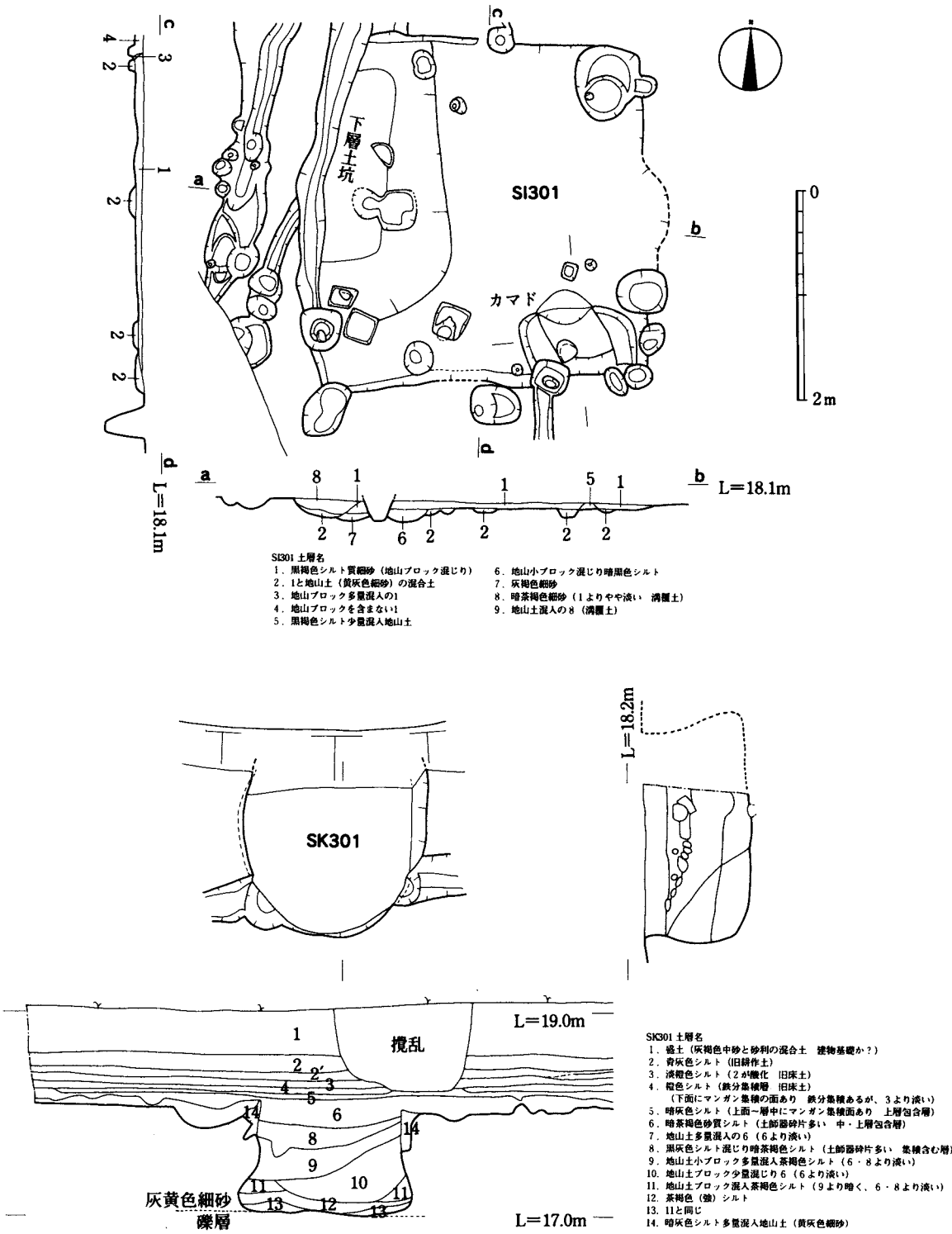
第５図　SB2実測図（S＝1／60）



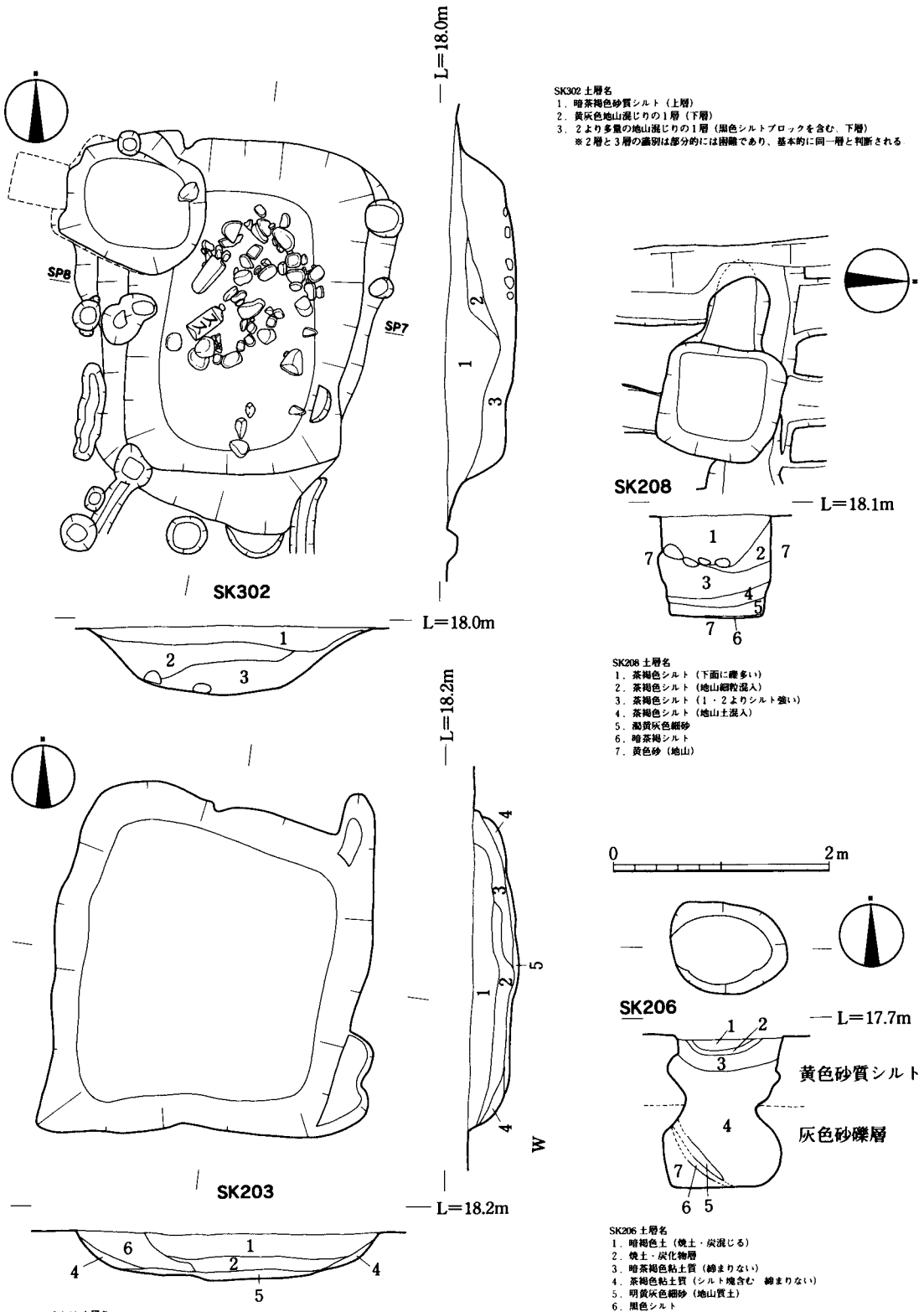
第6図　SB201実測図（S＝1／60）



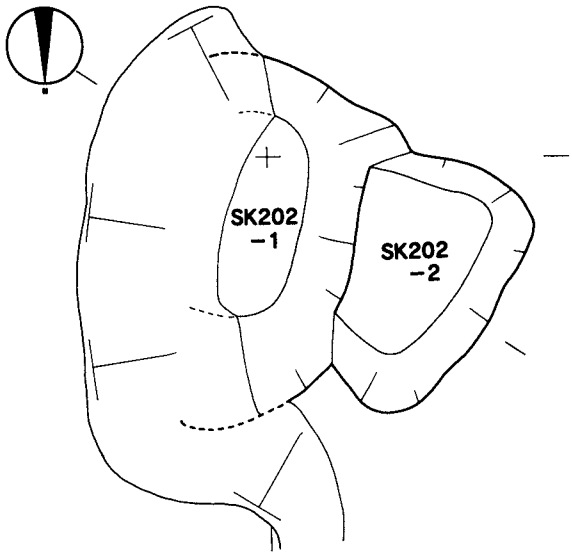
第７図　SI201･202実測図とSB201断面図（S=1／60）



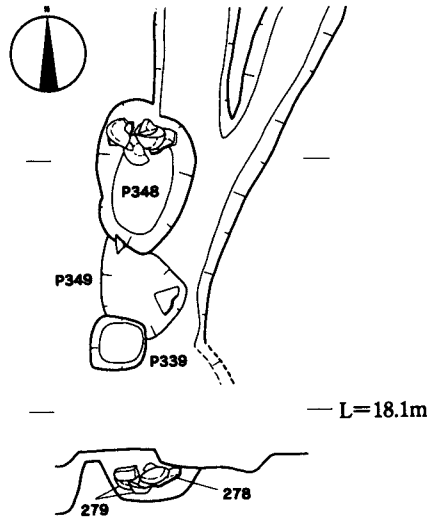
第8図　SI301・SK301実測図（S＝1／60）



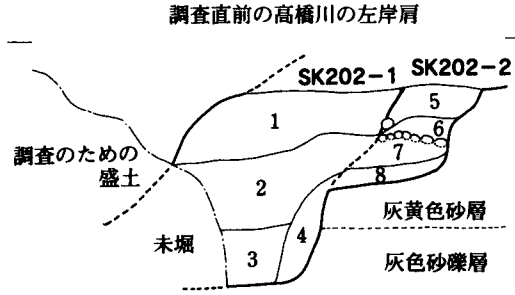
第9図　SK302・208・203・206実測図（S＝1／60）



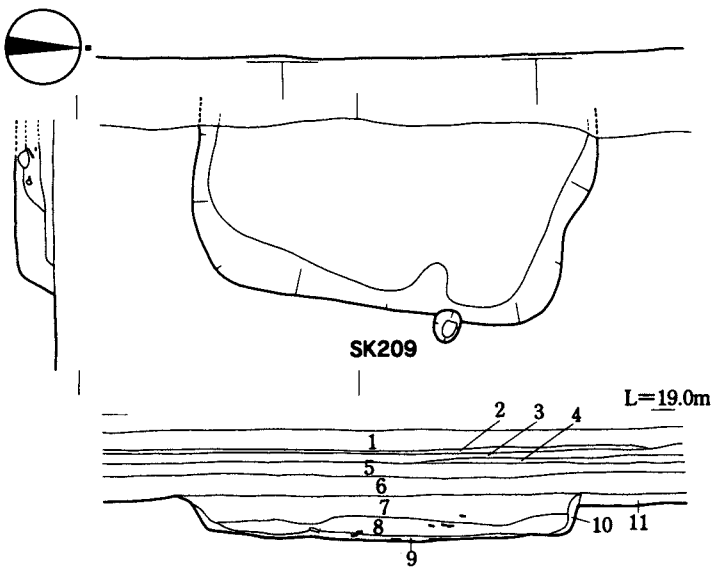
調査直前の高橋川の左岸肩

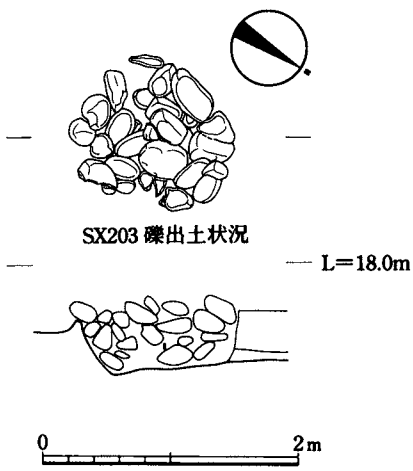


P348 土器出土状況見通し図



SK202−1（井戸）・SK202−2（井戸掘り方もしくは別土坑）土層名
1．黒褐色シルト
2．黒褐色強シルト（礫混じり）
3．暗黄灰色砂瓦層状混入暗灰色シルト
4．砂礫混じり暗茶褐色砂質シルト
5．黄灰色地山土が多量で瓦層状に混入する（淡）黒褐色シルト
6．黄灰色地山粒混じり（淡）黒褐色シルト
7．暗灰色礫層（上面が礫敷のようになる）
8．濃灰色シルト質砂（暗灰色シルト混じり．黄灰色地山土が汚れたのか）

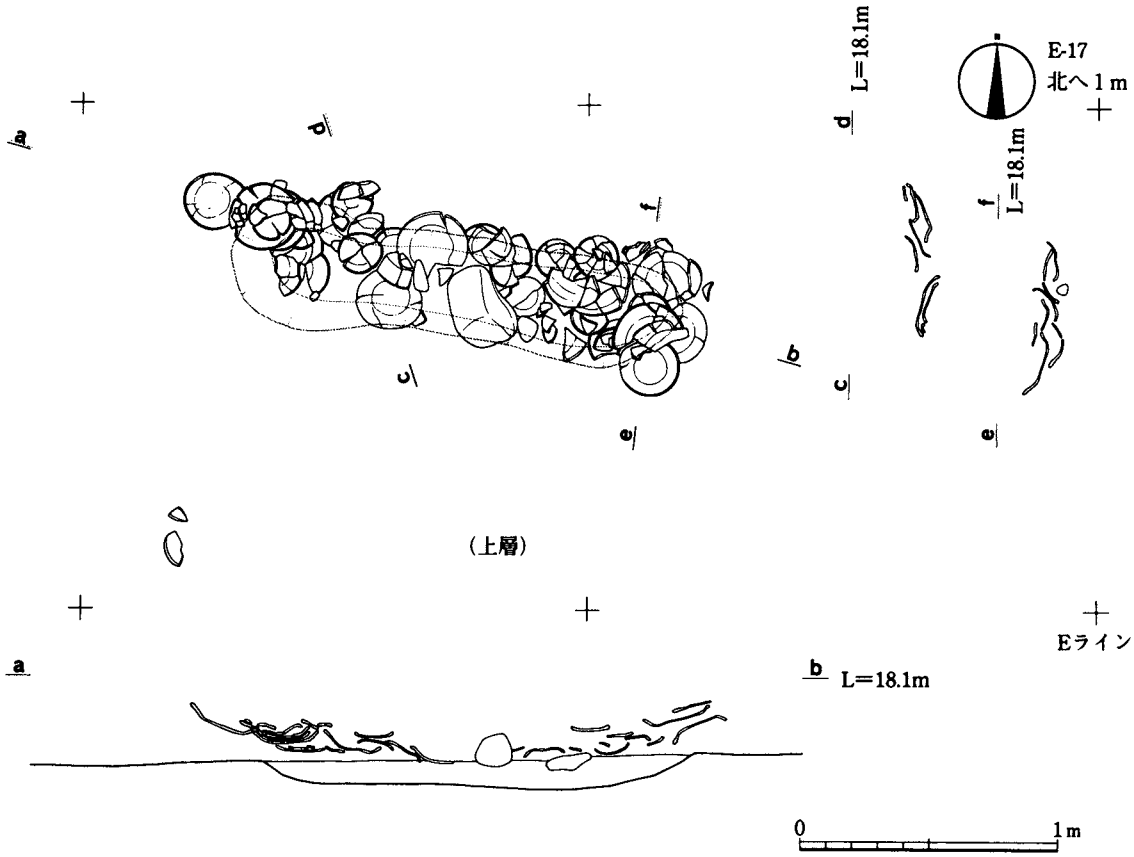




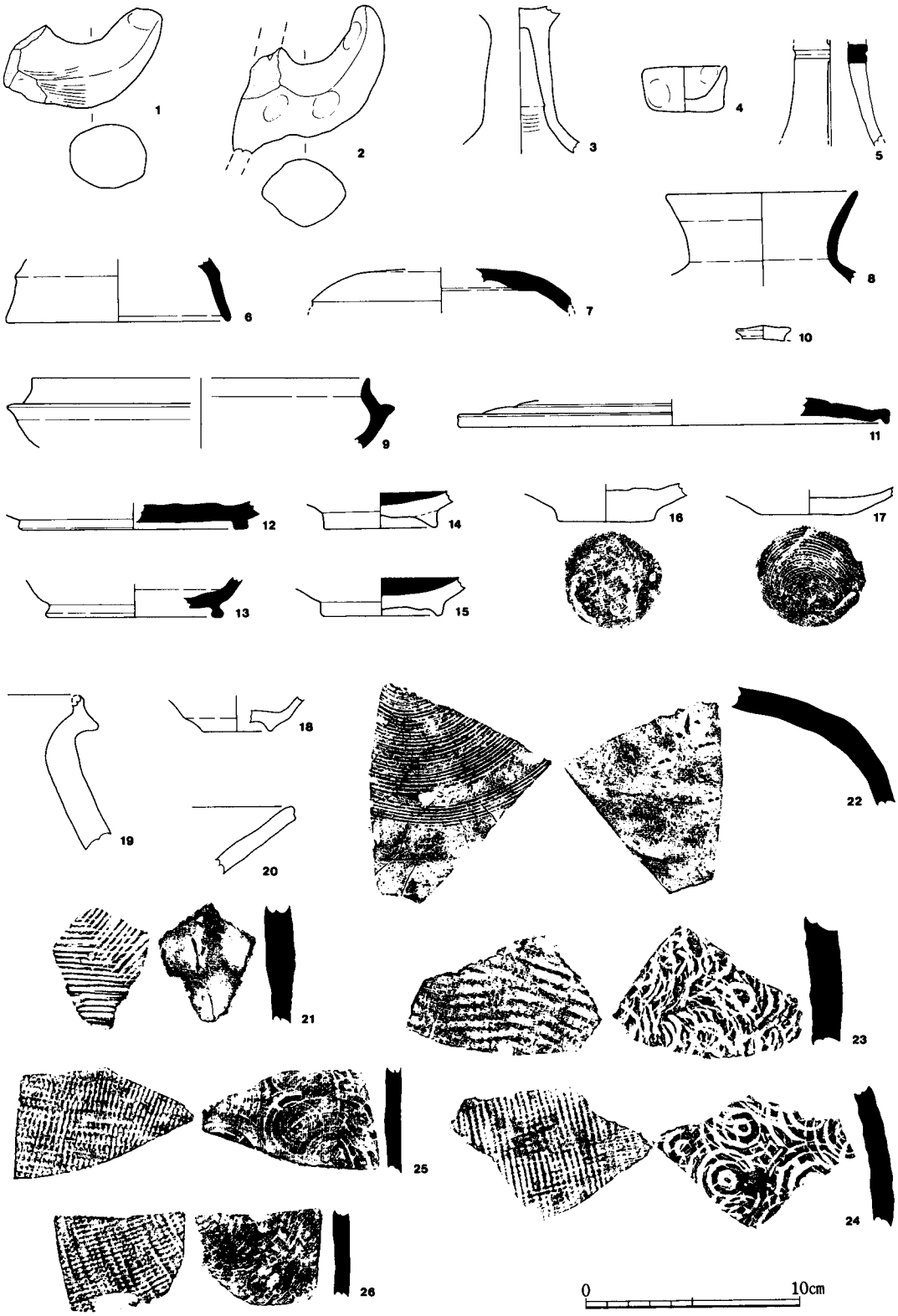
SX203 礫出土状況

SK209 土層名
1．青灰色シルト（旧水田耕作土　この上層は貴村置場のための盛土．）
2．褐色シルト（旧床土）
3．乳灰色シルト質細砂（旧々水田耕作土）
4．赤褐色砂質シルト（旧々床土）
5．（暗）灰色砂質シルト
6．暗褐灰色砂質シルト（上位）〜暗灰色砂質シルト（下位）
7．黒褐色シルト（土器含む）
8．淡黒褐色シルト（土器含む）
9．暗黒灰色強シルト（土器含む）
10．茶褐色シルト
11．（淡）黒褐色シルト（砂気が乏しく粘性やや強い）

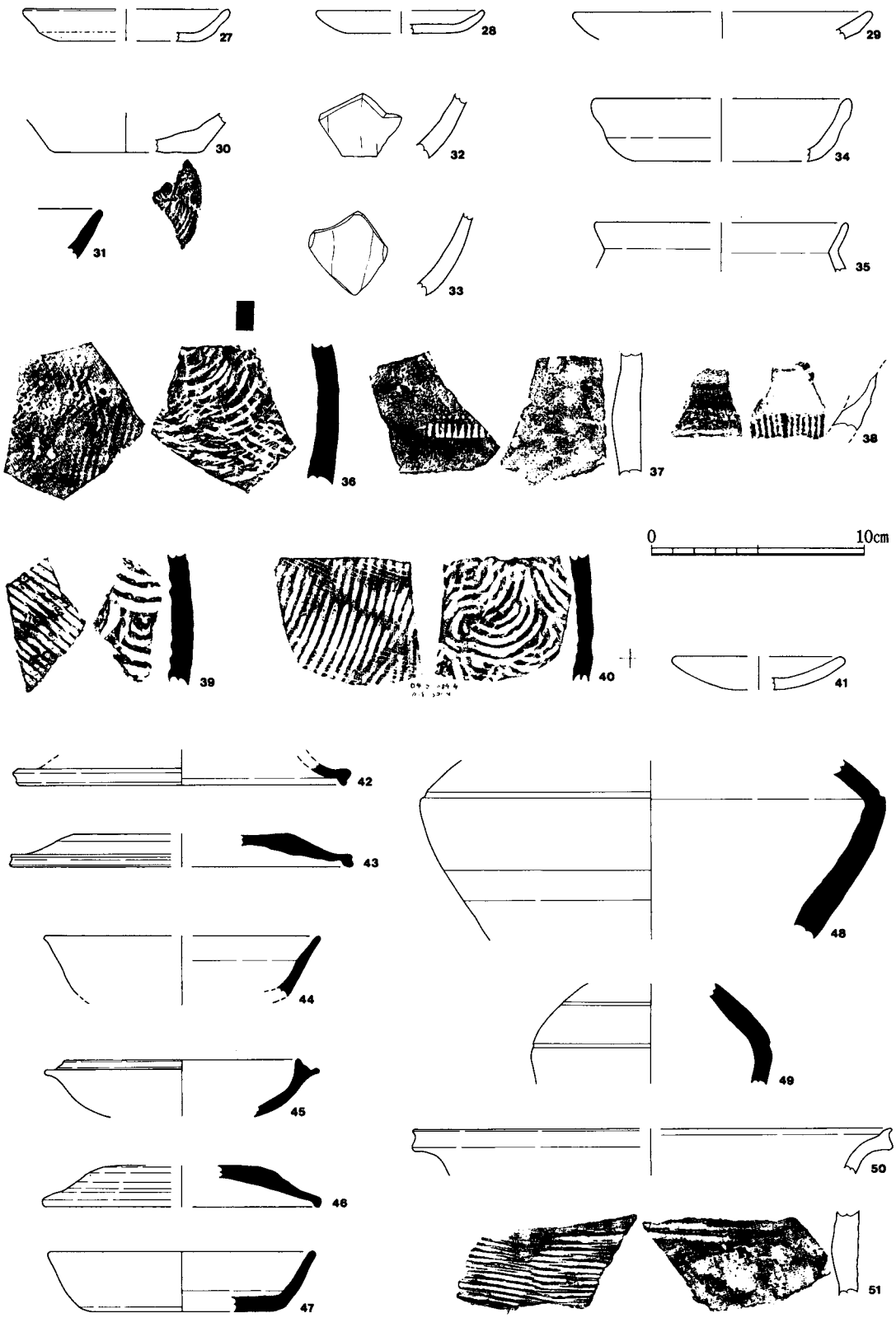
第10図　SK202・209，P348，SX203実測図（S＝1／60）



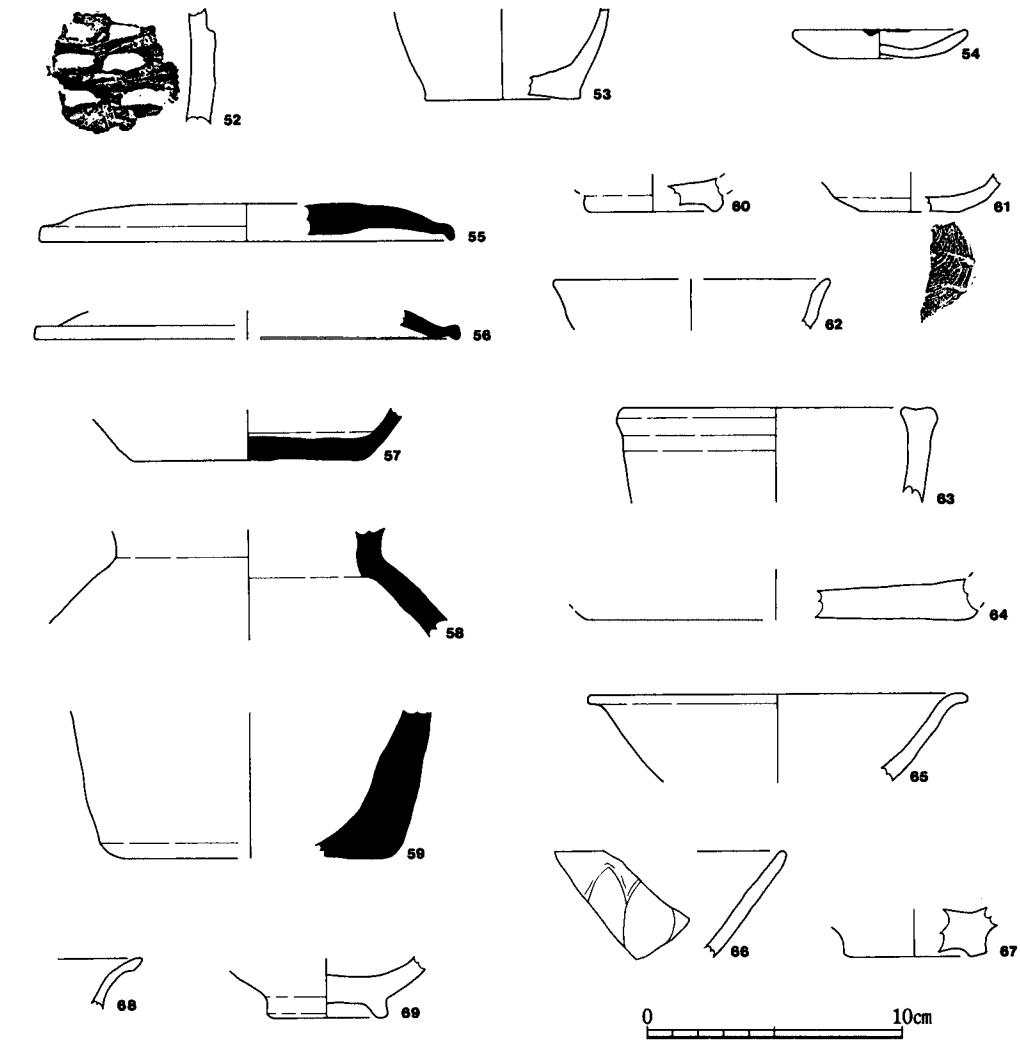
第11図　SX201土師器出土状況（S＝1／30）

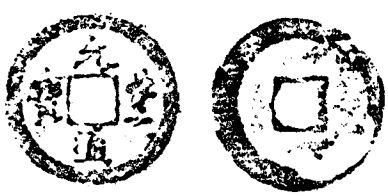


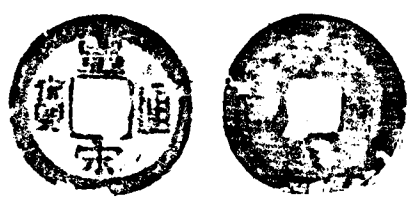
第12図　窪遺跡採集遺物（松山和彦氏　採集品）



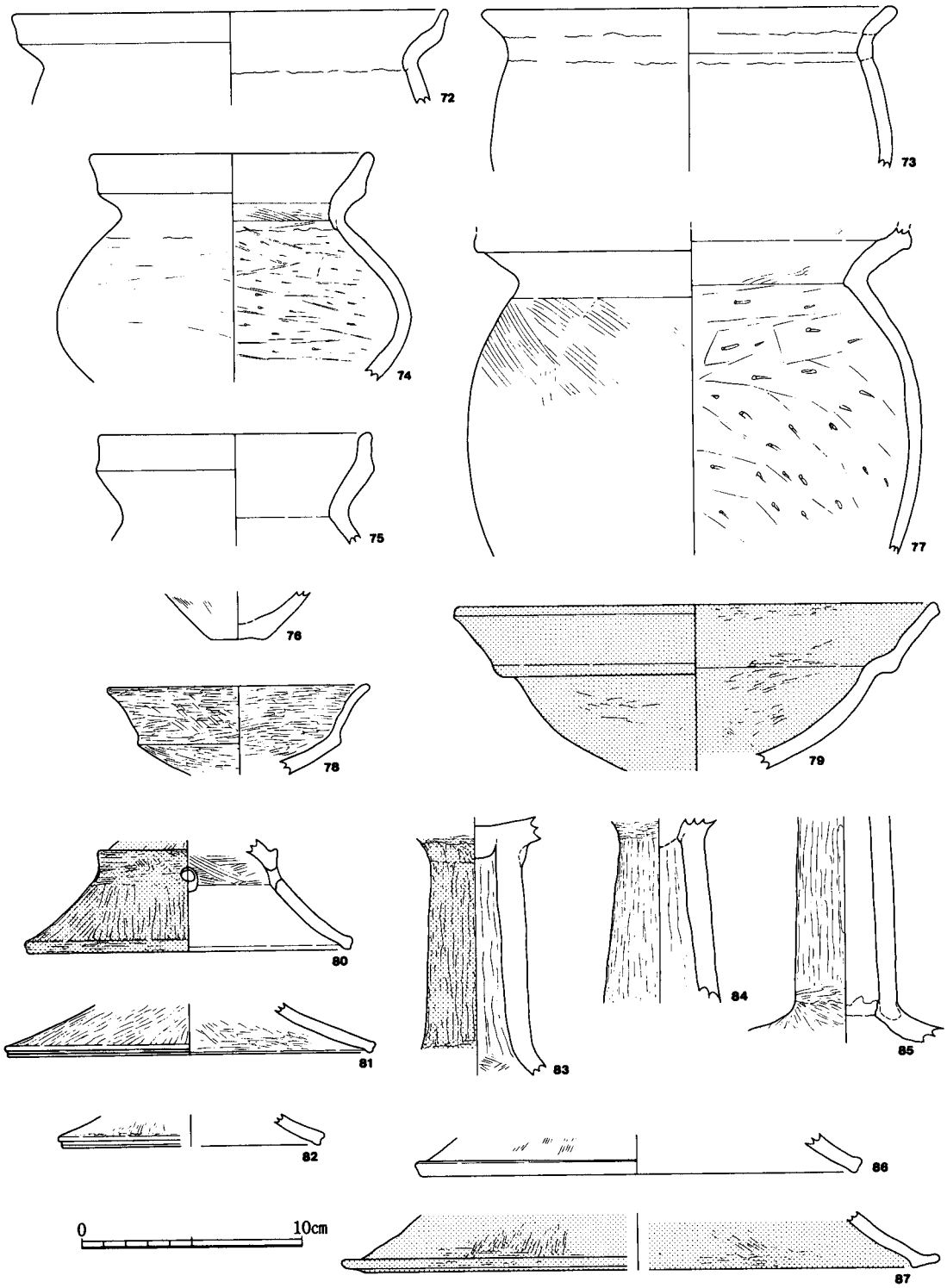
第13図　遺構等出土土器



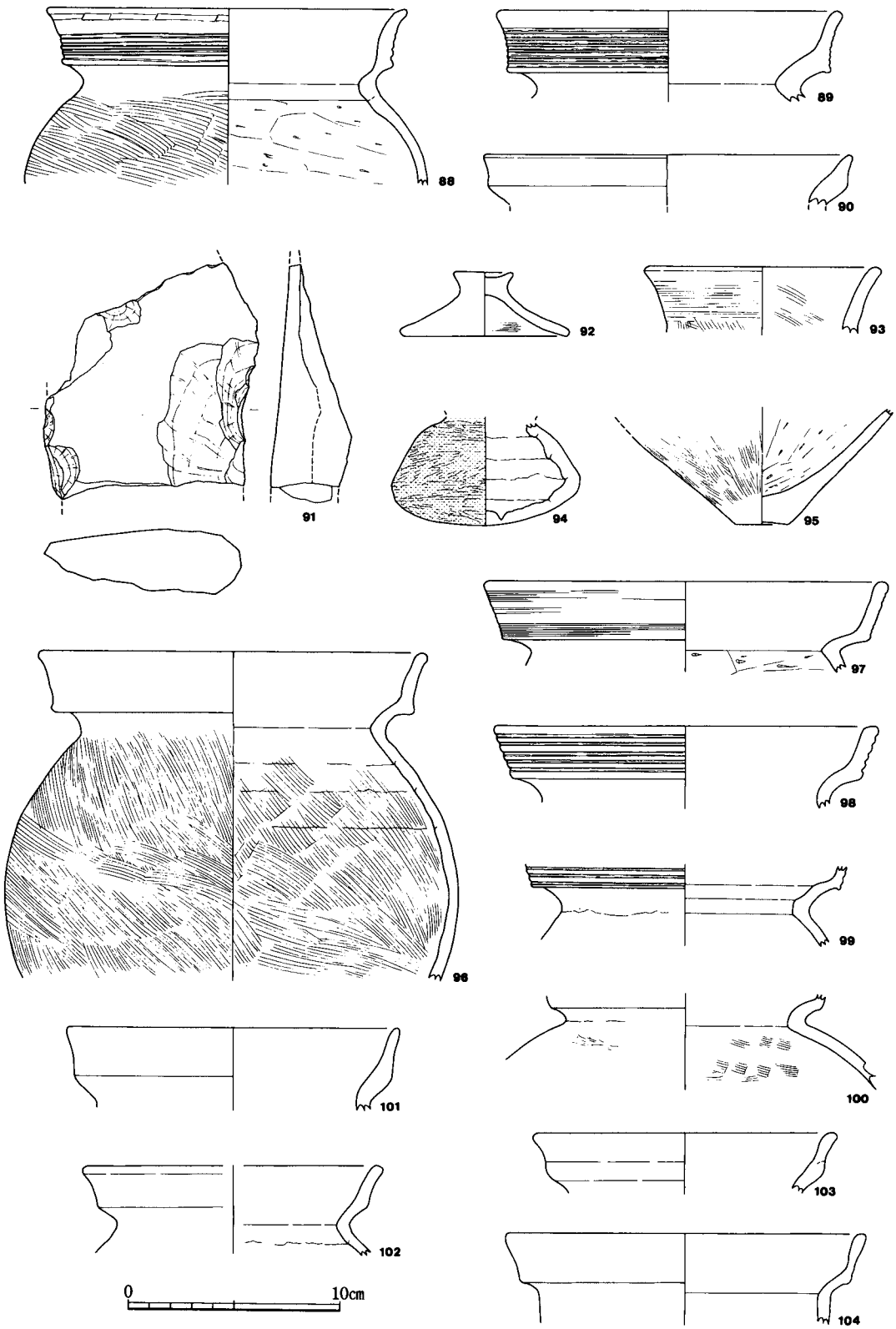




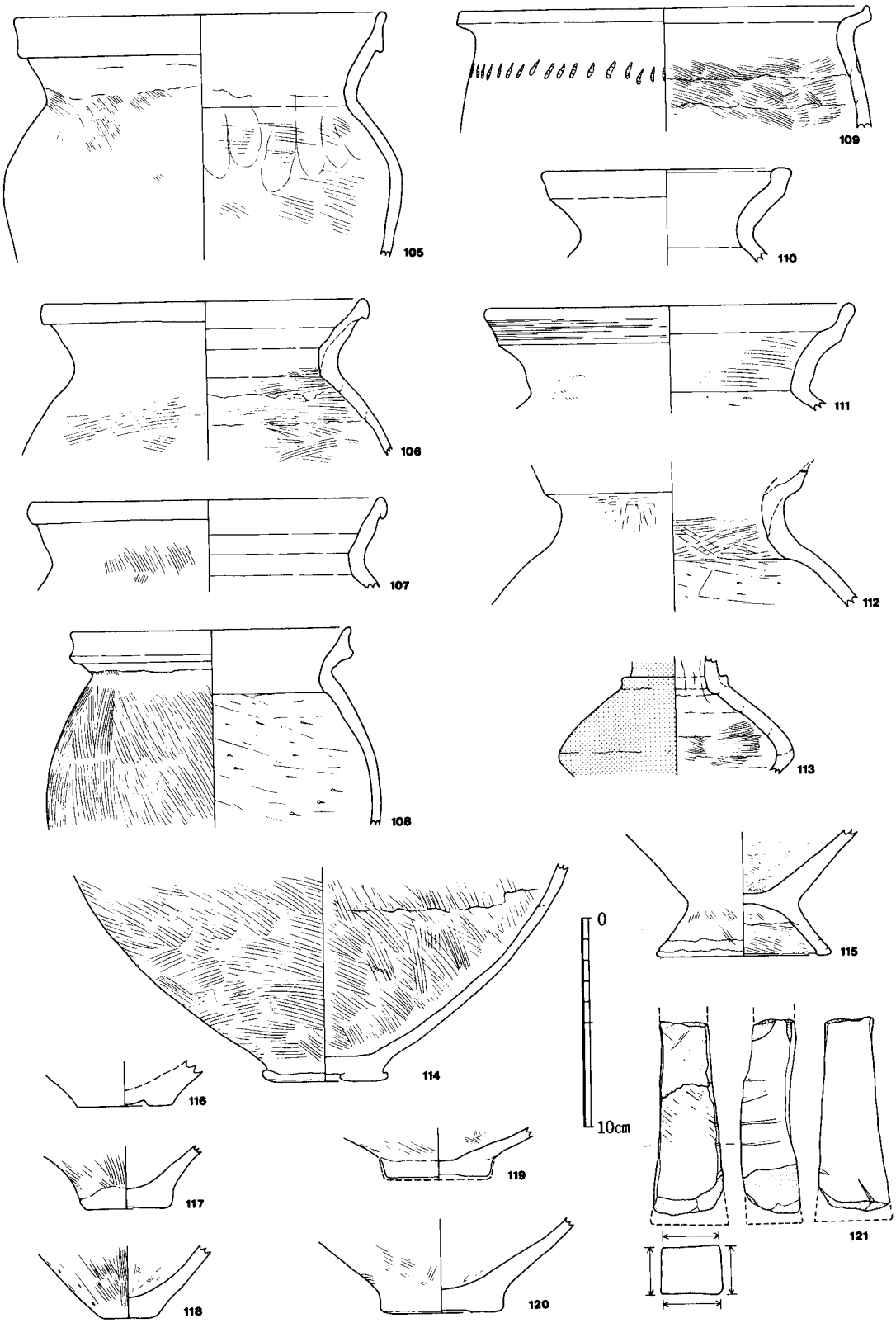
第14図　包含層出土土器



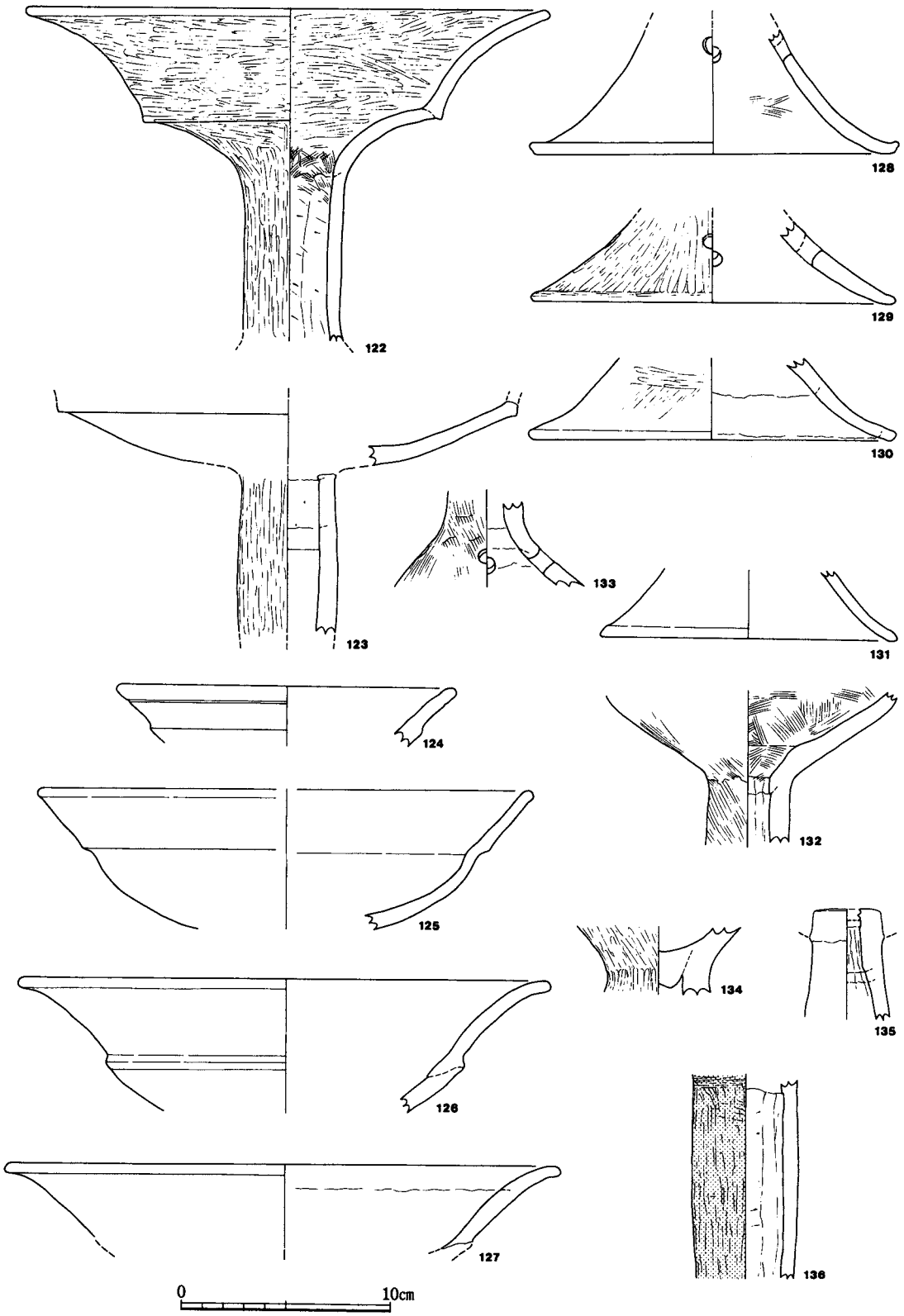
第15図　SI201出土土器



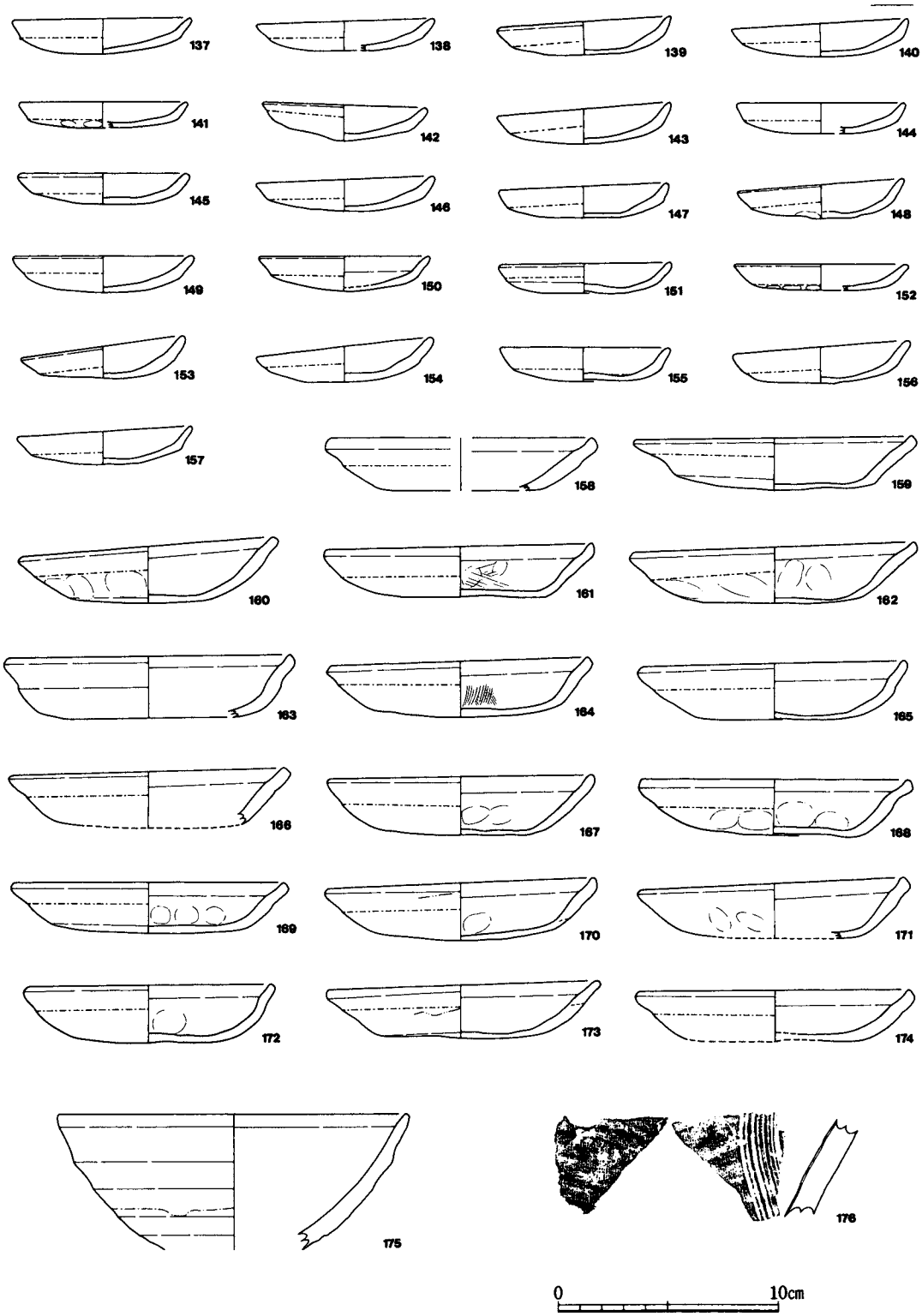
第16図　SI202，SK210，SK209出土遺物



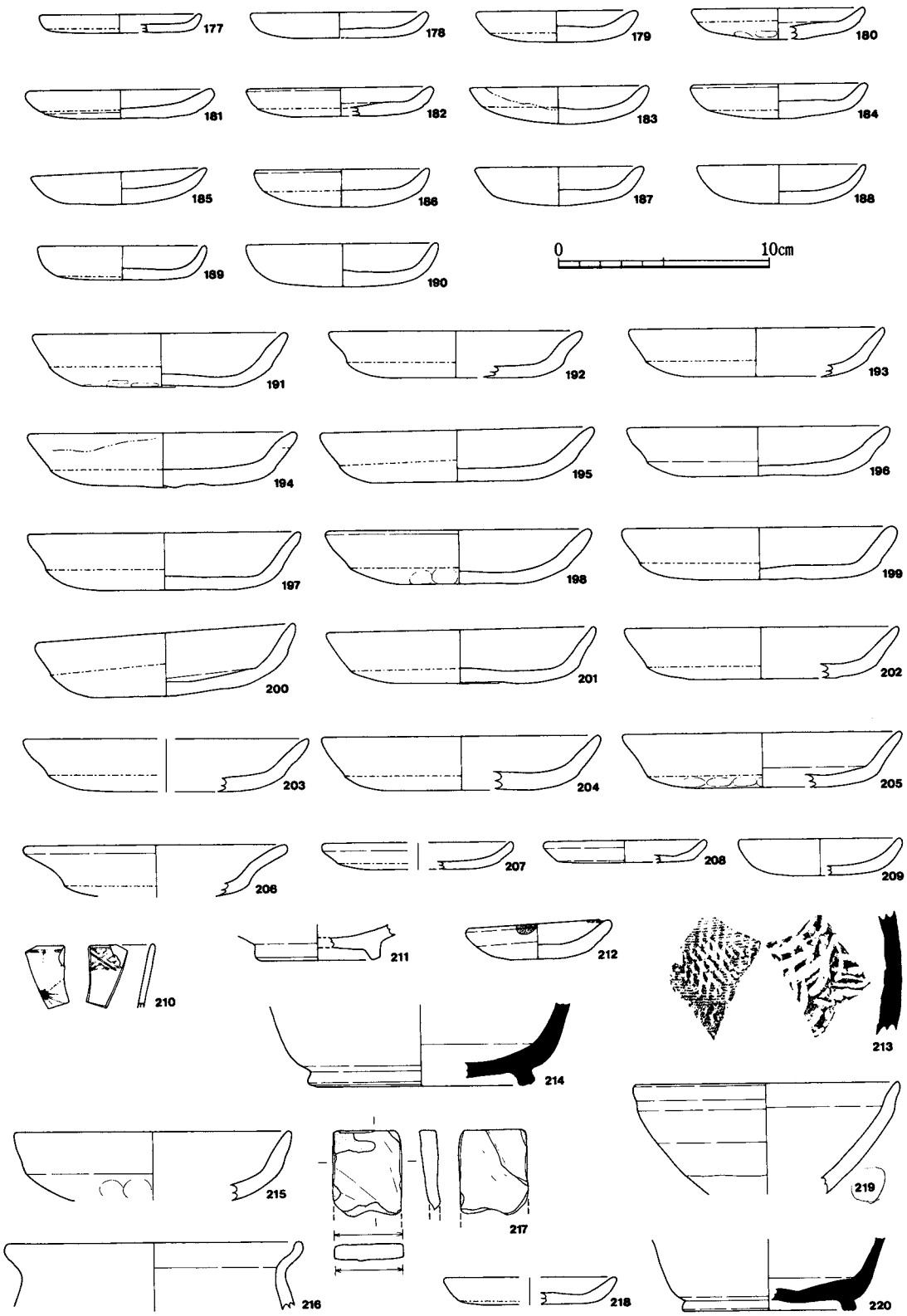
第17図　SK209出土遺物



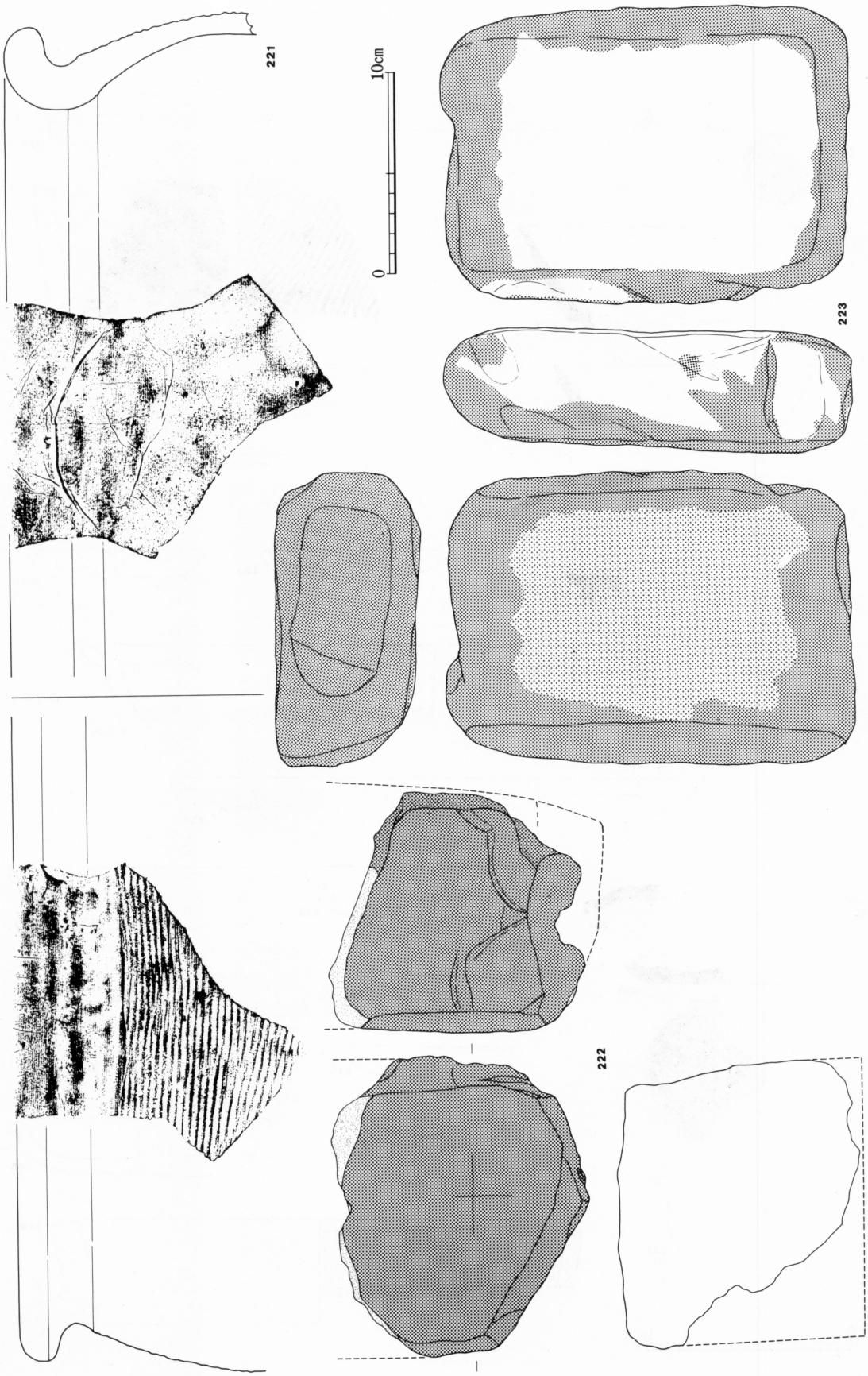
第18図　SK209出土遺物



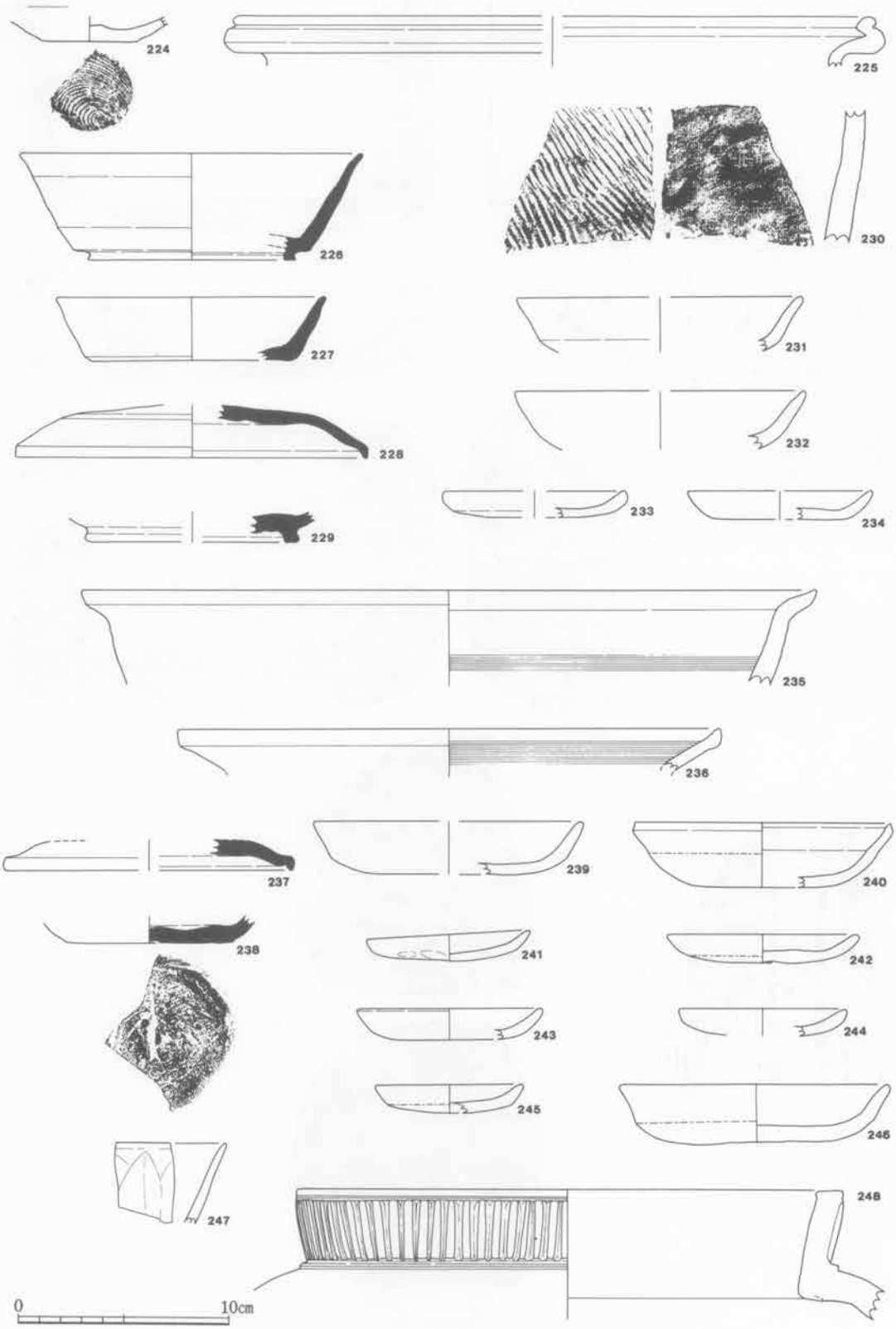
第19図　SX201・SX203出土遺物



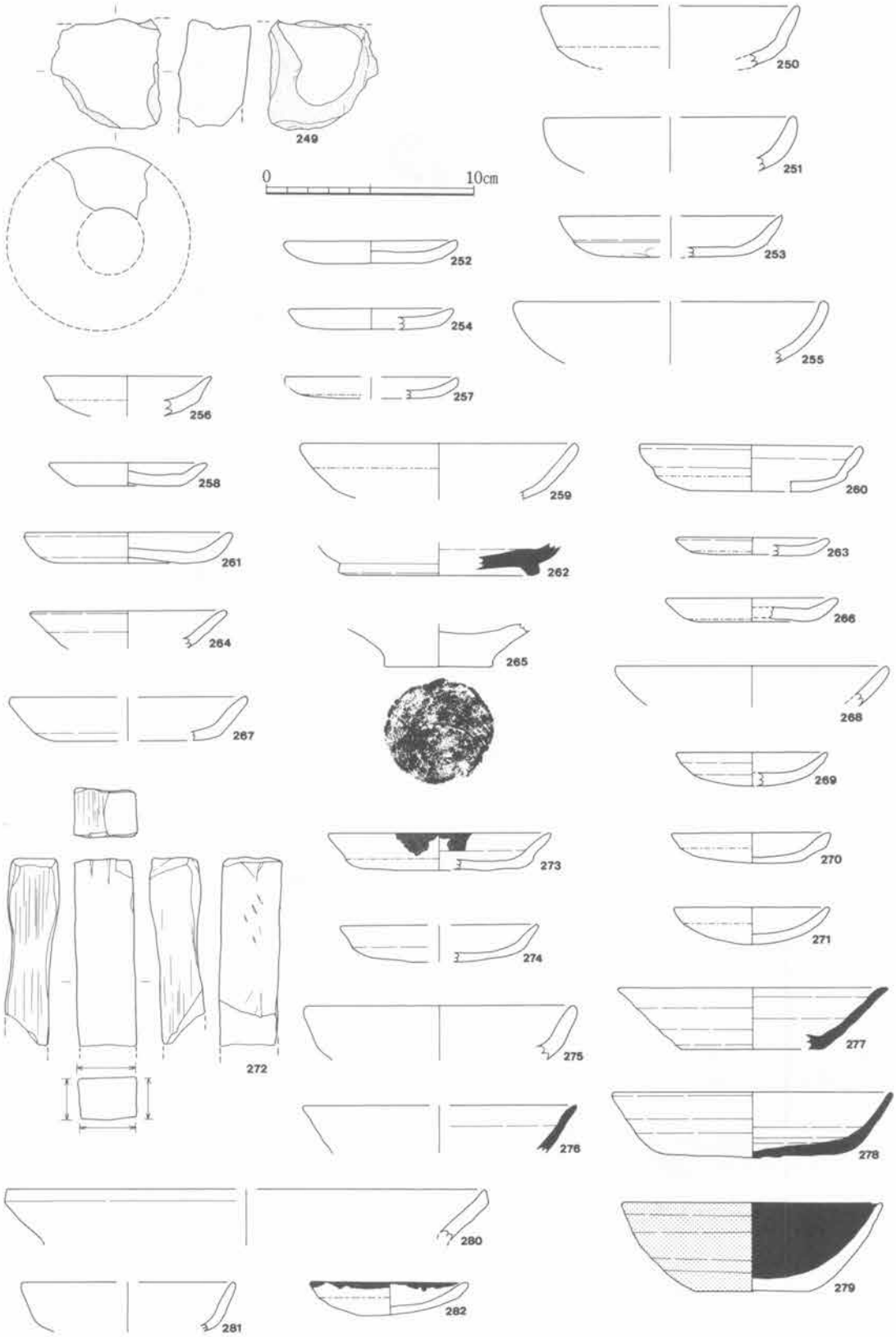
第20図　SX202・溝出土遺物



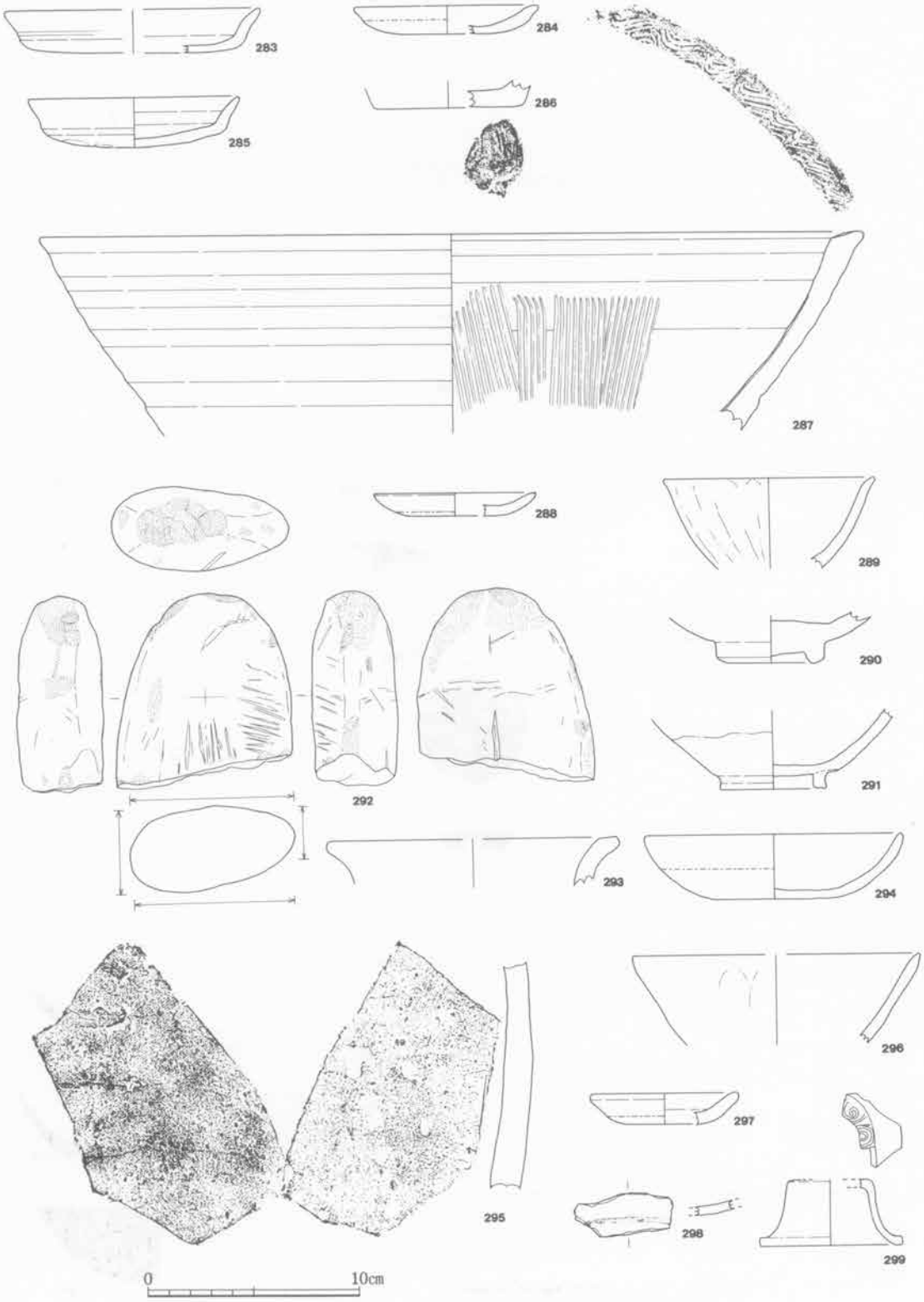
第21図　ピット出土遺物



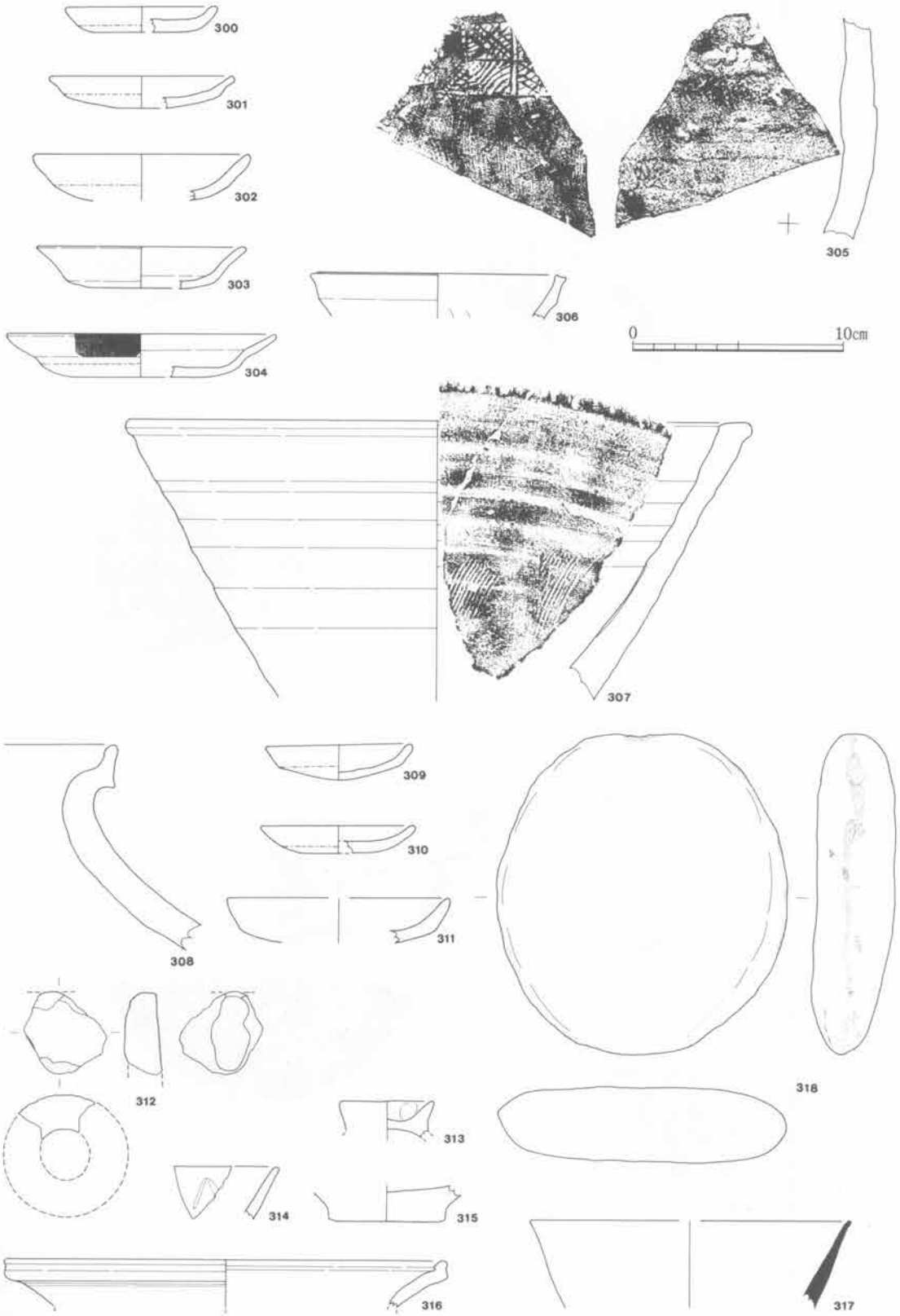
第22図　ピット出土遺物（P2003～P2527）



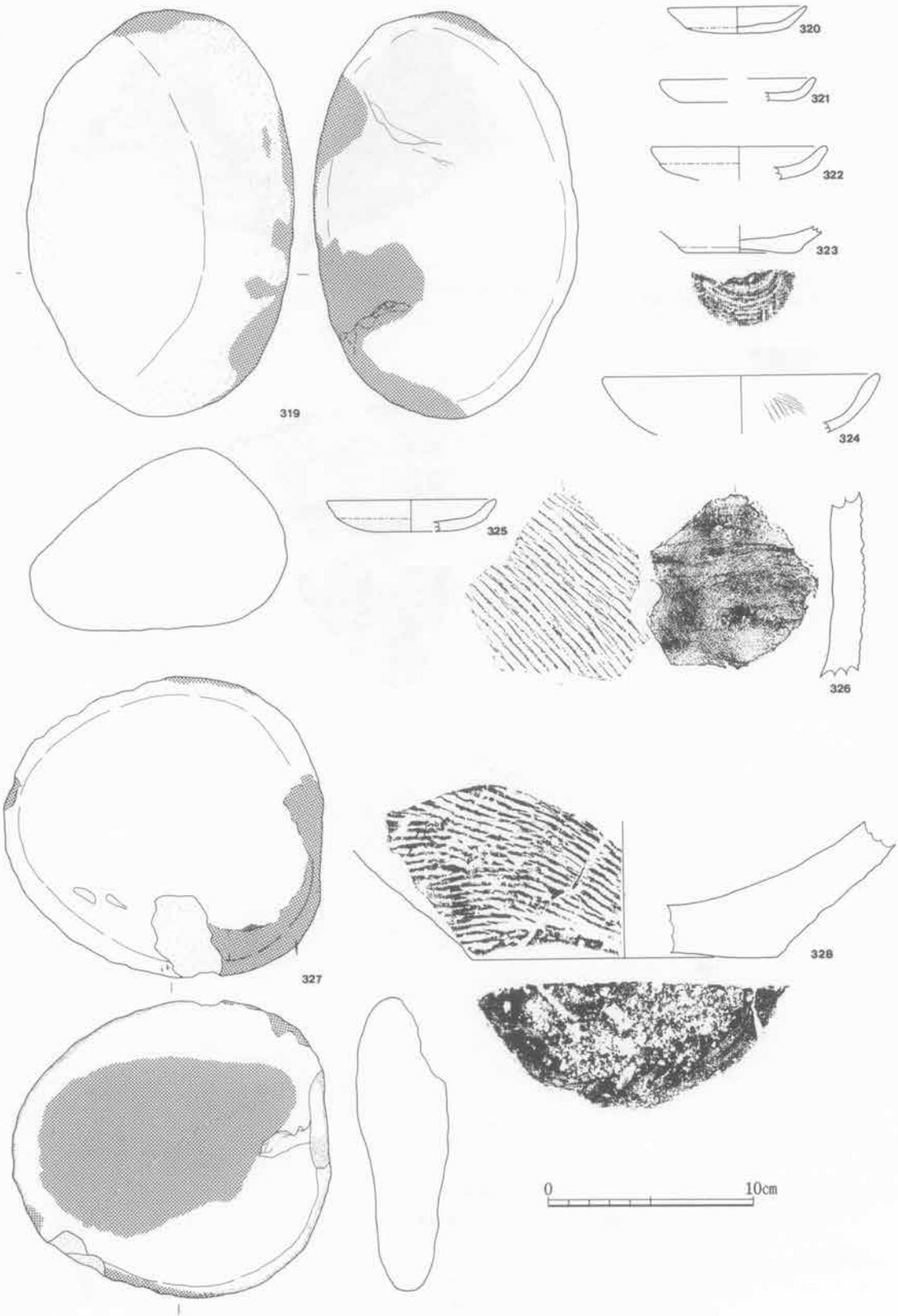
第23図　ピット出土遺物（P2541～P3348）



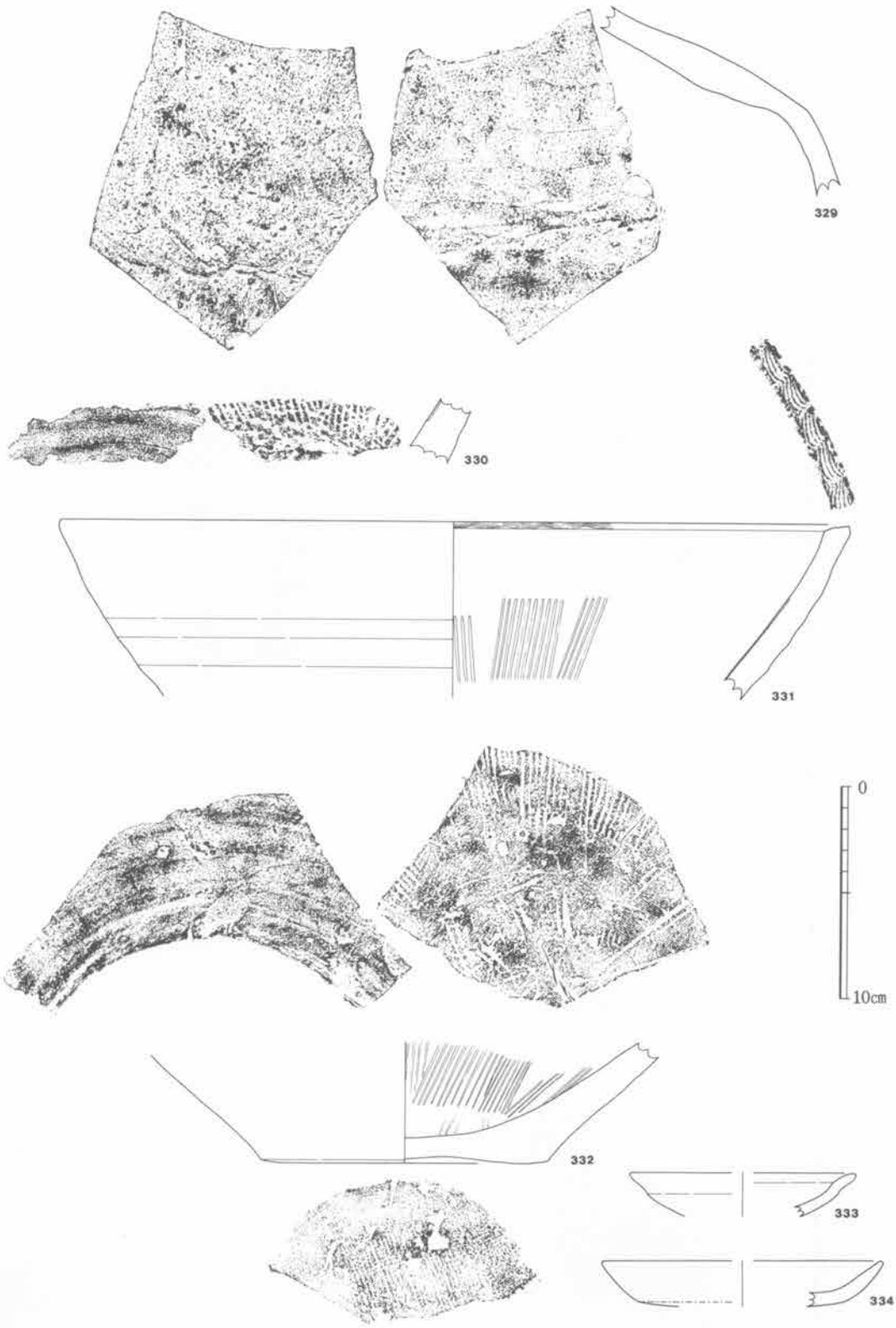
第24図　ピット（P3321～P3358），SK201･202出土遺物



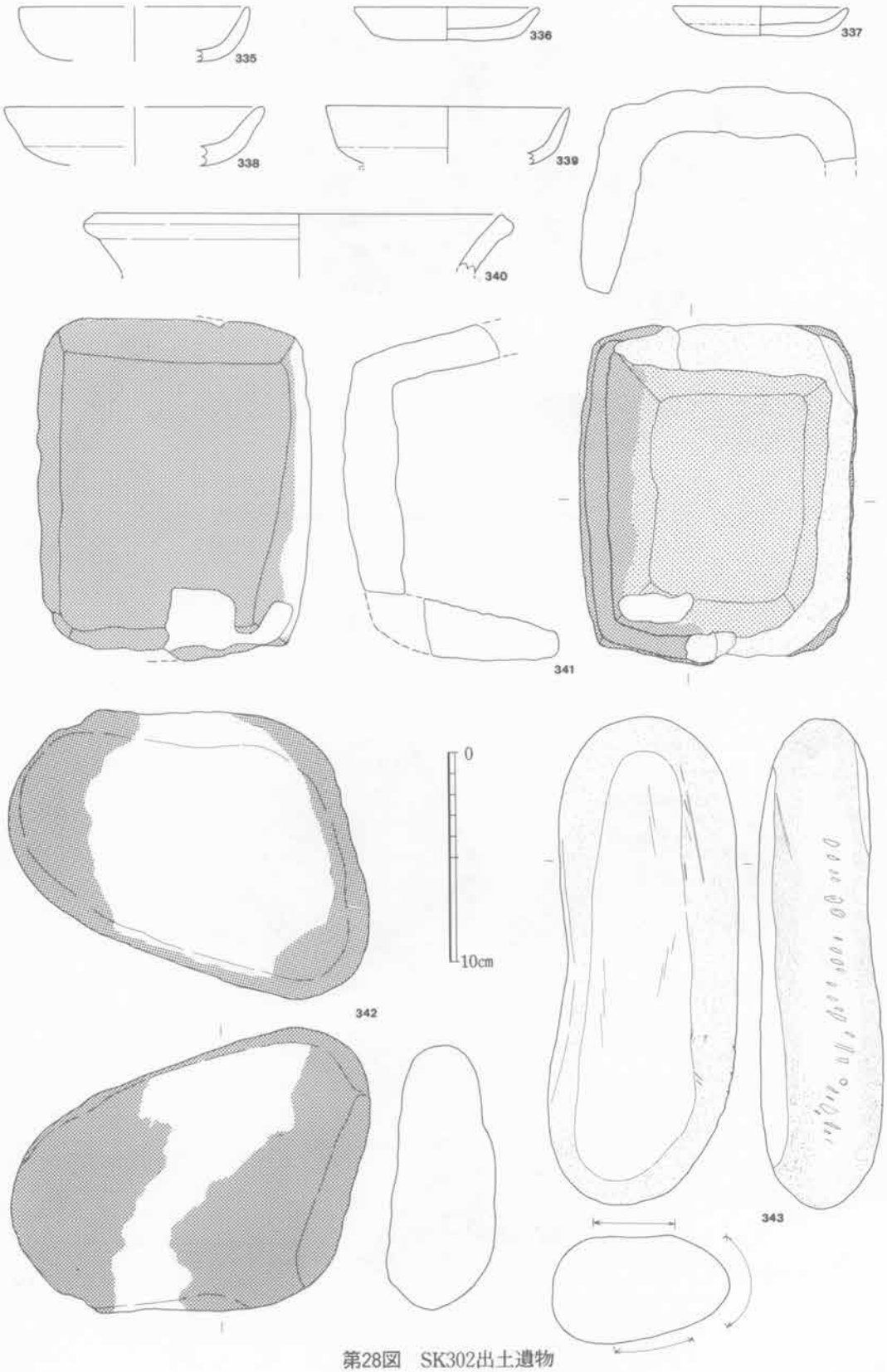
第25図　SK202－1･202－2，SK203，SK204，SK220出土遺物



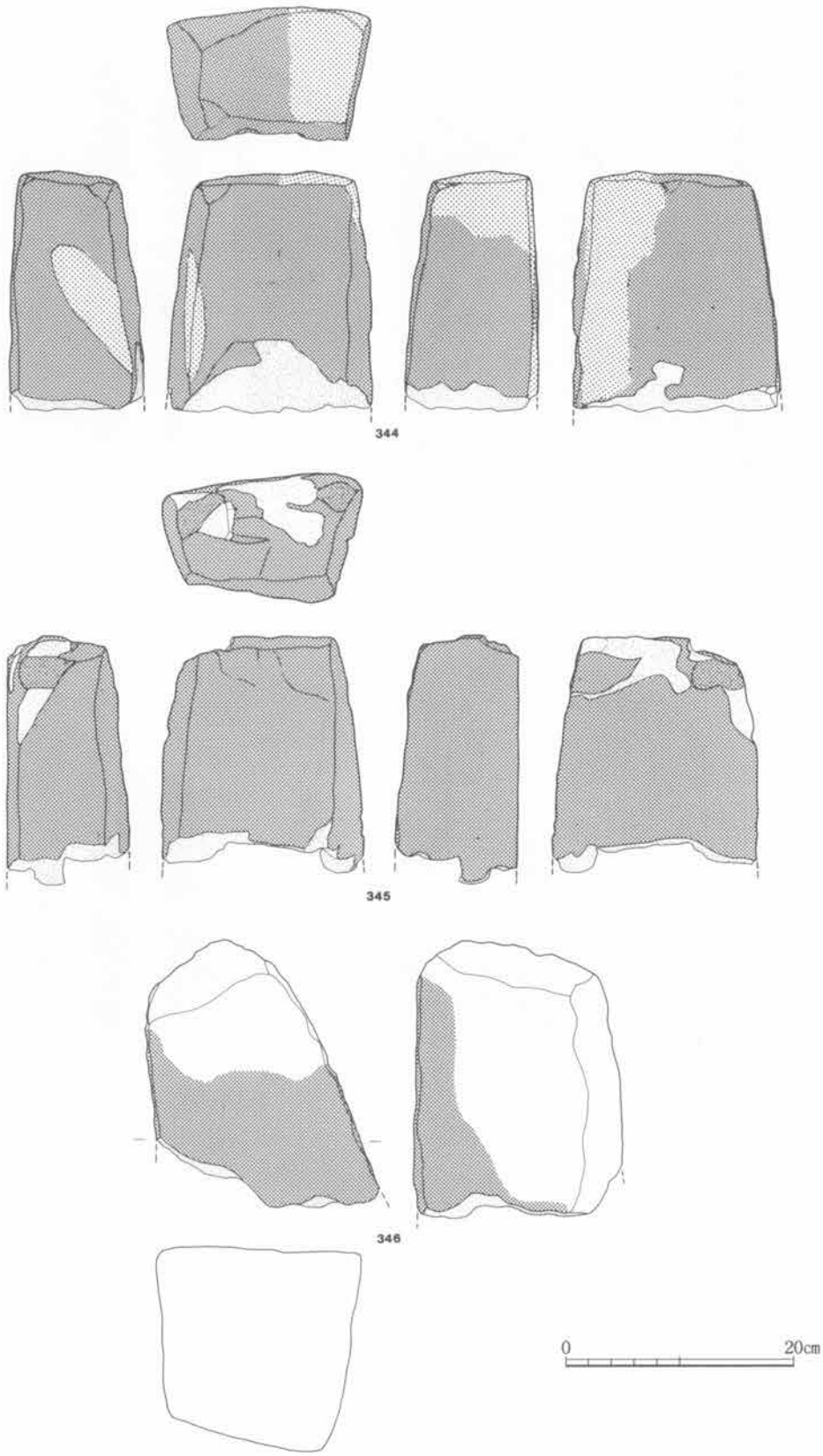
第26図　SI201，SK209，SK211，SK212，SK303，SD233出土遺物



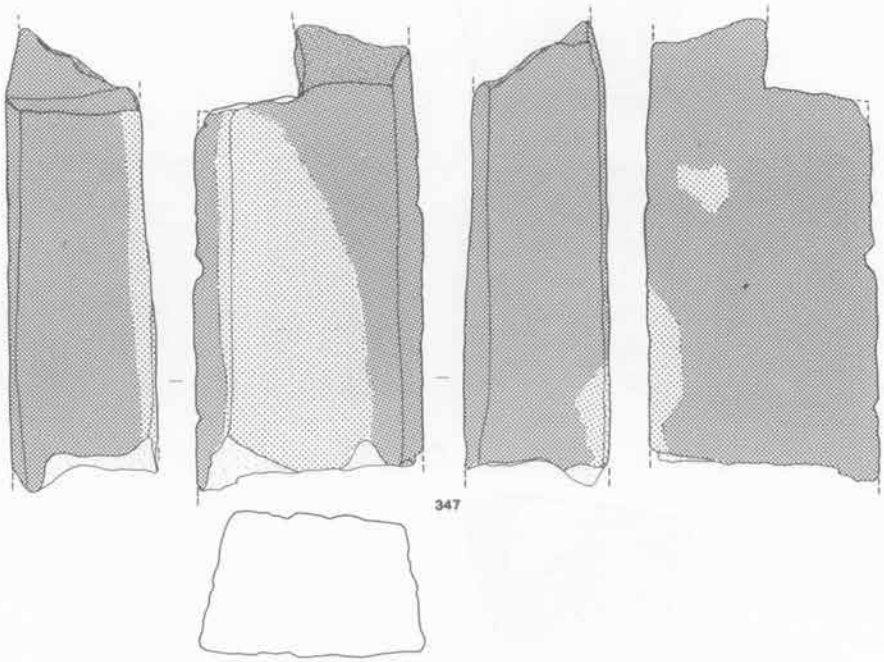
第27図　SK301出土遺物

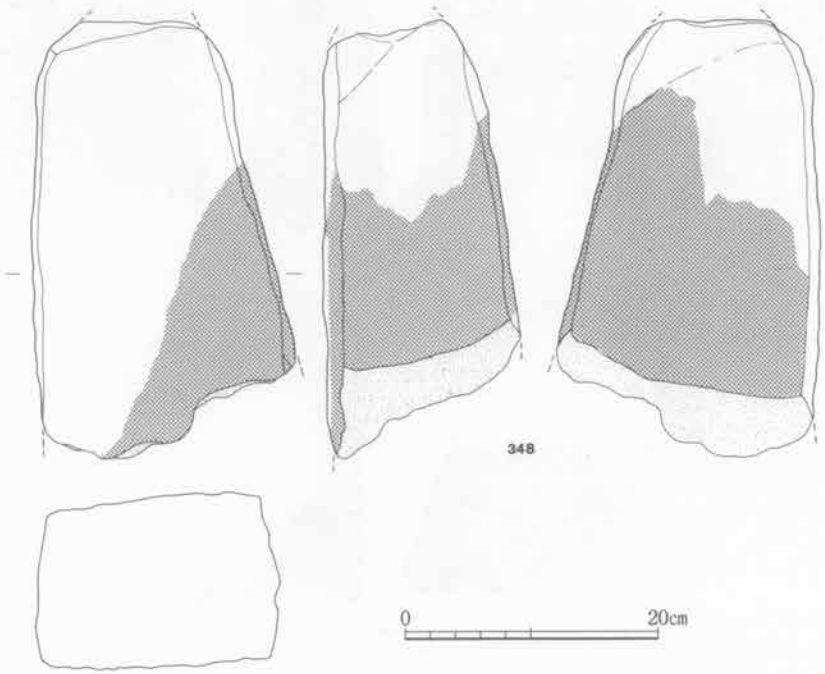


第28図　SK302出土遺物

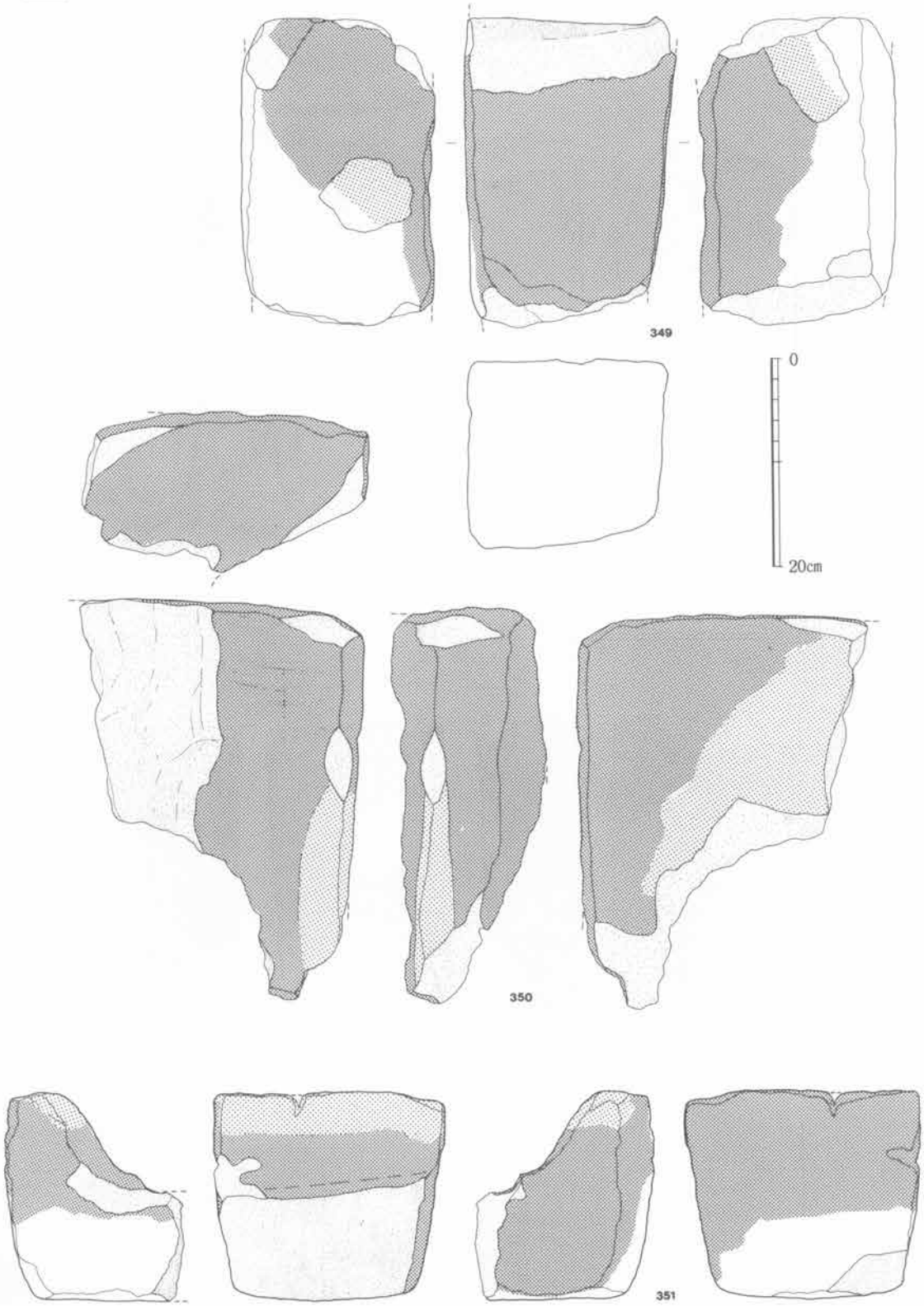


第29図　SK301出土遺物（S＝1／6）

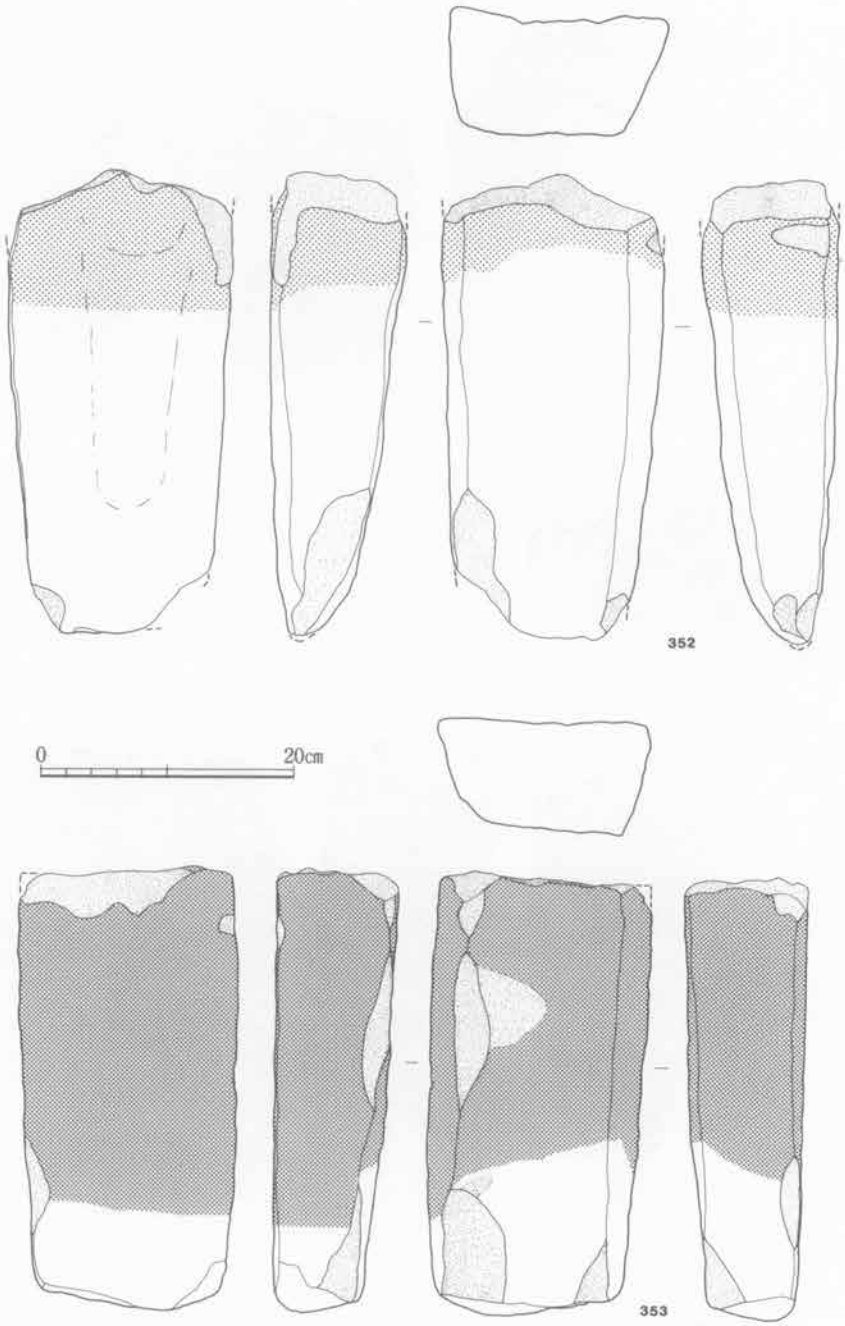




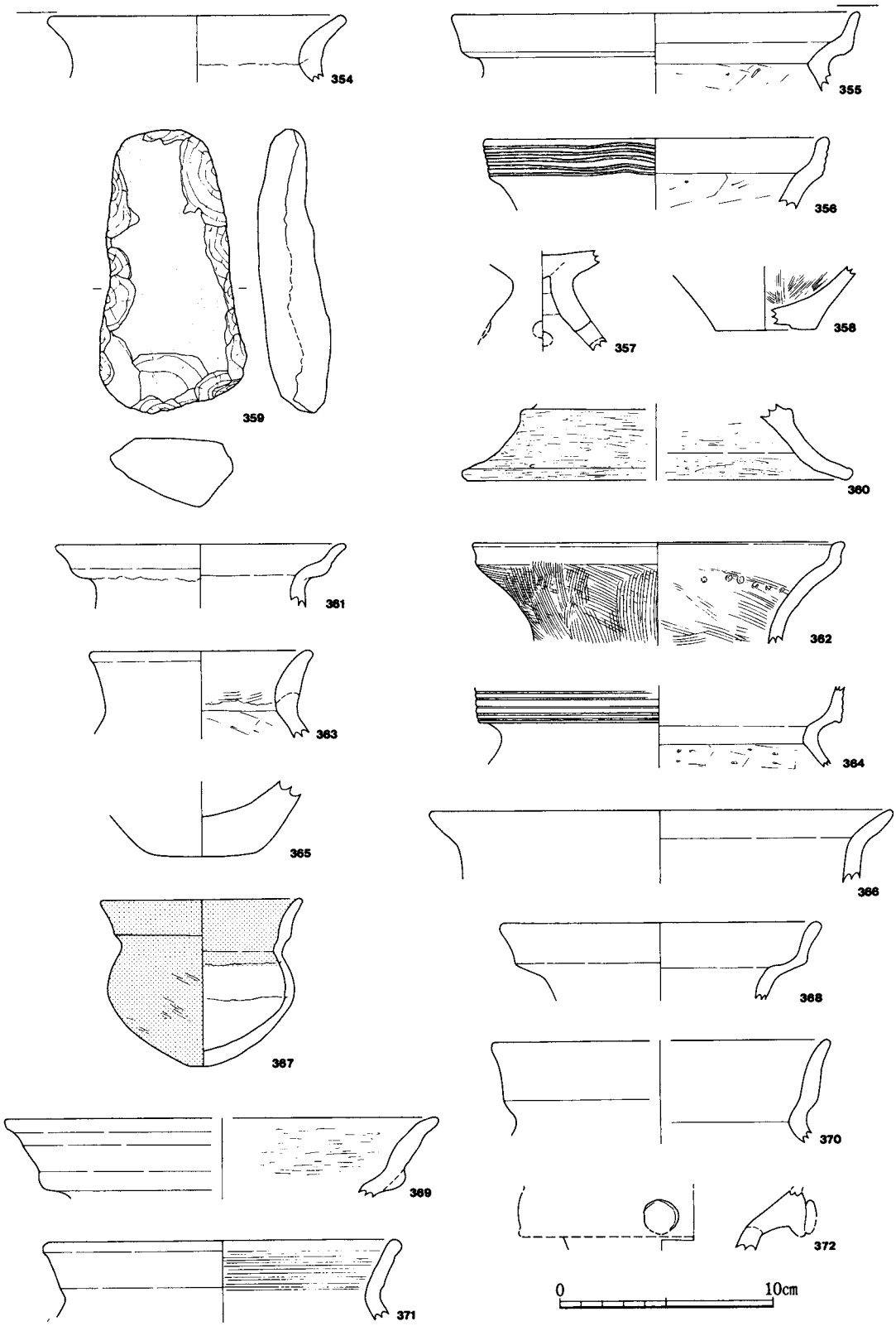
第30図　SK301出土遺物（S＝1／6）



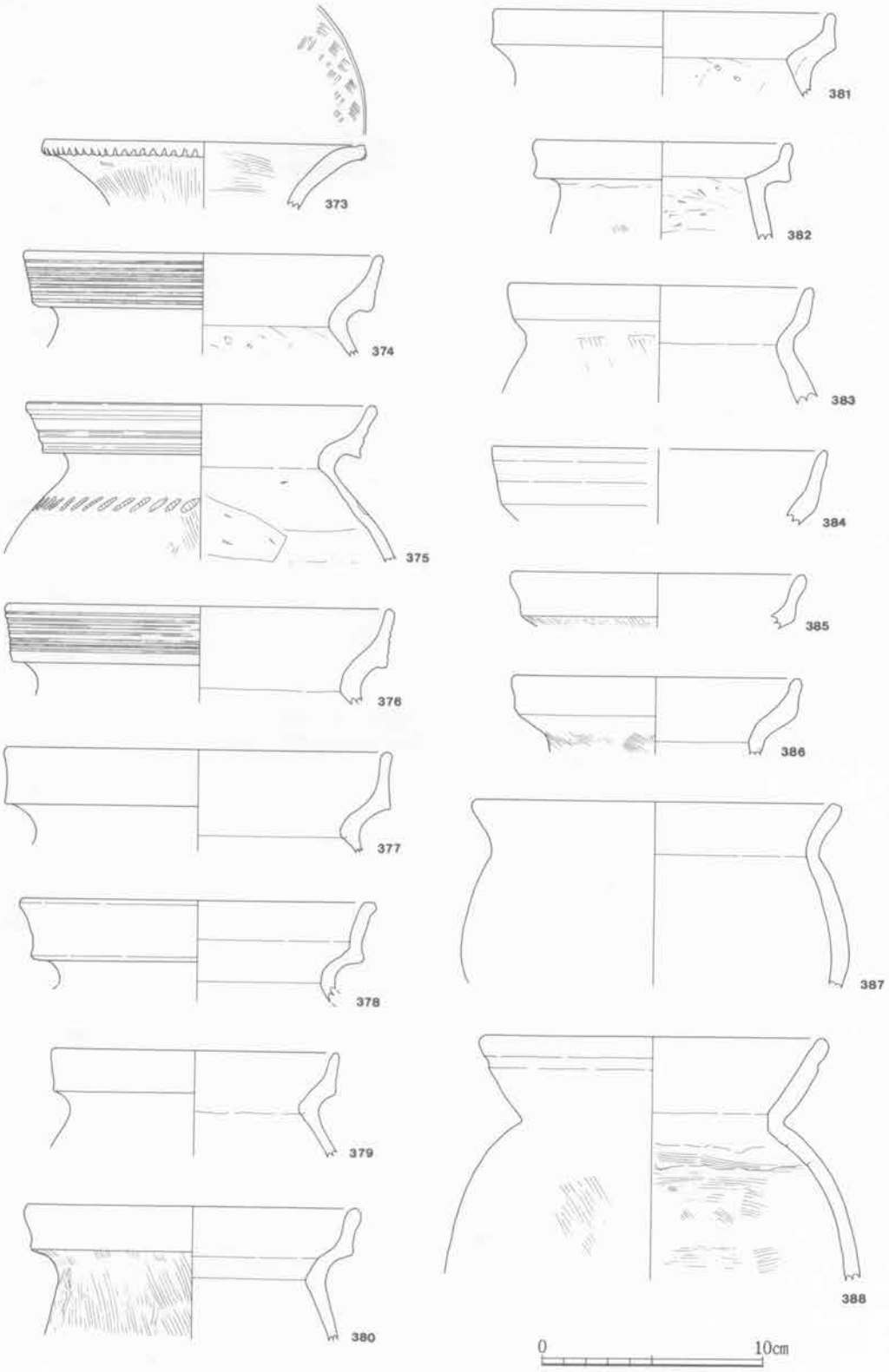
第31図　SK301･302出土遺物（S＝1／6）



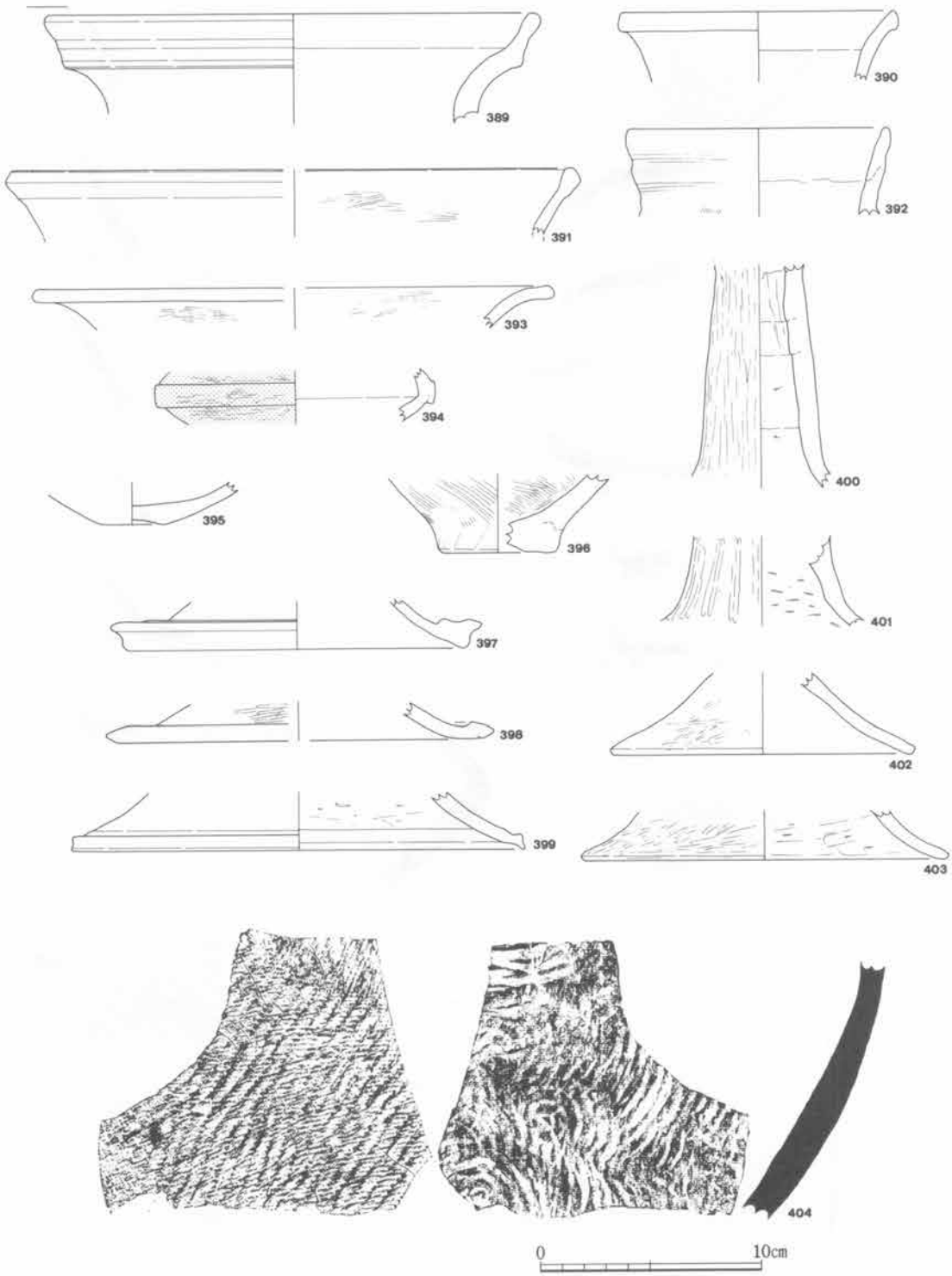
第32図　SK302出土遺物（S＝1／6）



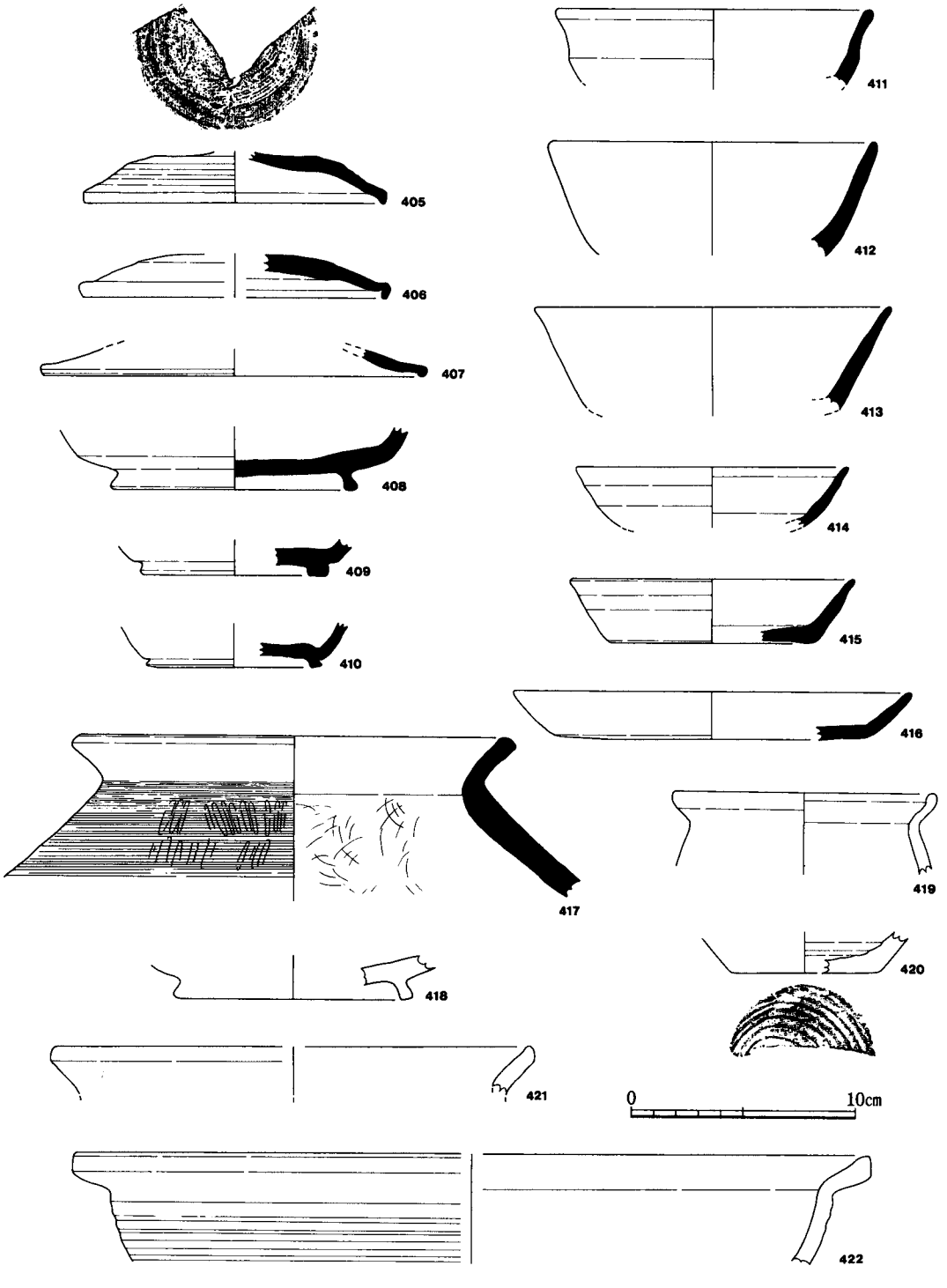
第33図　土坑・溝・ピット出土遺物



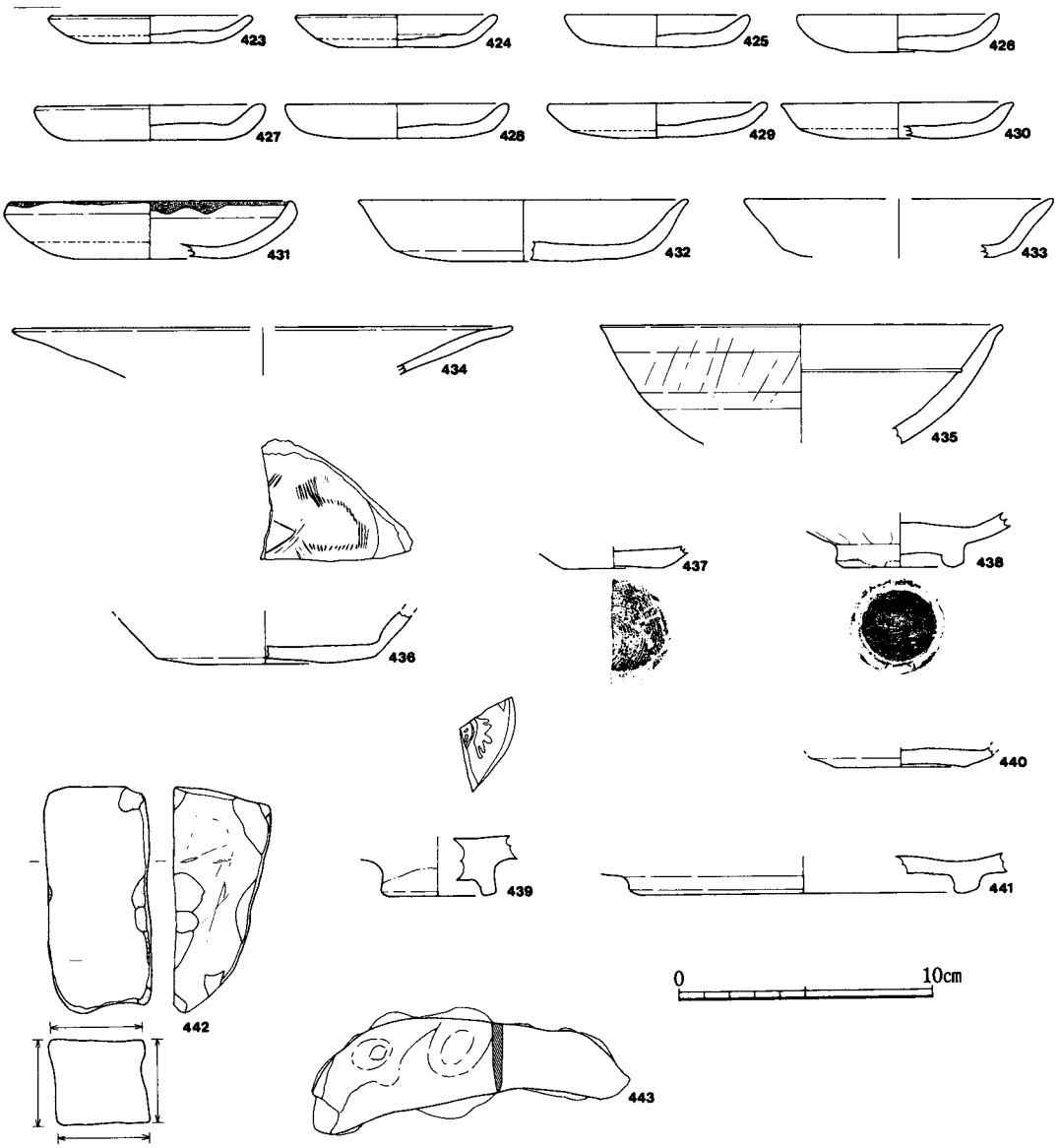
第34図　包含層出土遺物



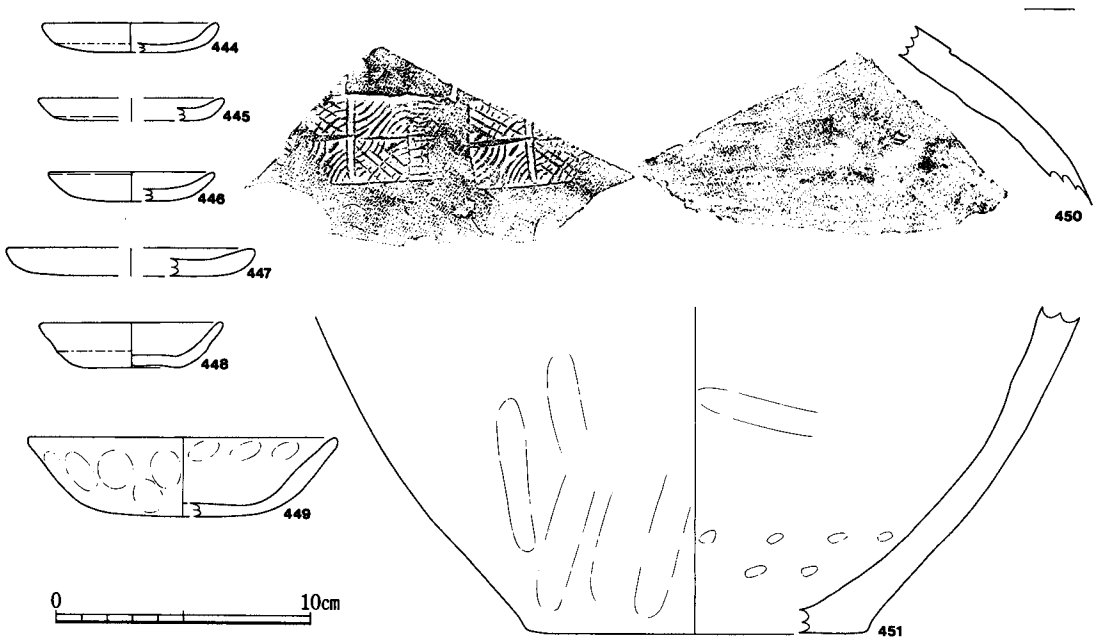
第35図　包含層出土遺物



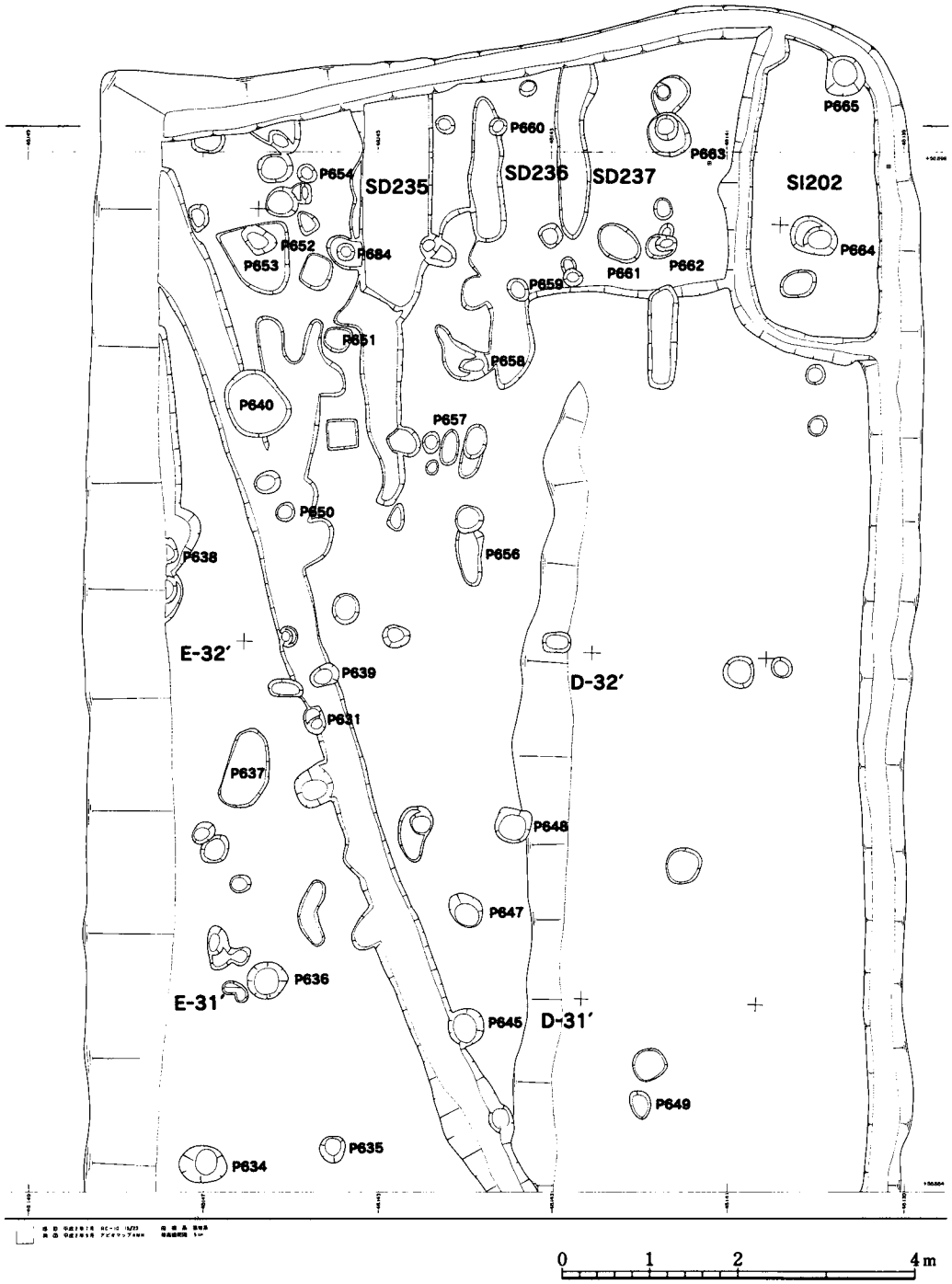
第36図　包含層出土遺物



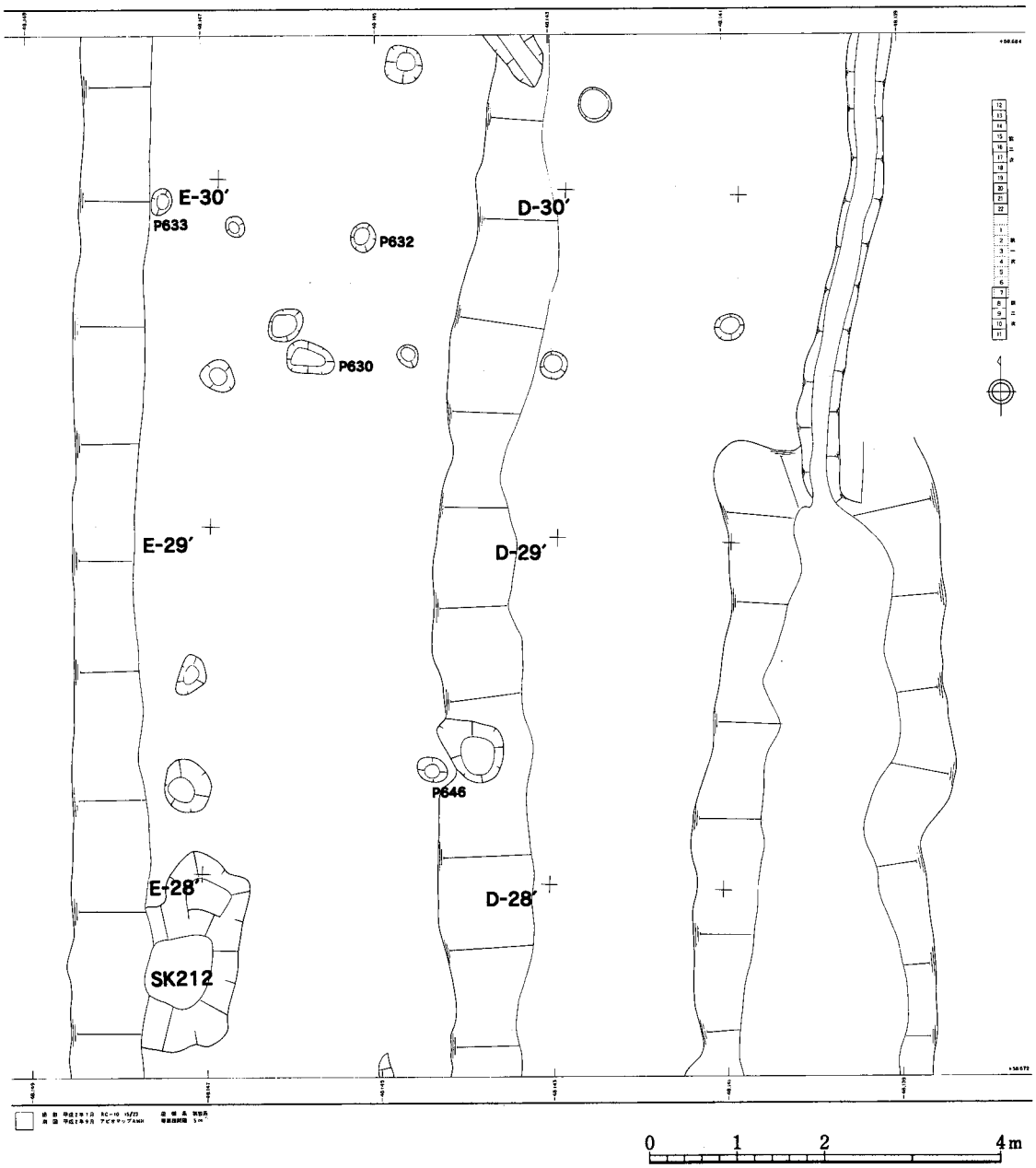
第37図　包含層出土遺物



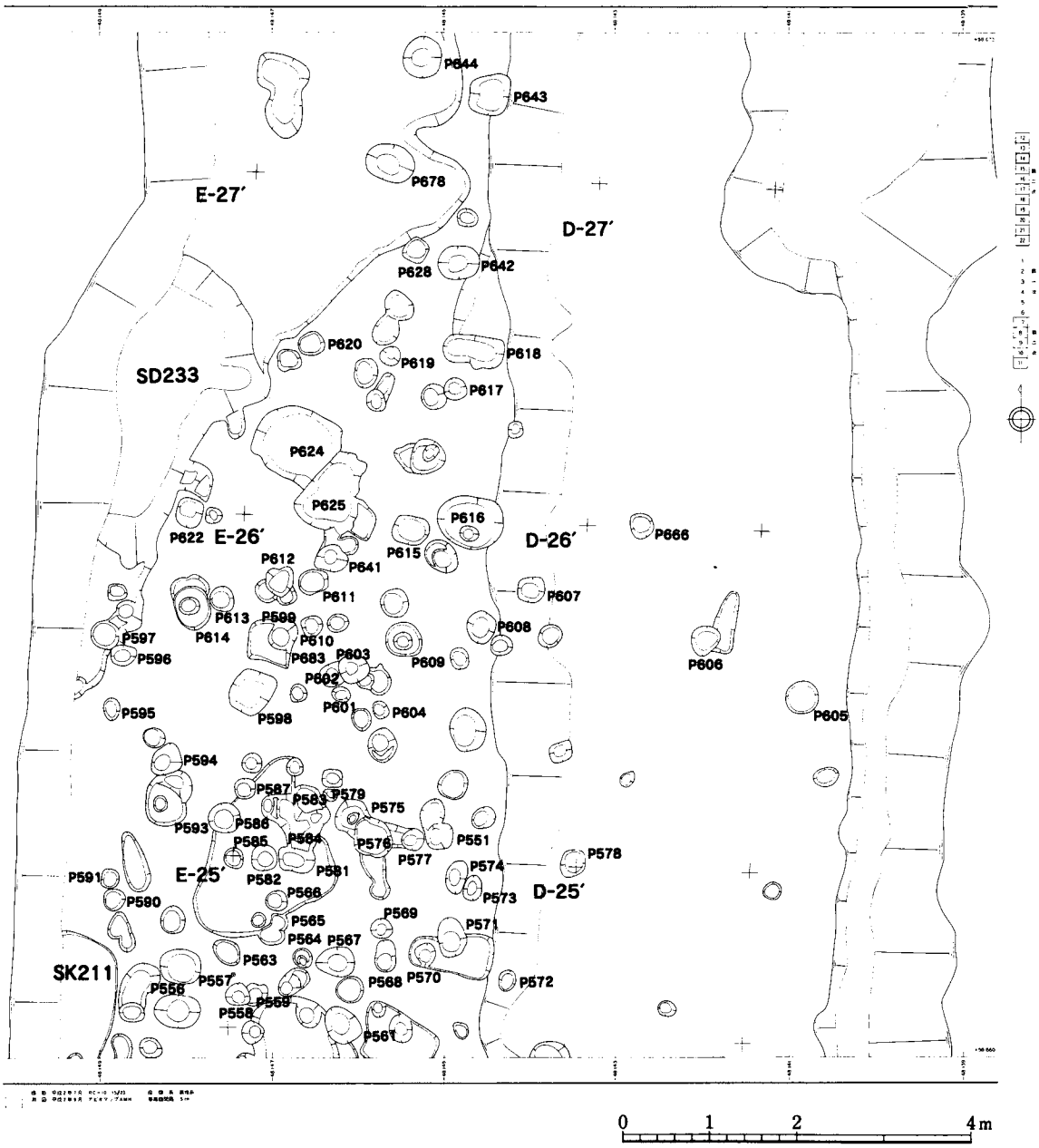
第38図　SK202－1出土遺物



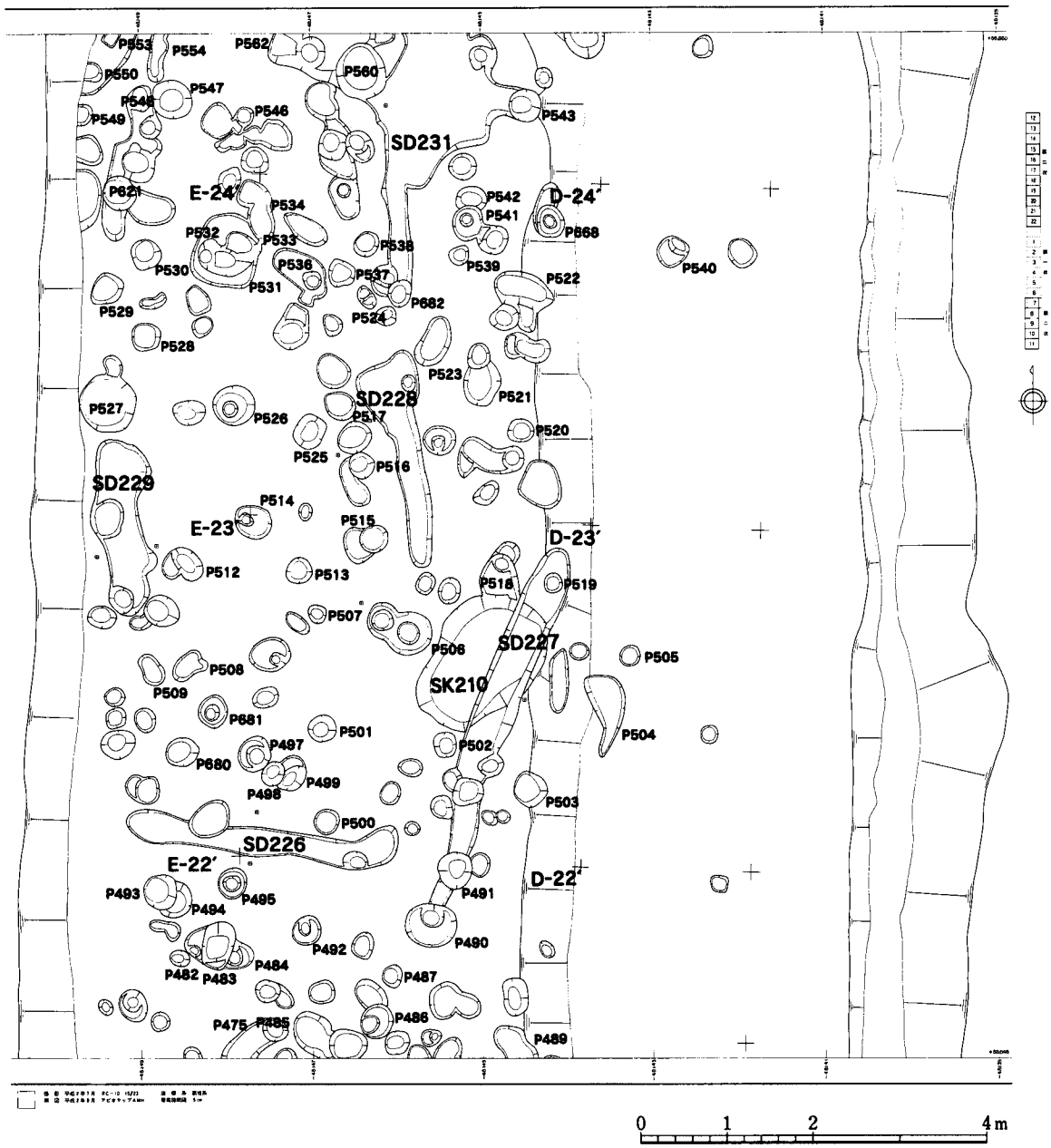
第39図　調査区平面図（1）（S＝1／80）



第40図　調査区平面図（2）（S＝1／80）

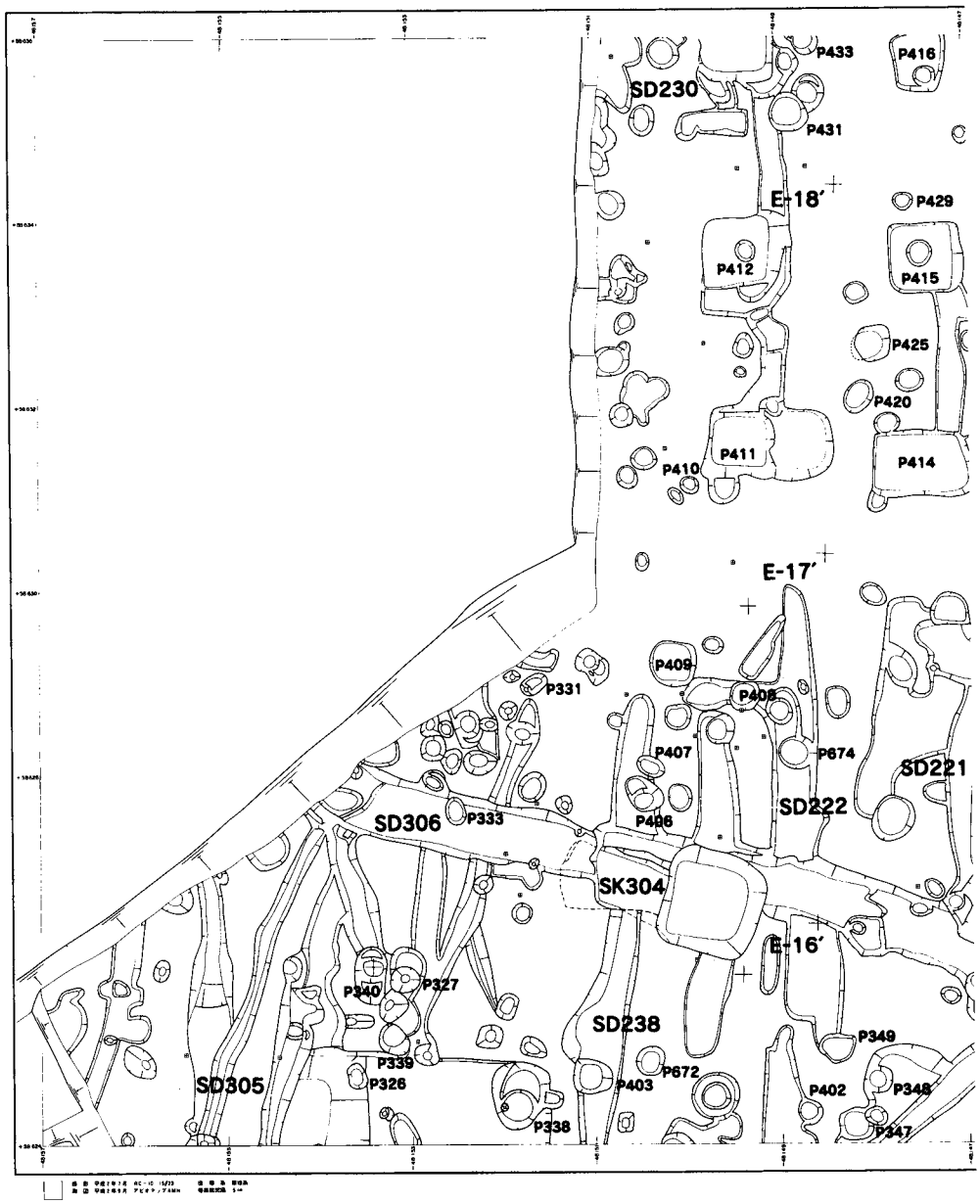


第41図　調査区平面図（3）（S＝1／80）

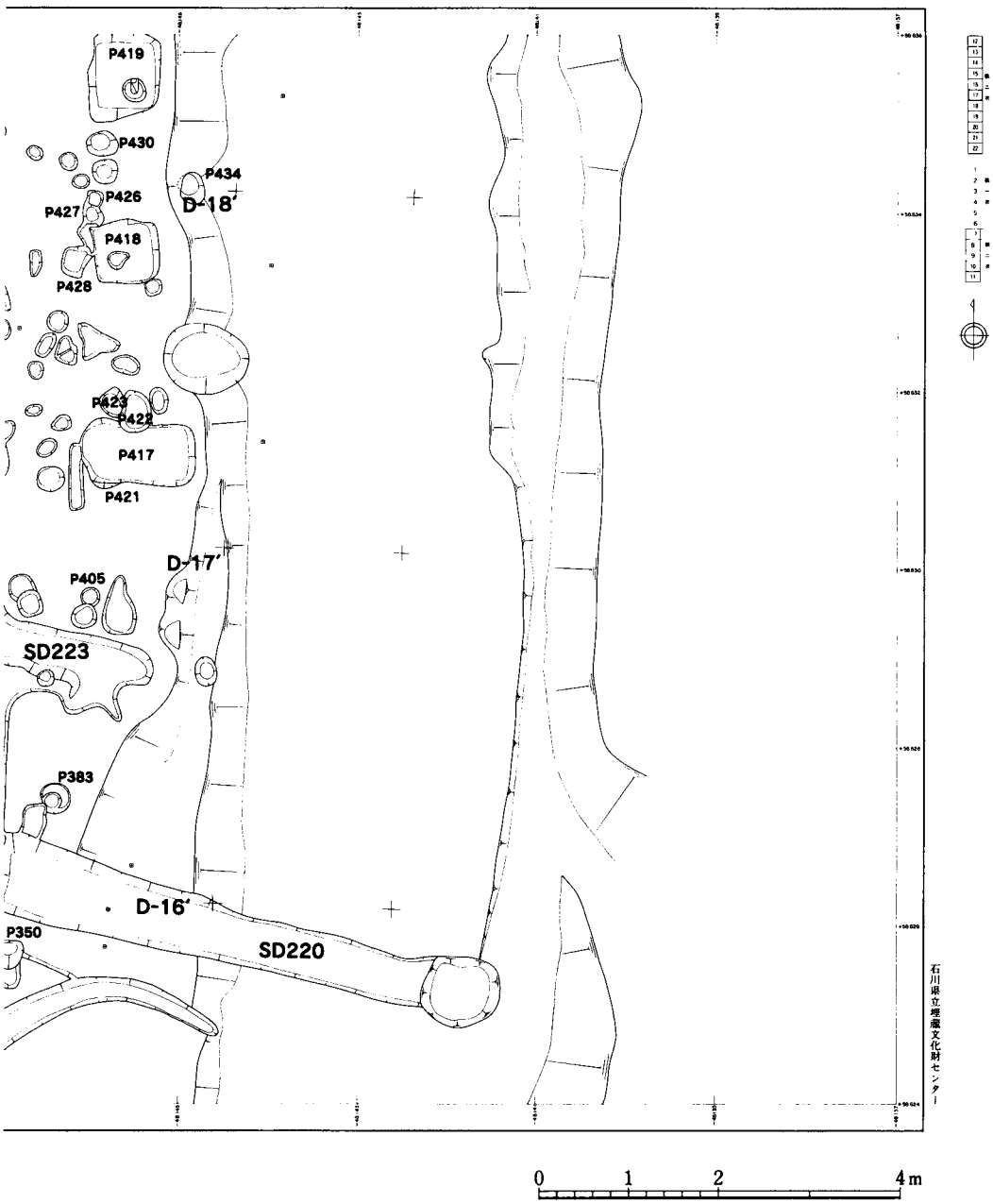


第42図　調査区平面図（4）（S＝1／80）

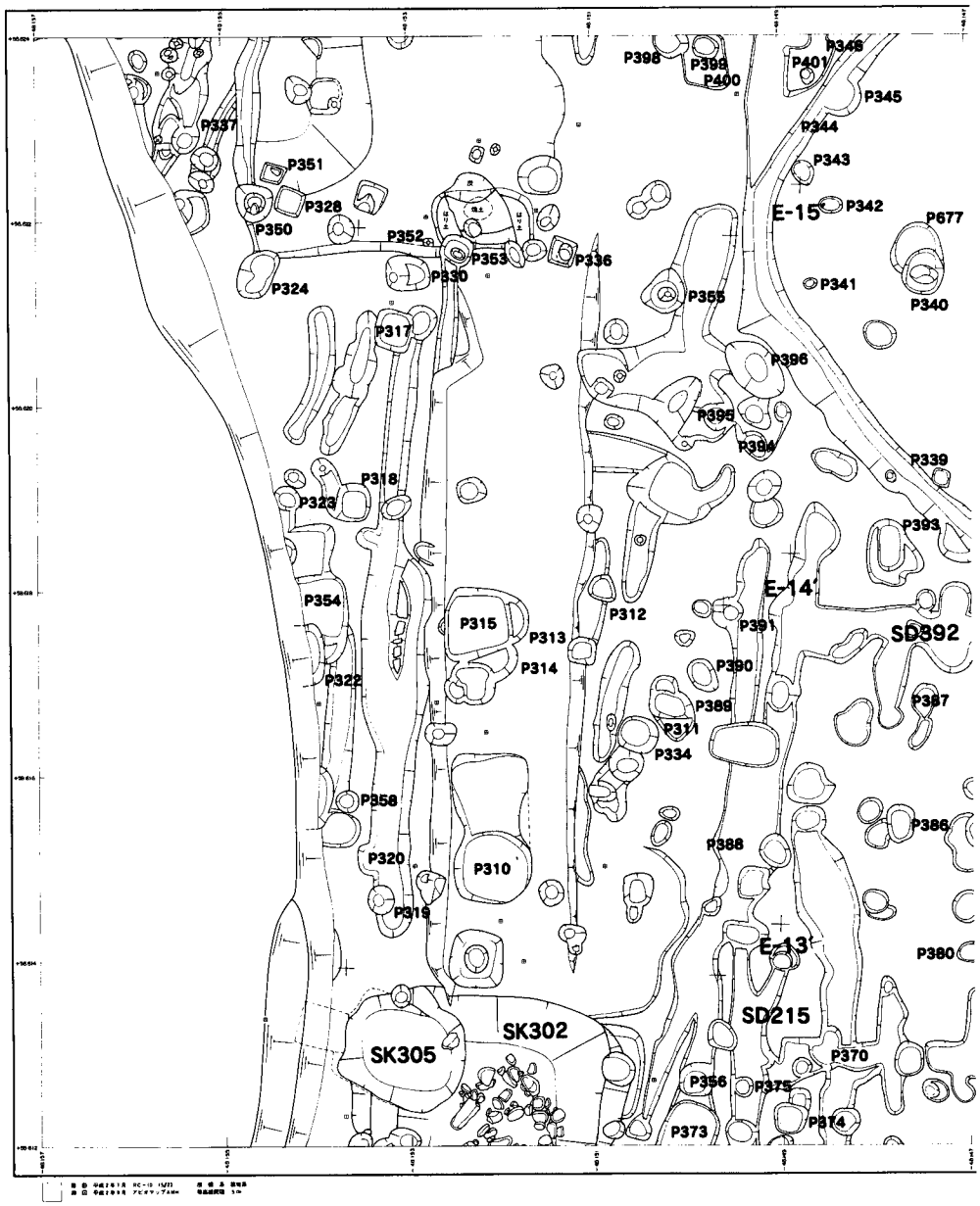
第43図　調査区平面図（5）（S＝1／80）



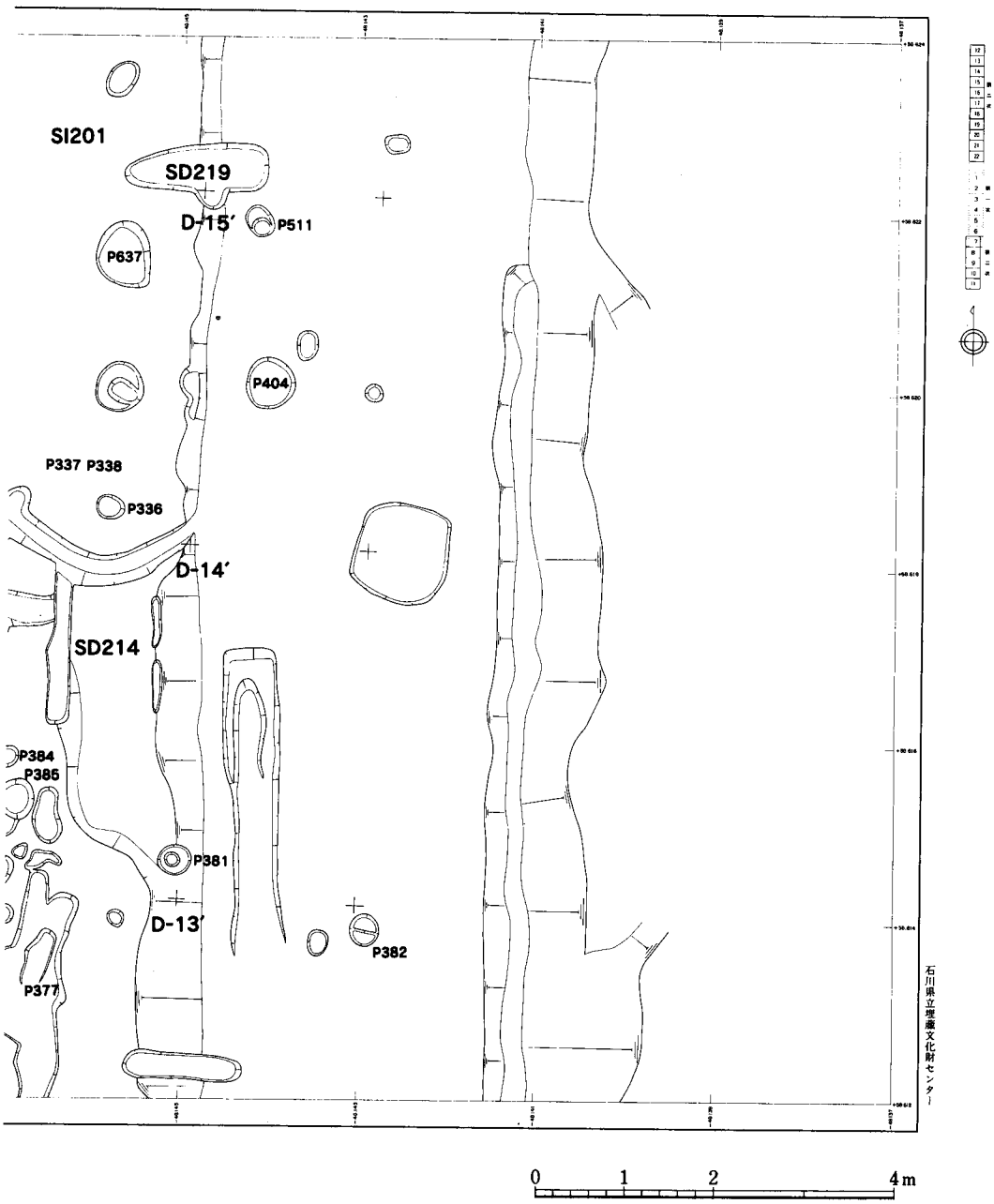
第44図　調査区平面図（6）（S＝1／80）



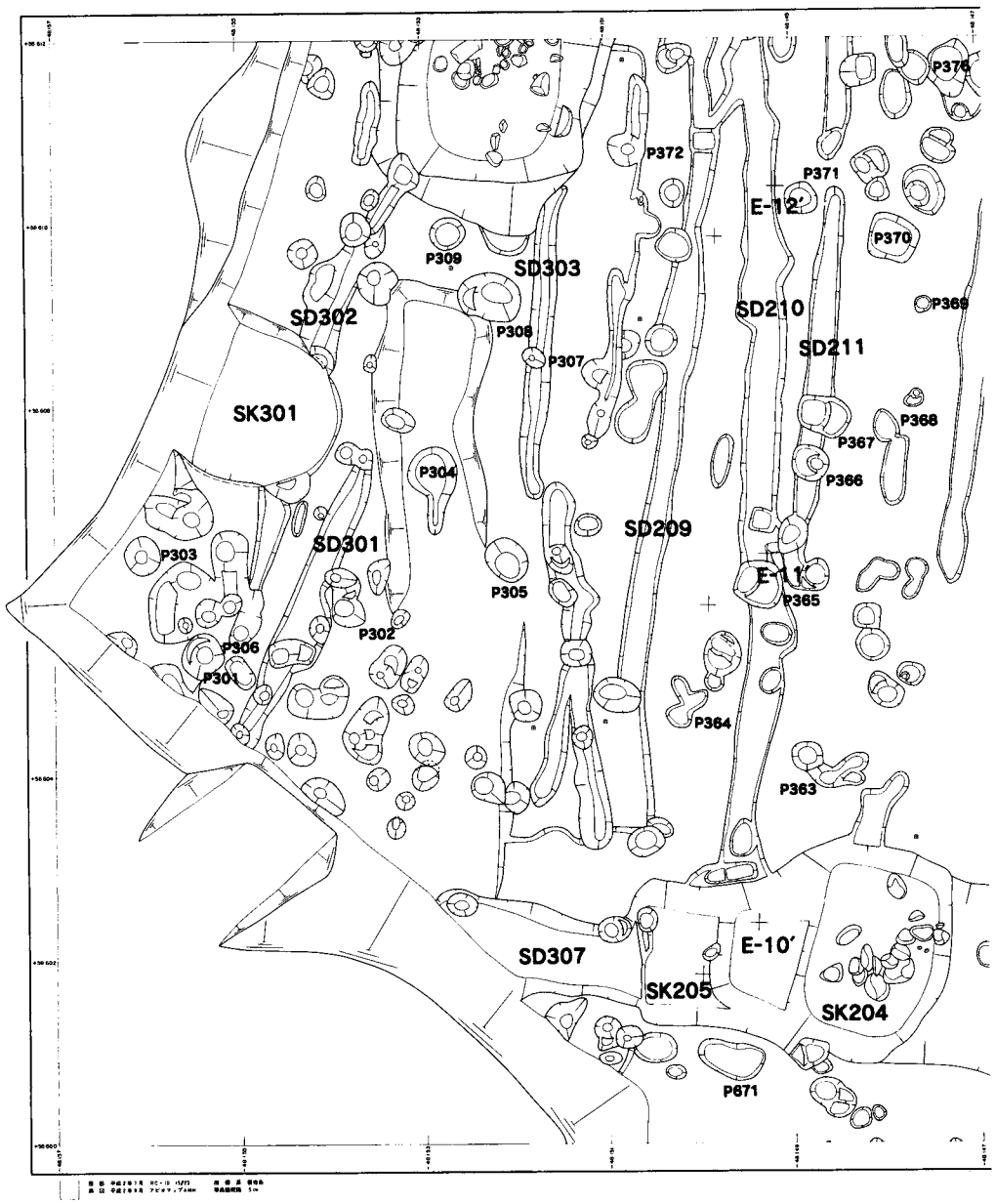
第45図　調査区平面図（7）（S＝1／80）



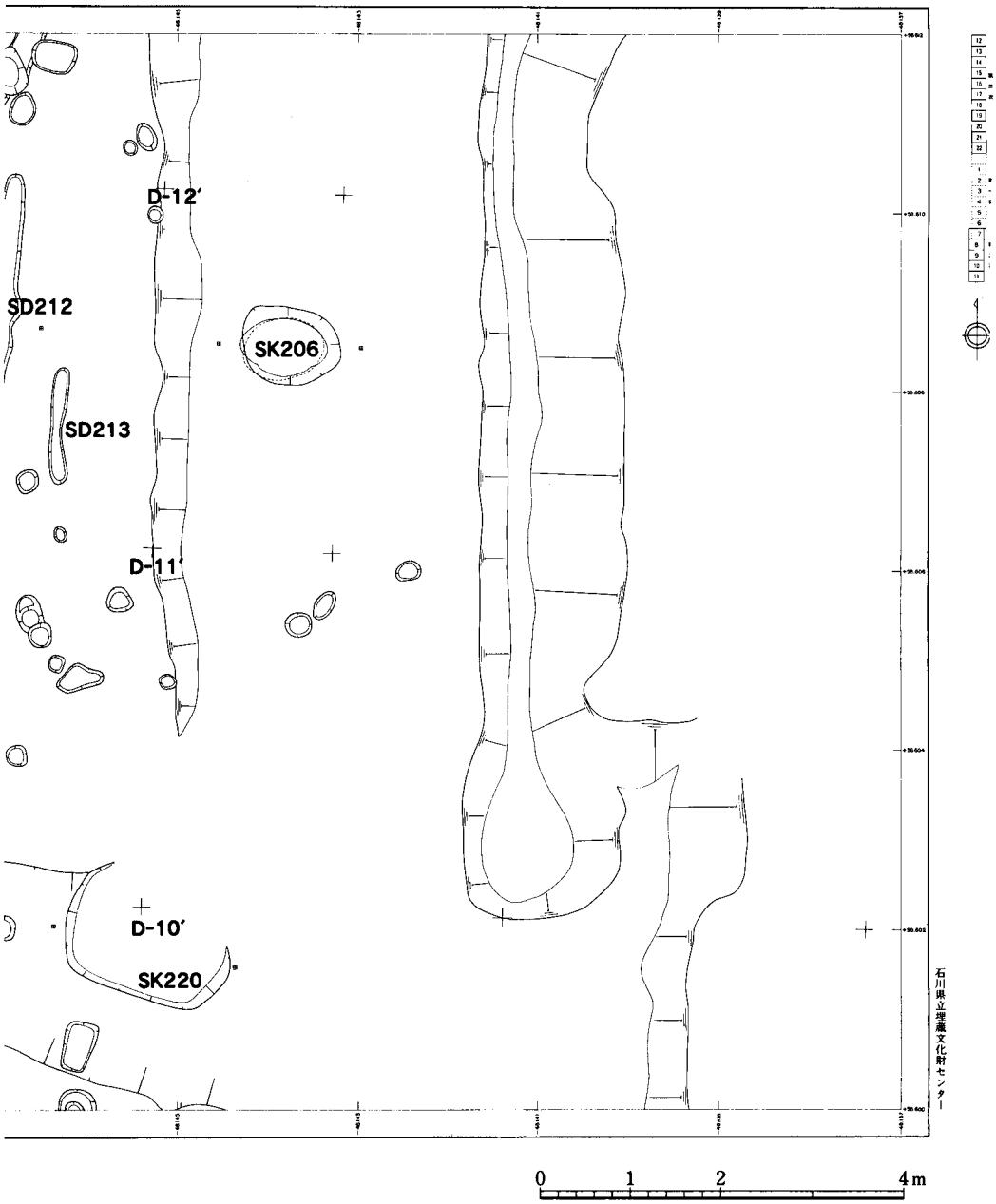
第46図　調査区平面図（8）（S＝1／80）



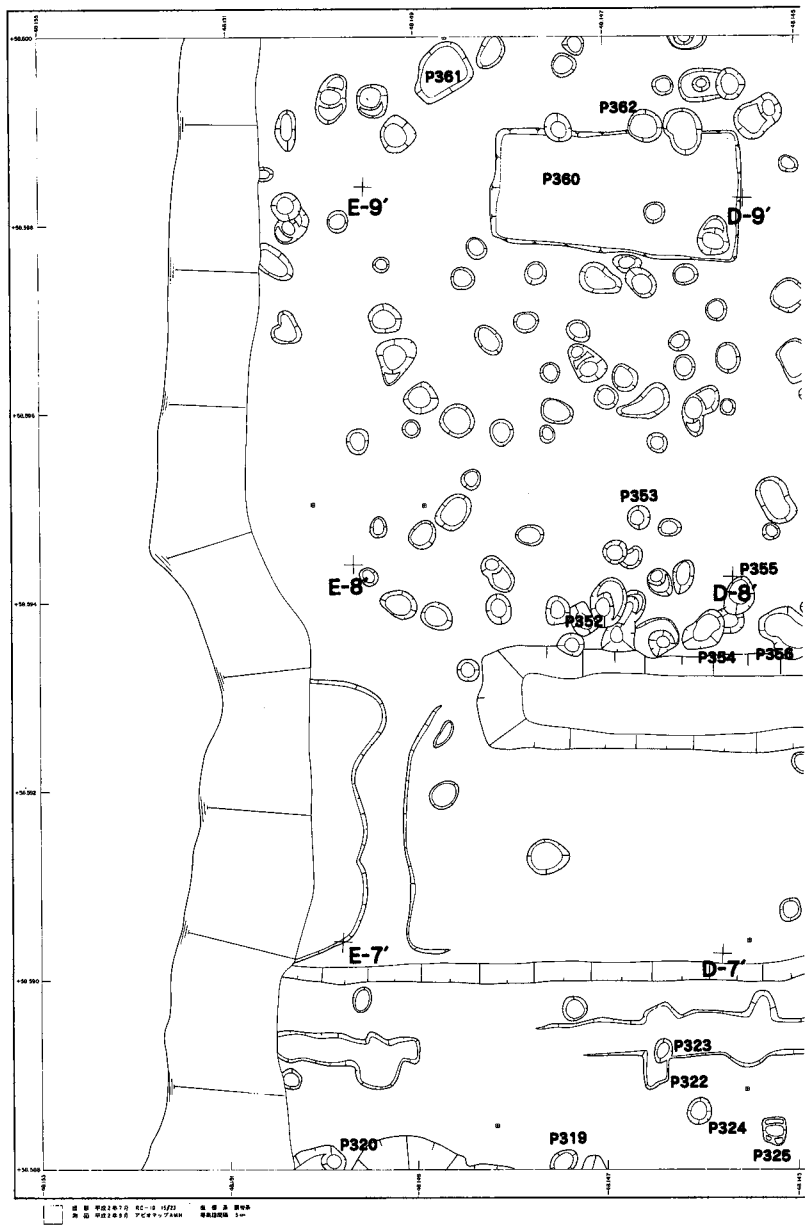
第47図　調査区平面図（9）（S＝1／80）



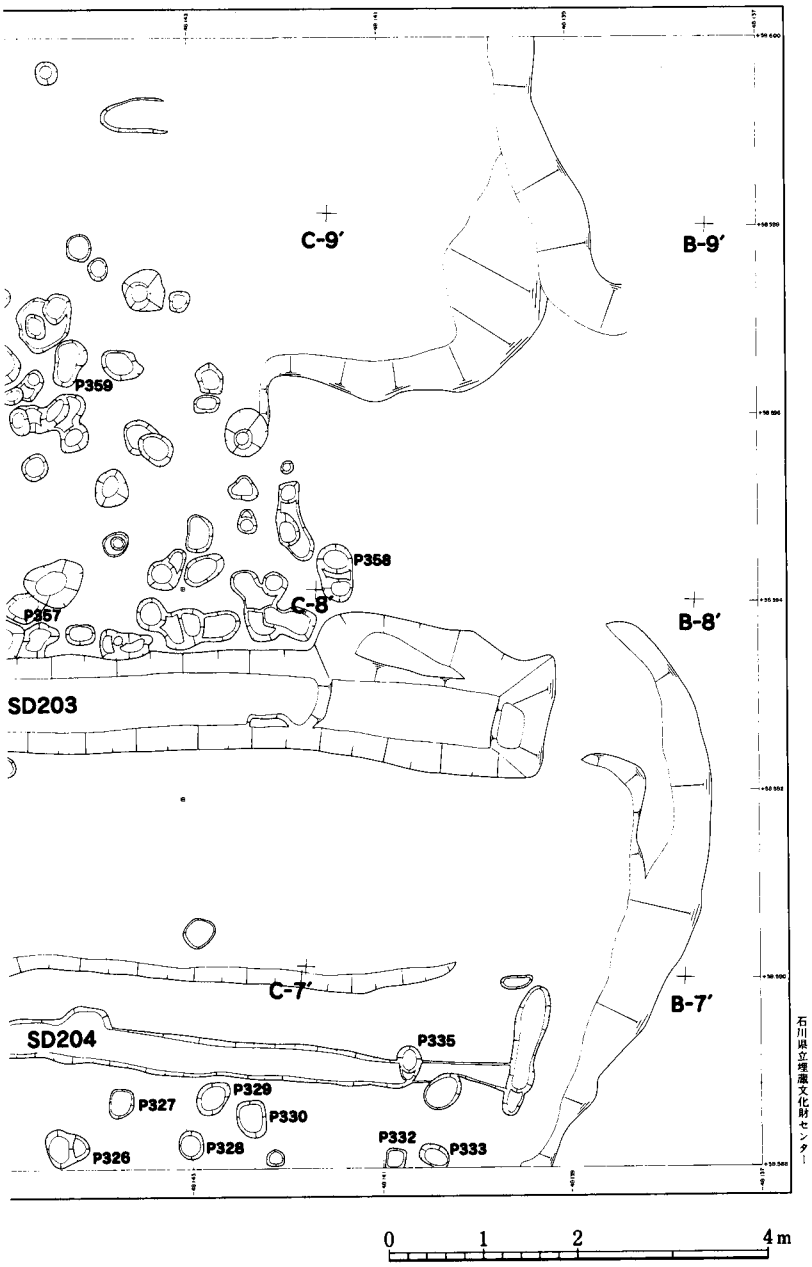
第48図　調査区平面図（10）（S＝1／80）



第49図　調査区平面図（11）（S＝1／80）

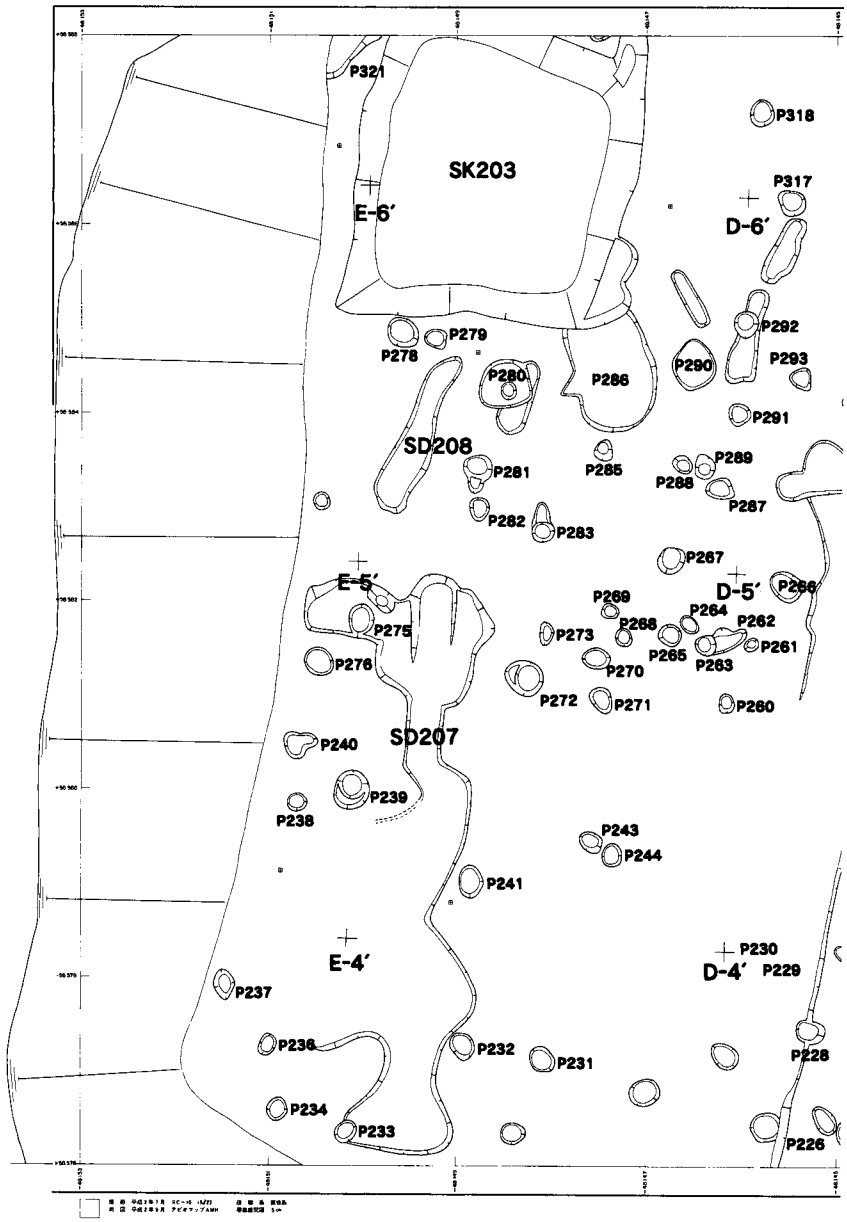


第50図　調査区平面図（12）（S＝1／80）

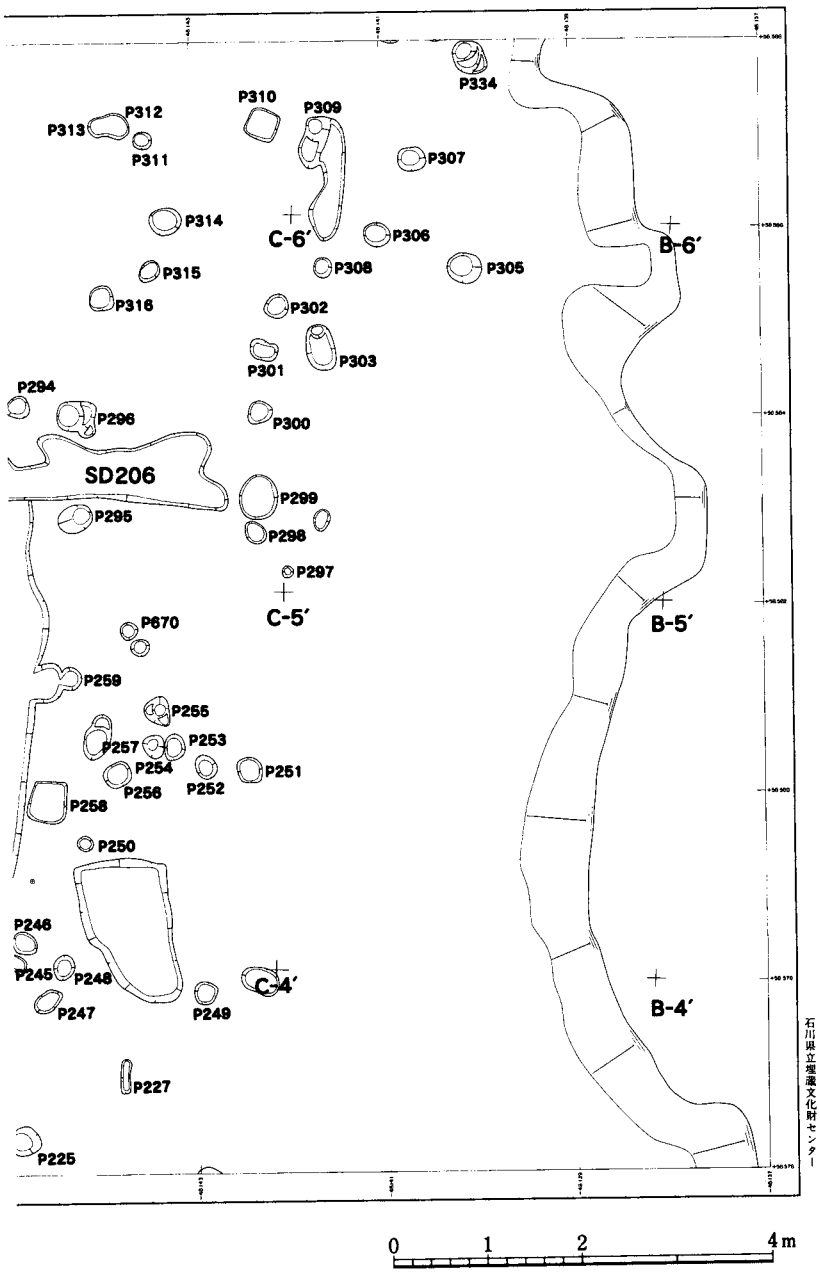


石川県立埋蔵文化財センター

第51図　調査区平面図（13）（S＝1／80）

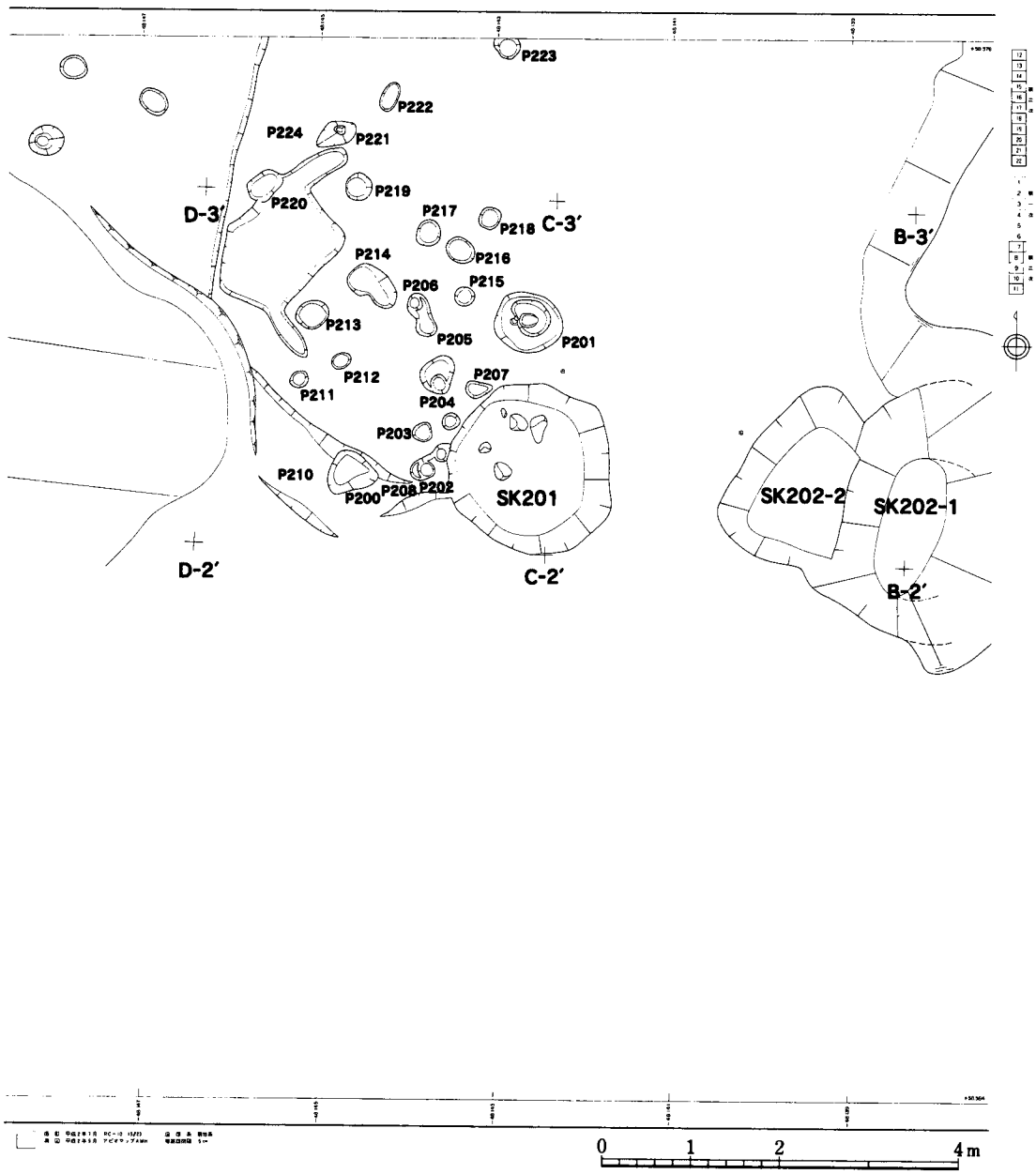


第52図　調査区平面図（14）（S＝1／80）

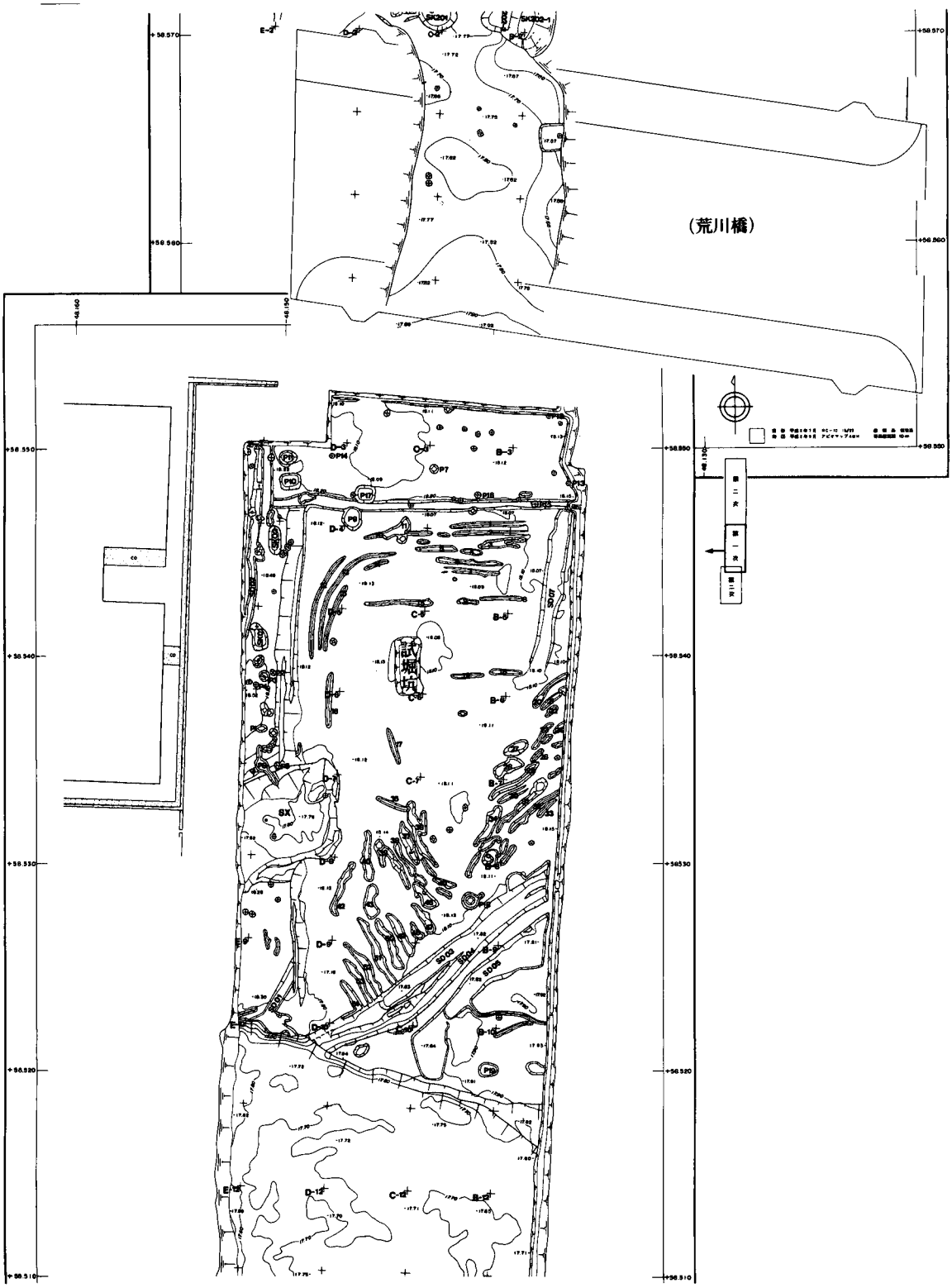


石川県立埋蔵文化財センター

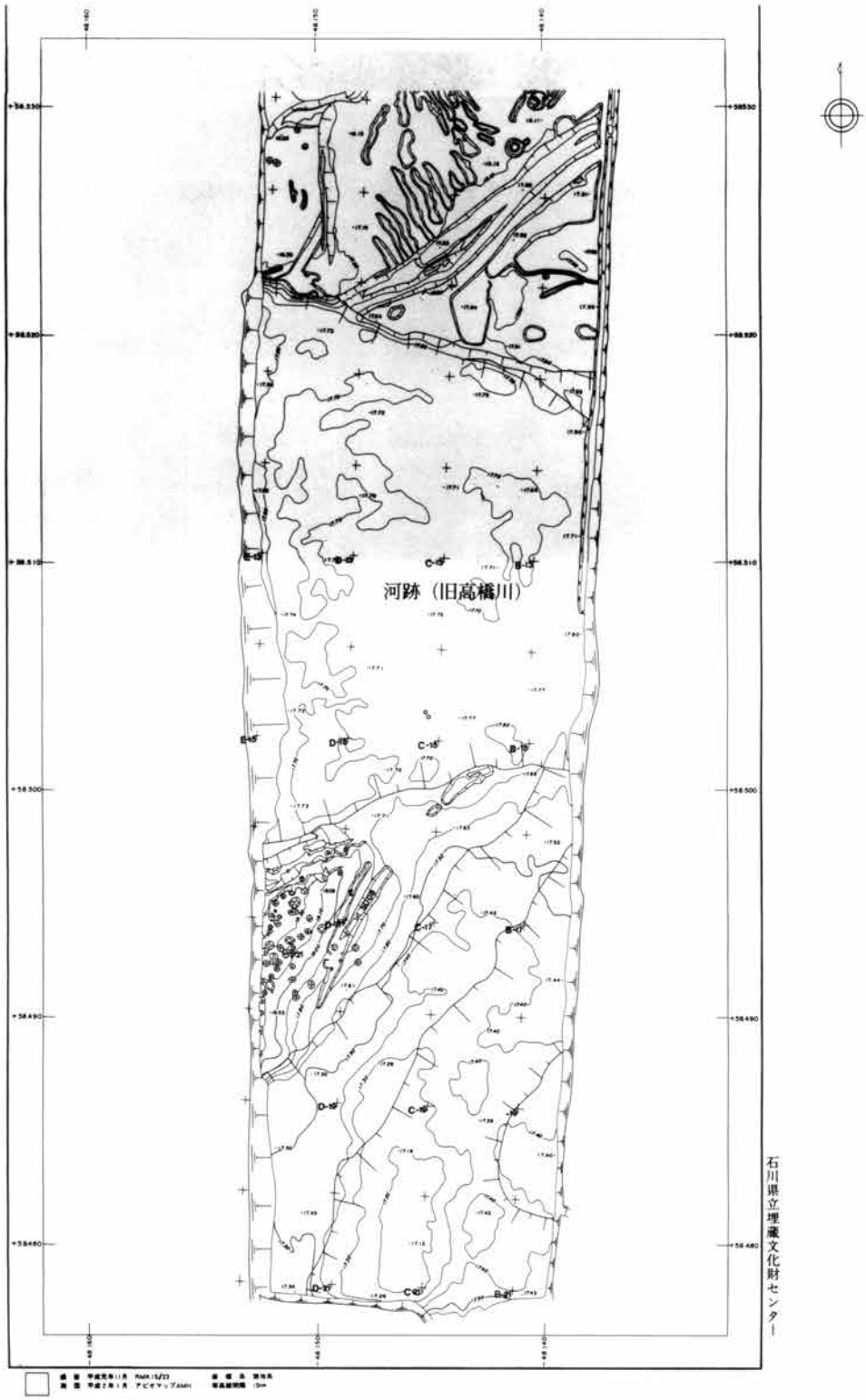
第53図　調査区平面図（15）（S＝1／80）



第54図　調査区平面図（16）（S＝1／80）

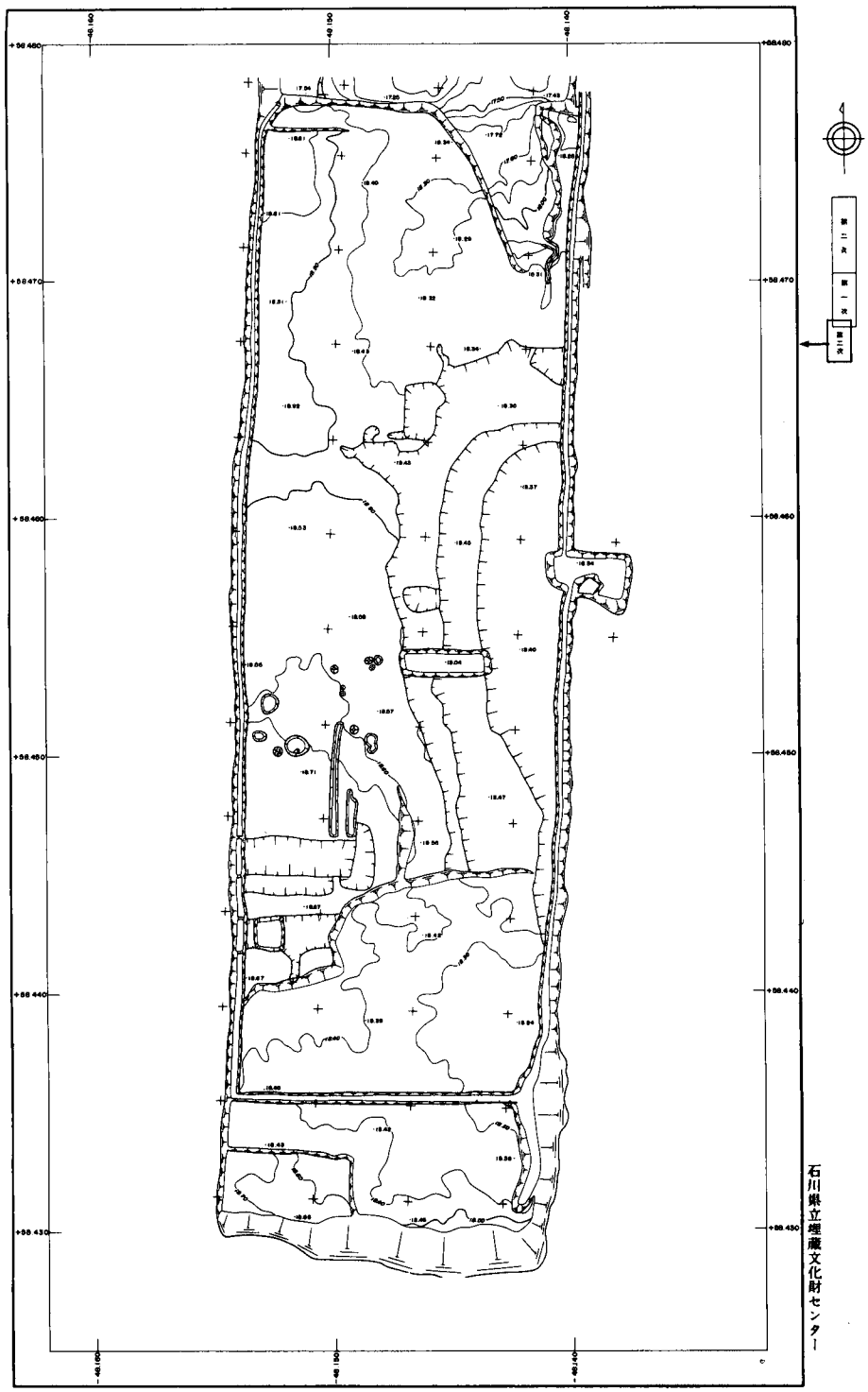


第60図　調査区平面図（17）（S＝1／300）



石川県立埋蔵文化財センター

第61図　調査区平面図（18）（S＝1／300）



第62図　調査区平面図（19）（S＝1／300）

写 真 図 版

図版1

遺跡周辺航空写真（1947年撮影）

図版2

扇が丘ゴショ遺跡遠景（第２次発掘調査中航空写真。南から）

第２次発掘調査荒川橋以北航空写真（南から）

荒川橋以南の調査区（北から。第１次調査直前）

第１次調査畝溝状遺構検出風景（西から）

荒川橋以南の調査区（南から。第１次調査直前）

第１次調査畝溝状遺構完堀風景（西から）

第１次調査遺構検出風景（南から）

第１次調査北半側遺構検出風景（南から）

第１次調査遺構完堀風景（南から）

第１次調査北半側遺構完堀風景（南から）

図版4

旧高橋川の検出状況（南東より）

第２次調査荒川橋以南の遺構検出風景（南から）

旧高橋川北岸付近の土層堆積状況（東から）

第２次調査荒川橋以南の遺構完掘風景（川跡は未掘）

第１次調査遺構検出風景（南から）
（東西方向の近代高橋川と近代以前の川跡。それらに削り残されたわずかな遺構）

第２次調査荒川橋以北の遠景（北北東から）

第１次調査遺構完掘風景（南から。川跡は未掘）

付け替えが完了した荒川橋と第２次調査区（北北東から）

第２次調査荒川橋以北上層遺構検出風景（南から。下半分は下層遺構と同時に検出）

第２次調査荒川橋以北上層遺構完掘風景（南から）

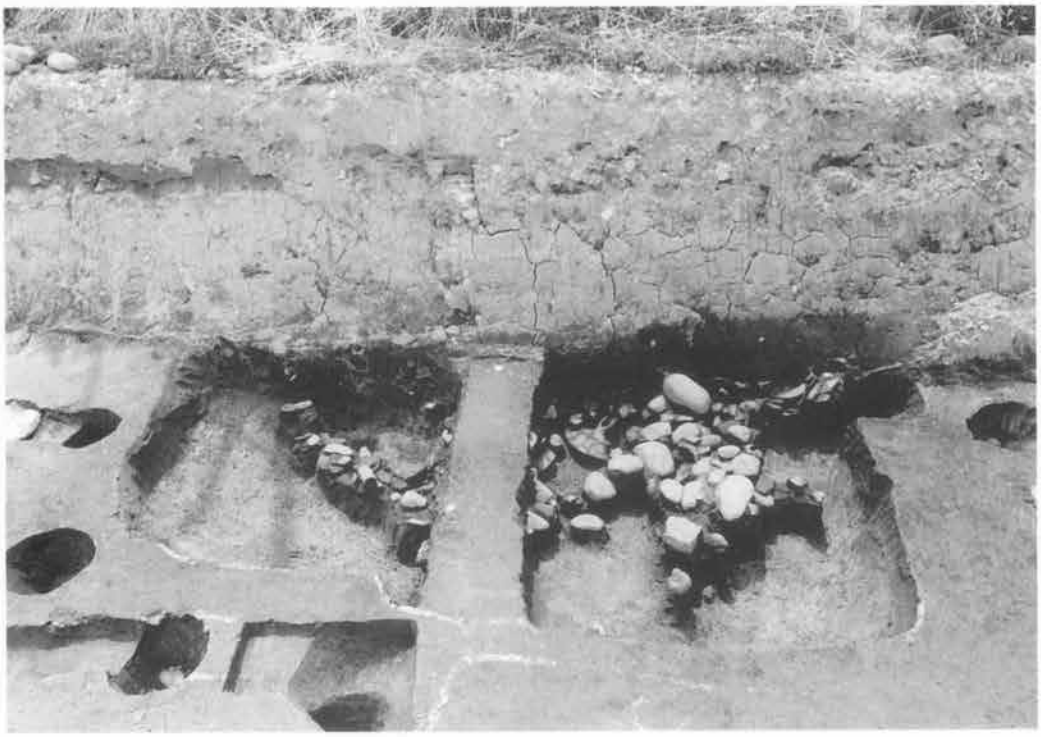
図版6

第２次調査荒川橋以北下層遺構検出風景（南から。上層遺構完堀後）

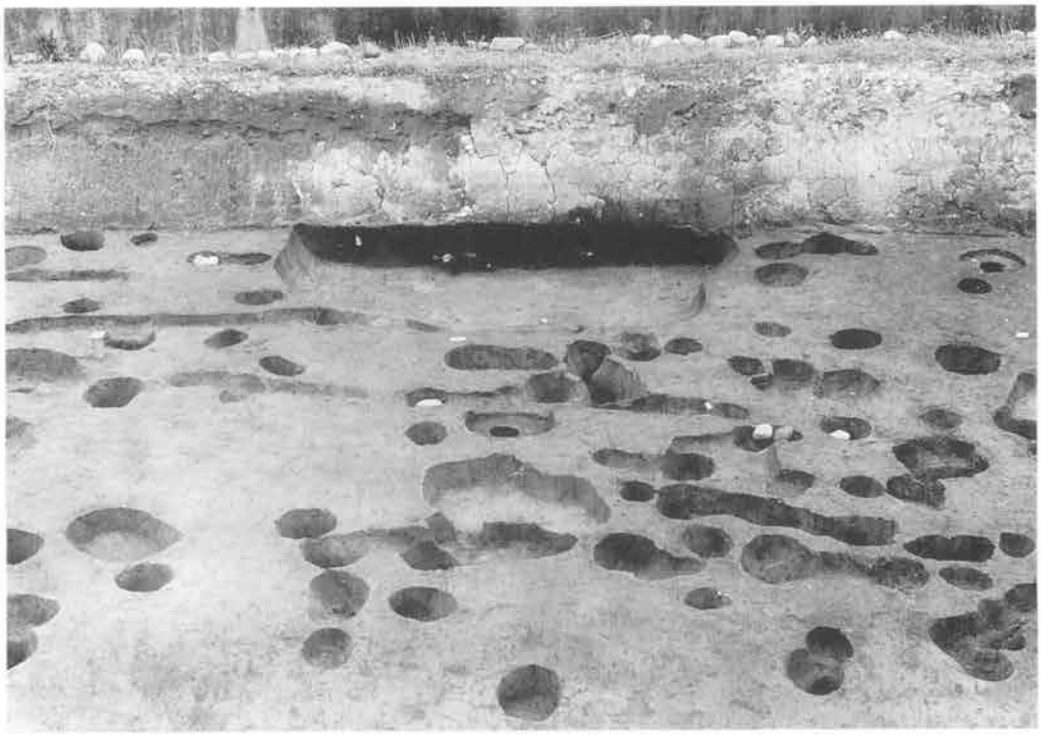
第２次調査荒川橋以北下層遺構完堀風景（南から）

第２次調査荒川橋以北遺構検出風景（北から。手前側は上層遺構。奥側は下層遺構）

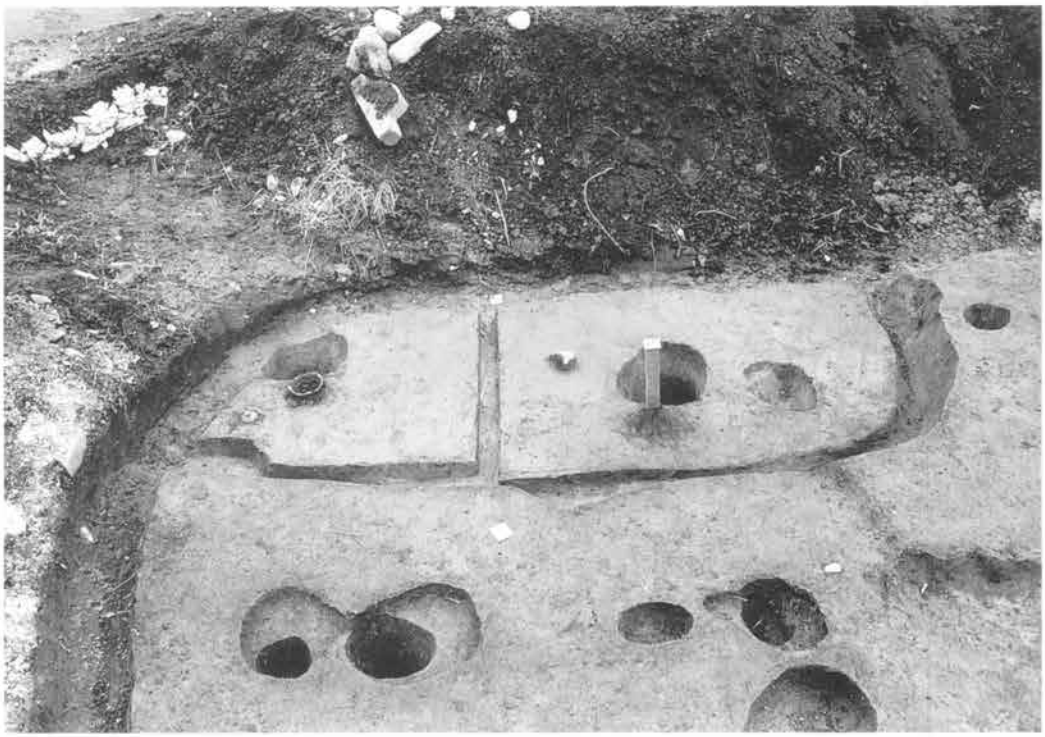
第２次調査荒川橋以北遺構完堀風景（北から）



SK209遺物出土状況（西から）



SK209完堀風景（西から）



SI202完掘風景（西から）

SI202土器出土状況（西から）

SI201完堀風景（東から）

SB202完堀風景（東から）

SB201検出風景（北から）

SD220(SX202)土師器出土状況(東から。上層部分)

SB201完堀風景（北から）

SD220(SX202)完堀風景(東から。溝底部分にも完形土師器出土)

SX201土師器出土状況（北から）

SX202完堀風景（東から）

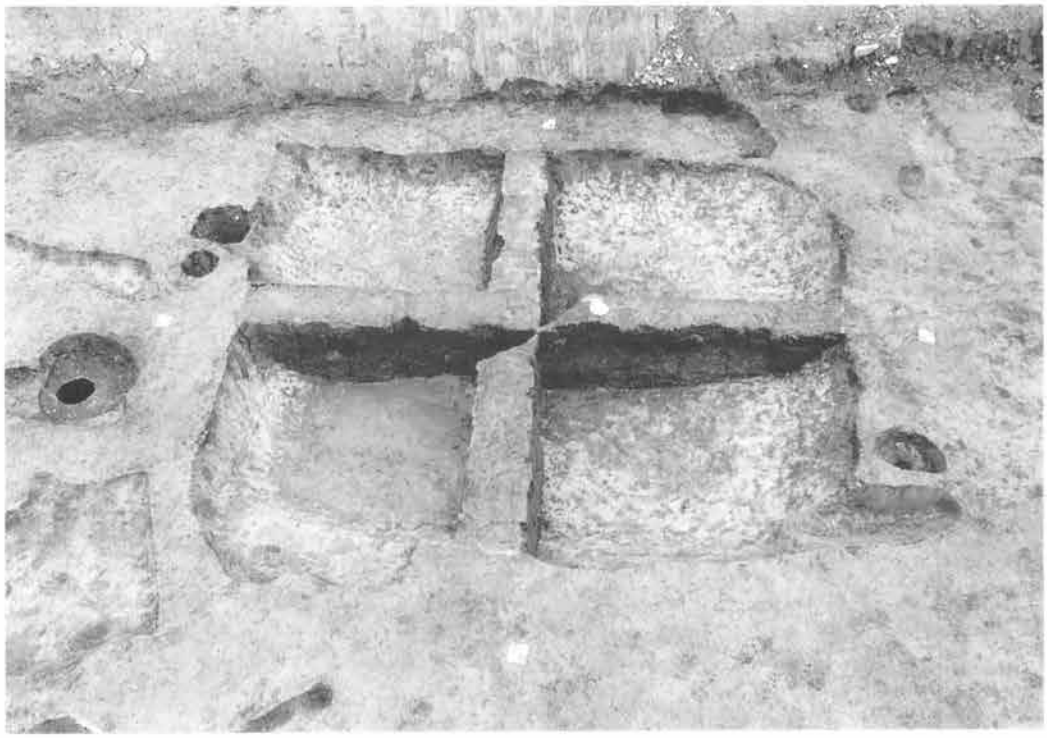
SX201土師器出土状況（東から）

SX206完堀風景（東から）

図版12

SD203・204完堀風景（東から）

荒川橋真下部分完堀風景（北東から）



SK203発掘風景（東から）

SK204・SD201発掘風景（東から）

SD201・P201完堀風景（南から）

P201完堀風景（東から）

P517土器出土状態（南東から）

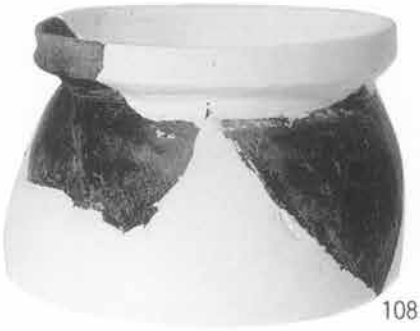
上層遺構SD227・下層遺構SK220完堀風景（北から）

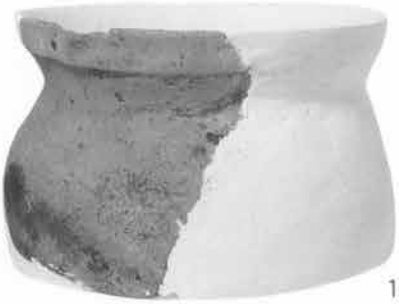
74

79

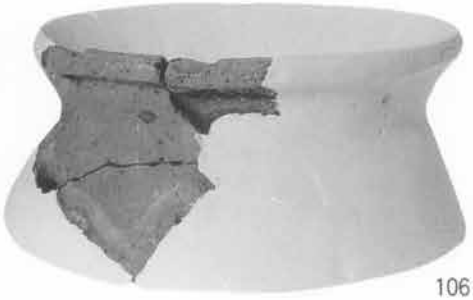
96

88


108


105

125

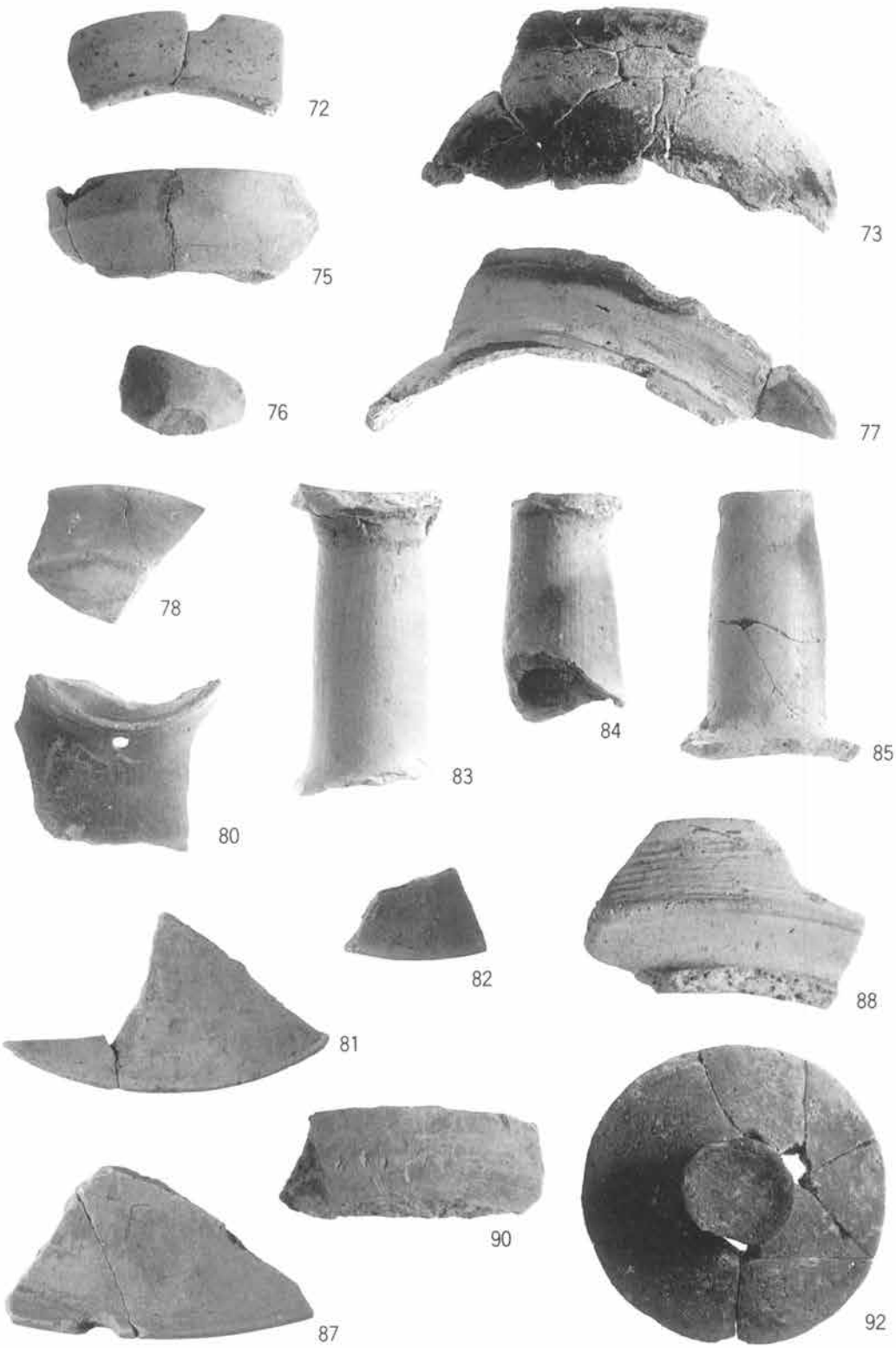

106

122

367

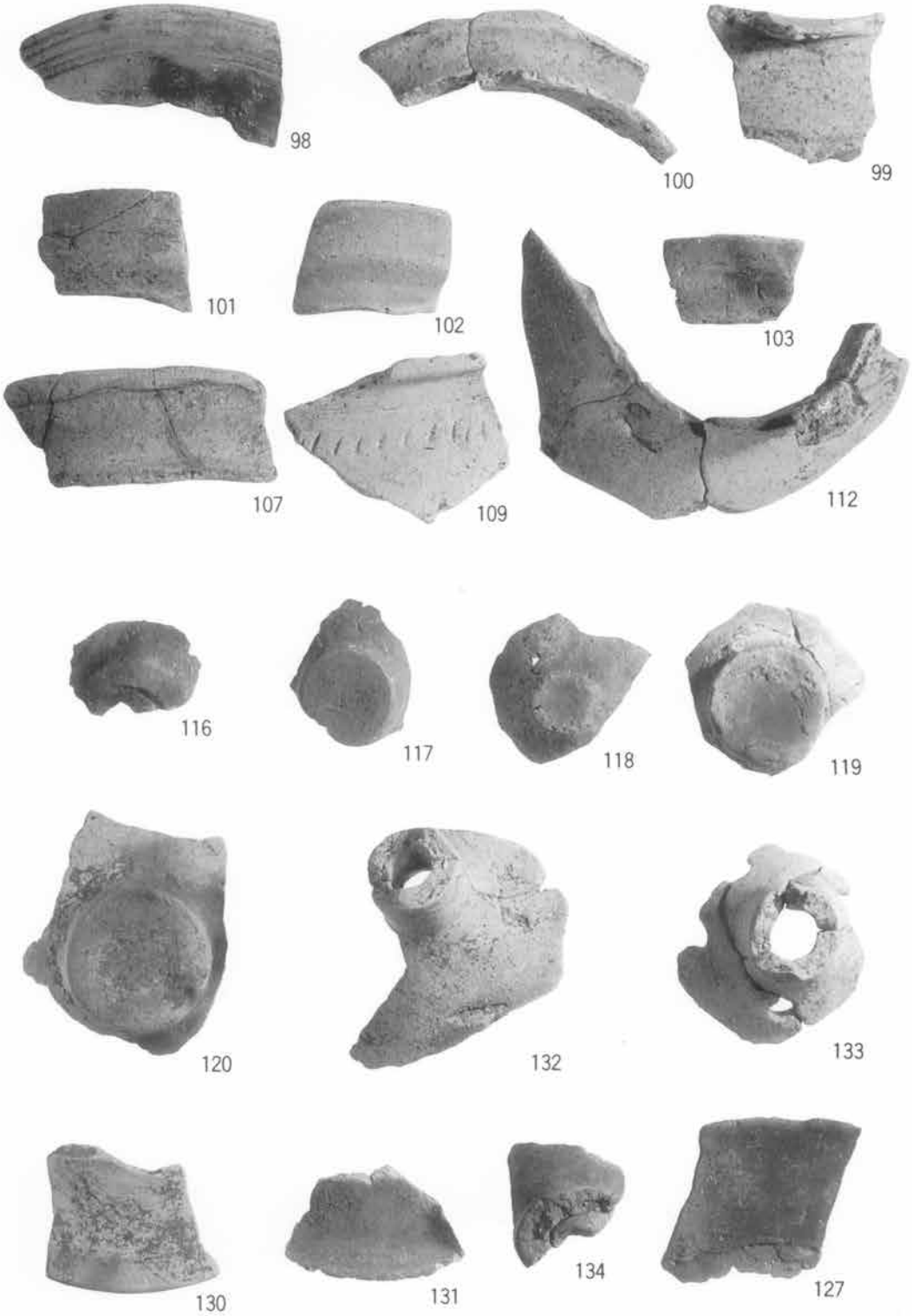
94

SI201・202他出土遺物

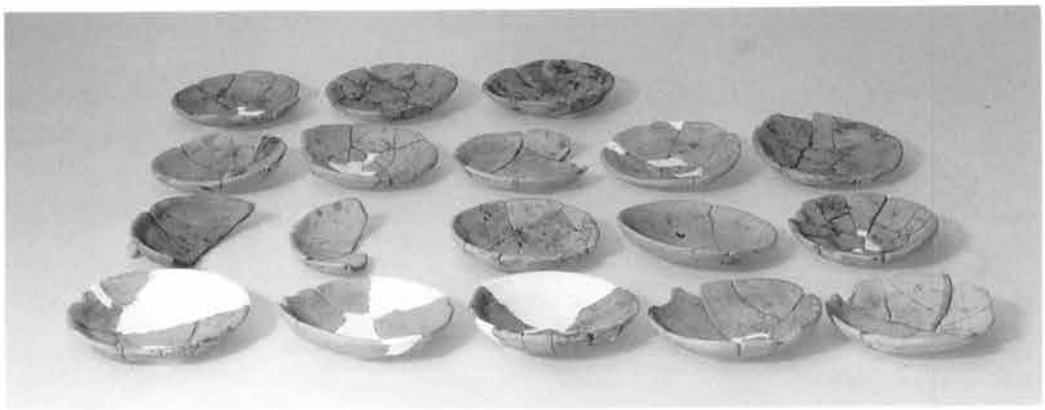


SI201・202出土遺物

図版18



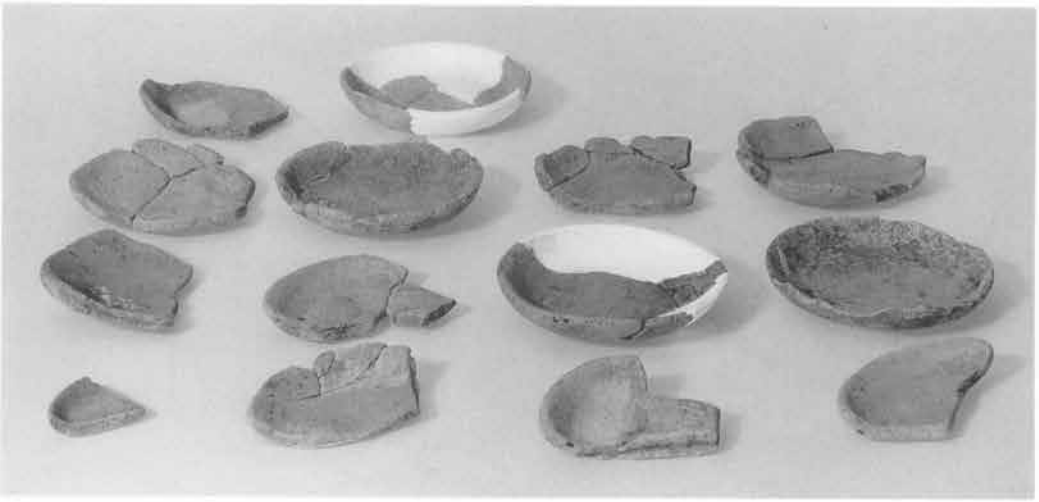
SK209出土遺物



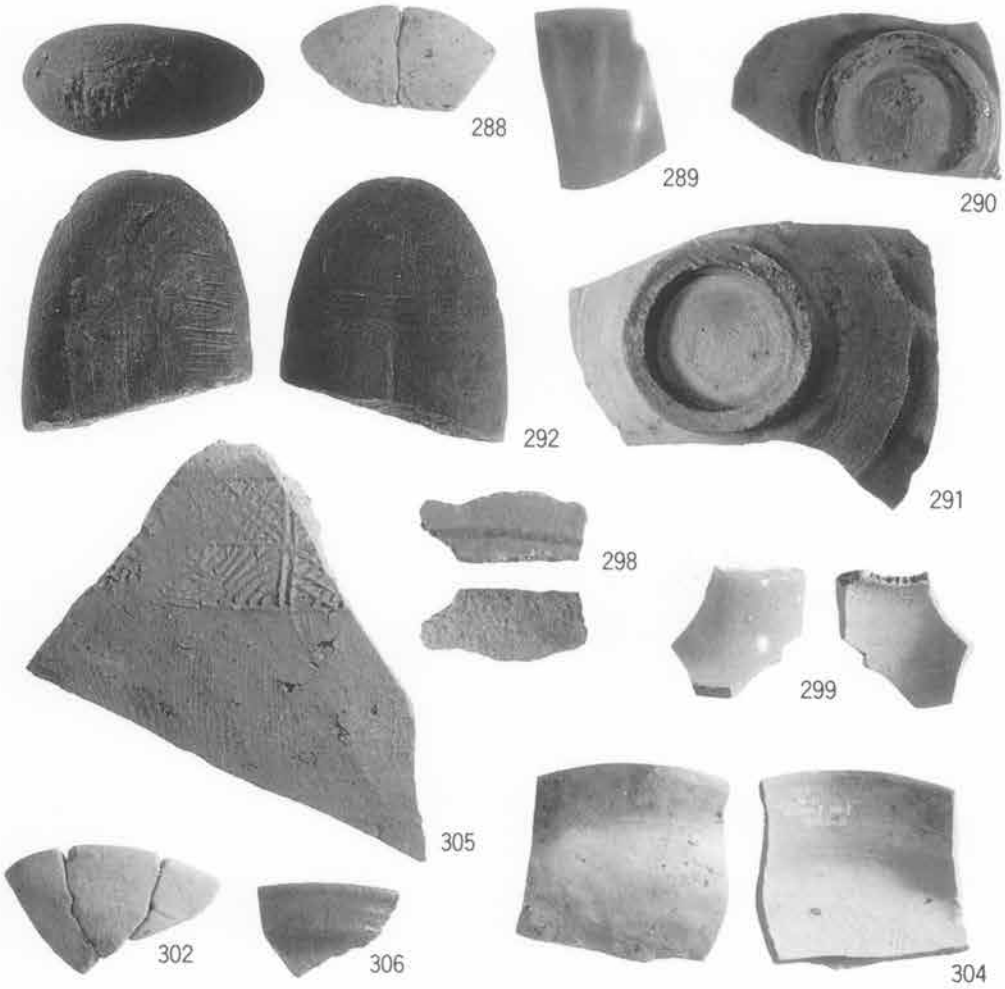
SX201出土土師器①

SX201出土土師器②

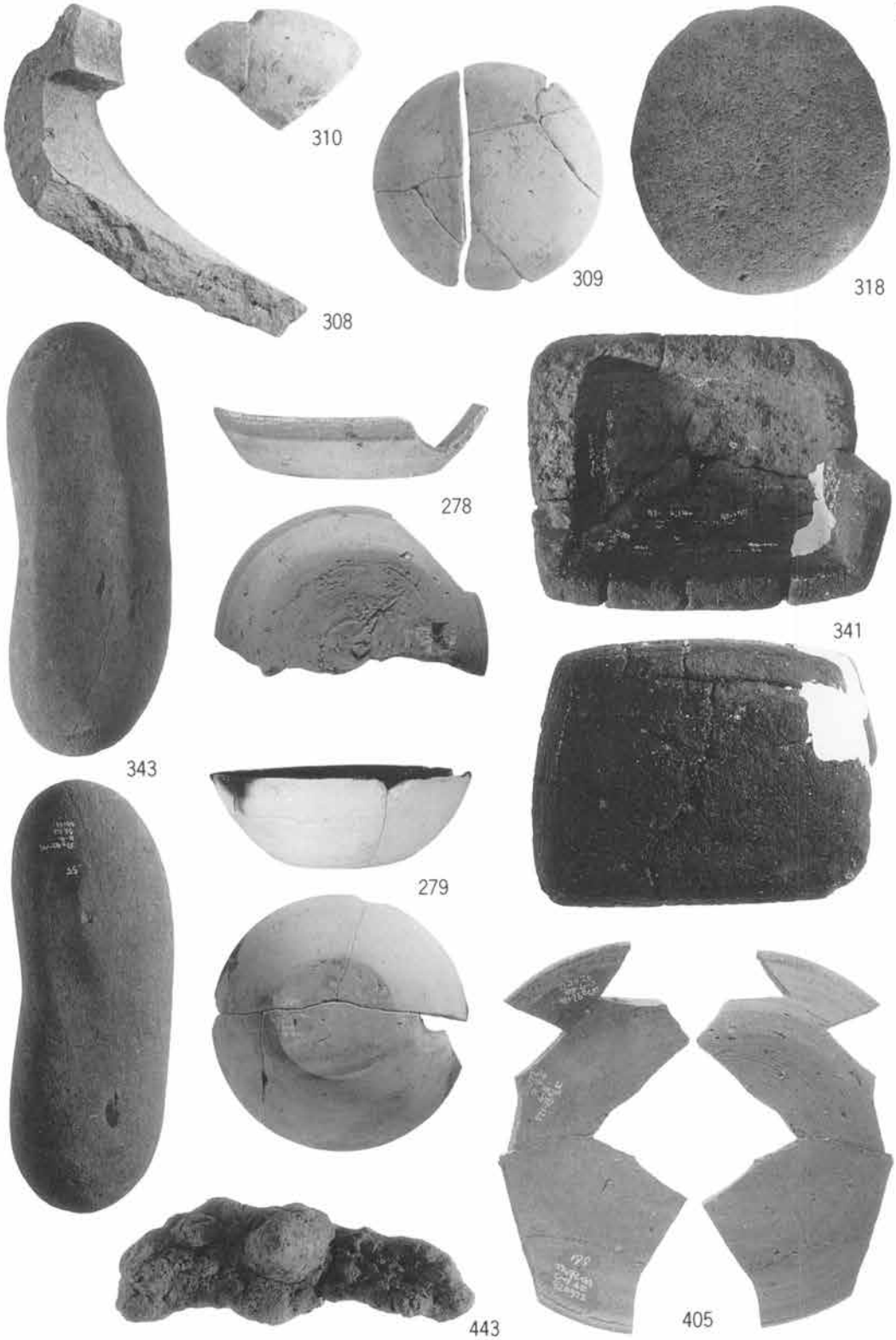
SX202出土土師器③



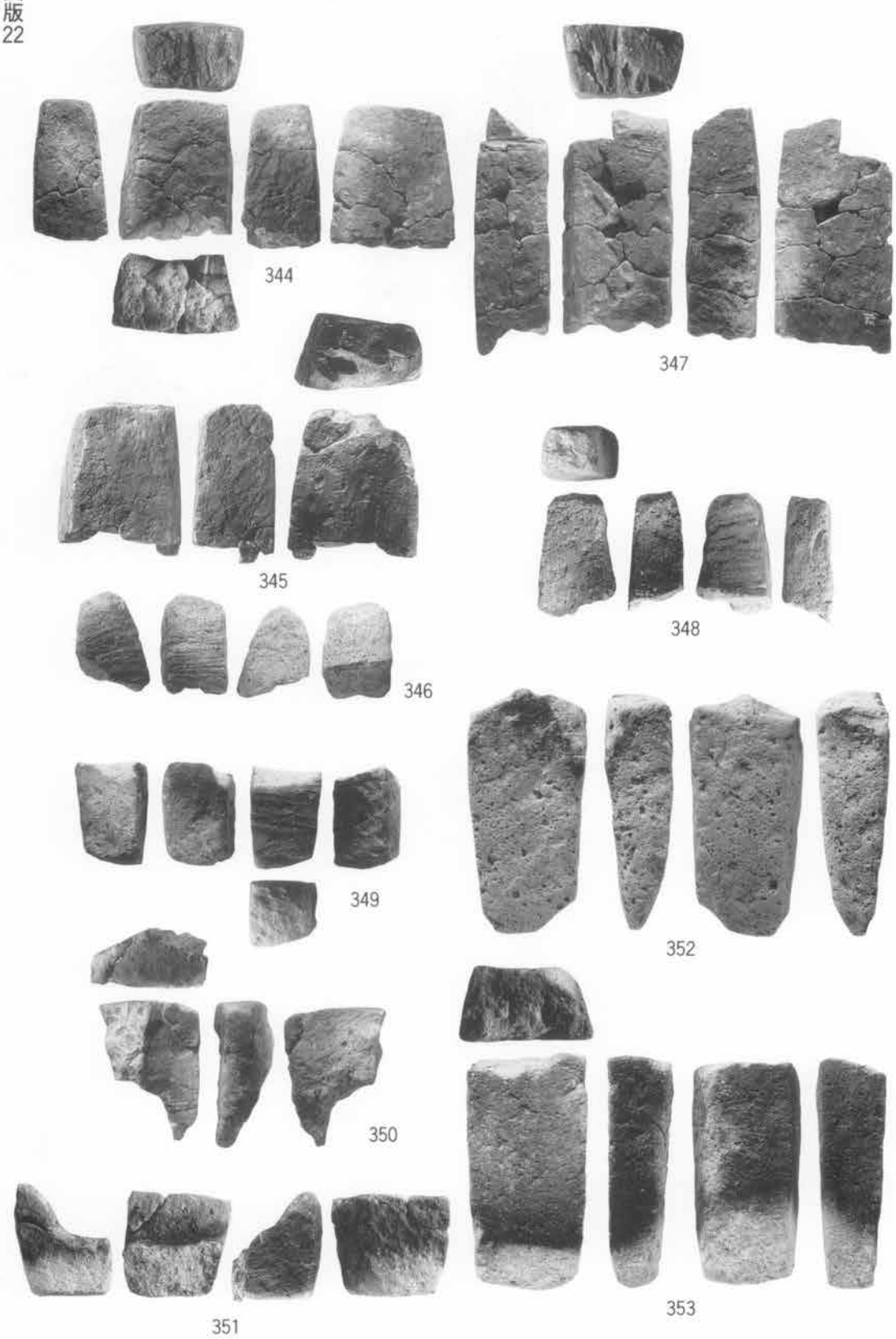
SX202出土土師器②



SX201・202出土遺物



その他出土遺物



その他出土遺物

扇が丘ゴショ遺跡

伏見川中小河川改良工事（高橋川）に係る
扇が丘ゴショ遺跡第１～３次発掘調査報告

発　行　日　1998(平成10)年３月27日
編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921-8044　石川県金沢市米泉４丁目133番地
電話（076)243－7692
FAX（076)243－8988
印　　刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵７－10